

みことばとの会話

小林誠一著

1981年3月1日出版 「みことばとの会話」

序	2
はじめに 略歴	3
新井白石と宣教師しろうて	4
砕かれた心	13
疲労と回復	20
教会とは何をするところですか	26
山の頂上とそのふもと	31
主の祈り	41
愛のカノン	48
主婦サライと奴隷少女ハガル	53
デナの事件	61
信仰の疑惑	68
生活の結実	77
信仰の剣士	84
あとがき	92

福音伝道教団館林キリスト教会

序

財団法人太平洋放送協会理事長、ラジオ牧師
福音伝道教団顧問
羽鳥 明

小林誠一先生は、私の畏敬してやまない同郷・同門の先輩です。

同じ群馬県で、同じように少年の日に回心しましたが、私が社会人になってから献身したのにくらべ、ストレートに献身なさった先生は、セントラル・ジャパン・パイオニア・ミッション(CJPM)のM.A.バーネット宣教師や舟喜麟一先生などの指導のもとにあった、あのなつかしい前橋聖書学寮では、大先輩になります。

修養生時代から、囊中の錐のように、その秀才ぶりを発揮されていたことは語り草となっています。

堅く聖書信仰にたちつつ、すべてに筋道を通されると共に、すぐれたリーダーシップ、経営管理能力をふるわれ、戦後の福音伝道教団の土台作りをされました。長い間、教団の運営委員長と総会議長を兼ねておられましたが、現在は後輩に運営委員長の座をゆずられ、総会議長として指導されております。

今は、長い間牧してこられた館林キリスト教会の牧師として、その牧会伝道と近隣地の開拓伝道に精魂を傾け、地方にかくれもない有力な教会をきずき上げておられ、そのかたわら、中央日本聖書学院で後輩の指導に当たっておられます。

しかし、先生について私がもっとも尊敬しているのは、その説教です。

私たちは福音伝道教団の聖会・修養会などでの先生の説教で養われ導

みことばとの会話 小林誠一著

かれて来ましたが、先生の説教は、私たちの心に喰い入るといふか、全人格をゆさぶる説教でした。人を変えないでは置かない説教でした。

しかし決して感情的(エモーショナル)な説教ではありません。たんとんと語られる先生の説教に、いつも三つの根本的な感想をもって来ました。

(1)、みことばに忠実な、みことばをして語らしめる説教である。

(2)、感情に訴えるより、理性に訴え、しりぞけようのない、すじの通った説教である。しかも、人の心理のひだの奥まで行きとどいた洞察と分析があるので、心がゆさぶられる。

(3)、実際的実践的な説教である。日常生活にかみあわないような説教をきいたことがない。

ことに先生のみことばに対する美しいとさえ言える姿勢正しさは今後ともすべての後輩の学ぶべき点です。そして、みことばに対する緻密な研究、博搜には頭がさがります。先生の選ぶ一語一語は、磨かれた寶石のようで、語られるそのまま本になる説教でした。

一時期、他教団教会の招きに応じ、広く各地におもむかれて説教なさったこともありましたが、大体において一教団一教会に腰をすえてみことばに仕えておられる先生の、説教のほんの一部とはいえ、信徒たちのやみがたい要望に応えて出版されることは、嬉しい限りです。

これを読まれるお一人お一人の魂にみことばのもつ力が増幅されて迫ることを信じて疑いません。

つづいて第二集第三集の世に出されることを願いつつ。

1981年2月

はじめに

自分の毎週の説教が、会衆によって大切に扱われることは、牧師の幸福、そして光栄であると思う。

教会の人たちは、私の説教をテープに取って、何回でも聞いてくれるらしい。

ある人はそれをノートに克明にうつし取って、そのノートがいくらかもふえてゆくらしい。

今度、江森兄がリーダーになって、その中から選んだものを、手分けで、きれいに清書した原稿の形にして持って来た。そして「説教集を出版したいのだ」と言うことである。今、私のやったことは、それらを最終的に整えたにすぎない。

もっとも話と文章とは大分違うから、最初想像したよりは手間がかかって、多忙な牧会の合間に鉛筆を取りながら、二、三か月を要したのも事実だ。

私の生涯と奉仕は、もとよりキリストと教会にささげたものだ。毎週ささげて来た多くの説教と同じく、この説教集もまた教会にささげる。

ある人が言った。

「大教会の牧師になることは、必ずしもすべての牧師に許されないかもしれない。しかし、幸福な教会の牧師になることは、すべての牧師に許されている。」

私は自分が、幸福な教会の牧師であることを感謝している。

小林 誠 一

著者略歴（出版時に表紙の裏に記載された内容）

1917年(大正6)3月、群馬県大間々町に出生。

1932年(昭和7)伝道を開始したばかりの福音伝道協会大間々キリスト教会で入信、翌年受洗。

1937年(昭和12)献身、同協会前橋聖書学寮(現中央日本聖書学院の前身)に入学、親しく、M・A・バーネット、舟喜麟一両師の薫陶を受けた。

1940年(昭和15)卒業以後、群馬、長野、新潟県等で地方伝道に従ったが、戦争中で苦勞ばかり多くてラチが明かず、嗜血をくりかえしていた。

1946年(昭和21)館林キリスト教会牧師に就任、今日に至っている。

1951年(昭和26)から、聖書学院教師として奉仕。

1954年(昭和29)以来現在まで、福音伝道教団年会(総会)議長として奉仕。

1957年(昭和32)から1972年(昭和47)まで15年間は、運営委員長を兼職した。

新井白石と宣教師しろうて（「西洋紀聞」から）

うわさ話

新井白石は、学問をもって徳川家宣(いえのぶ)に仕えた有名な学者です。多くの著述があって現在でも読まれています。彼が美濃紙90枚ぐらいに書いて、本箱の奥深くにおさめ、みだりに人に見せなかった写本があります。

徳川幕府関係に一部献上し、その他学者たちの中には、これを見せてもらって筆写し、所蔵した人もあったようですが、明治までは、まず人の目にふれることのない本でした。しかしそういう珍しい本の存在については、割合に多くの人知っていたそうです。

明治15年、大槻博士の手で出版されて以来、何種かの活字本となり、今は自由に買って読むことができます。

それが「西洋紀聞」と題されたこの本ですが、今日はこの本についてお話ししましょう。

その由来を申しますと、およそ次ぎのとおりです。

宝永5年(1708年)12月のある日、新井白石が江戸城西の丸、将軍綱吉の世子家宣のところに出勤していますと

「九州の屋久島に一人の外国人がやって来た。キリスト教を伝道する目的で来たらしいが、すぐに逮捕された」といううわさを聞きました。

家宣が、

「長崎の役人がだんだん調べたけれども要領を得ないらしい。この人は紙の上にいる区切りを書いて、これが『ローマ』これが『ナンバン』『ロクソン』『カスティラ』だ、などと言っている。ローマというところを指してから、自分の鼻をさして見せるので、『ローマ』から来たに違いない。キリシタンとは邪教のことで、それぐらいはわかるが、『ルソン』『カスティラ』などはとてもわからないらしい」という話でした。

白石は「その人は西洋から来たに違いないが、その言うことが全然わからないというのはおかしい」

「なぜか。」

「実は私も外国のことを少し勉強しましたが、一体に向こうの人は自国の言葉だけでなく、たいてい幾つかの国の言葉を話すものです。それに外国語には共通点があるのでオランダ語がわかれば、その他の言葉もうすうすはわかります。全くわからないということはないでしょう。

それにその人は、日本にキリスト教を伝えるためにやって来たに違いありませんが、日本語が全然わからなくては伝道出来るはずがありませんから、多分、向うで日本語を勉強して来たに違いありません。

今から百年ぐらい前までは、向うの人が自由に日本に来ましたし、日本人でローマの方に行った人もいます。だから向うで日本語を勉強する方法がきつとあるに違いありません。

ルソンといえば『呂宋真壺(るそんまつぼ)』という、『ルソン』から送られてきた壺が、お茶を入れて保存するのに良いので、茶人が尊重しています。そんなところから、『ルソン』のことも少しは聞いています。

『カスティラ』については、『カステラ』という菓子があります。これは、『イタリア』の近くに『カスティラ』という国があって、そこから来たと聞きました。うすうすはその国の様子も聞いてあります。

ですから、その者に日本語で話させ、こちらはオランダ語の通訳を使って、根気よく話を聞いてゆけば、調べられないこともないと思います。」

家宣も「なるほど」とおもわれたのでしょうか。翌年の冬（この間に將軍綱吉は亡くなって、いよいよ家宣が將軍となった）あの外国人が江戸に送られて来て、白石は「責任をもって取り調べるように」という命令を受けました。

そこで白石は、いろいろな本を取りよせたり、オランダ語の通訳を呼んだりして、準備を始めました。そして、この年の11月から12月にかけて、4、5回、この宣教師を尋問しました。これはさすがの白石とて、珍しく貴重な経験でしたから、その記録として「西洋紀聞」を書いたのです。

その当時、キリスト教はご禁制で、島原の乱が終ってから七十年、徳川幕府の徹底的な迫害、弾圧で、日本ではキリスト教は根絶やしになってしまった、と思われていました。白石はこの時の調査で、キリスト教の教えについても徹底的に聞き出したので、注意して、この記録は人に見せないようにしたのでしょう。

キリシタン屋敷

取り調べは、小石川のキリシタン屋敷の中に設けられた役所で行われ、

みことばとの会話 小林誠一著

白石はそこに出張したのです。

さてあの宣教師が引き出されて来ました。

この人は、九州から江戸まで、網をかけたかごで運ばれ、そのあともずっと牢の中にいましたから、歩くことができなくなっています。二人の役人がささえて連れ出し、地面にすわらせるのはかわいそうなので、腰かけさせました。

その身長の高いこと、180センチ以上で、普通の日本人はやっと彼の肩ぐらいです。頭はかぶろ（子供のおかっぱのような髪形）です。髪はわりあい黒く、目が深く鼻は高い。身には茶褐色のつむぎの綿入れを着ています。

最初の調べは軽く、話を通じるかどうかの判断をつける程度でした。

通訳の人たちには、あらかじめよく言っておきました。

「お前たちは通訳を命じられたが、これはローマ人で、お前たちの本職はオランダ語なのだから、よくわからなくても仕方がない。それで『これはこういう意味かな』と思ったら、当てずっぽでもよいからどんどん言いなさい。ふだんなら、当てずっぽを言うと叱られるが、今度は例外だからかまわぬ。遠慮なく皆で協力して、あの外人を理解してゆこうではないか」

さて実際に話を始めてみると、白石の見こみどおりで、全く話を通じないということはありません。取り調べはできると判断がついて、まず最初の尋問は終わりました。

その最初の尋問の時です。白石は役人に向かって、

「この男は寒そうではないか。もう少し着物を着せてやらないとかわ

いそうだ」

と言いました。役人は

「そのことでございますが、われわれがもっと着物を着るように言っても、この人は承知しません。『なぜだ』と聞きますと『私はクリスチャンでない人からなるべく物をもらいたくない。ただ食物がないと伝道できないので食物はもらうが、着物は最初にもらったこの着物で十分間に合うから、ご心配にはおよばない』と、かたく辞退しているのです」

その時、この人が「特にお願ひしたいことがある」と白石に言います。

「何だ」

「実は私がここに来てから、非常に嚴重に警護されている。ある人は徹夜で見はりをしている。多分、私が乱暴したり、逃げ出すといけないので、責任上おやりになっていると思うが、私はキリスト教の伝道のために、はるばる海山を越えてローマからやって来たのだから、逃げるはずはない。また、私のような者が逃げたってすぐにつかまるのはわかっている。昼間は仕方がないが、夜はみんなを休ませてほしい。どうしても心配ならば、私をしばっても足かせをかけてもよいから、夜はみなさんがお休みになれるようにして下さい。」

これを聞いたまわりの人々は、非常に感動したようでした。

ところが白石は「この男は様子に似合わずうそつきだ。」

彼はさびしそうに

「正直でないのは、人間としてもっとも恥ずかしいことだ。ことにキリスト教の教えでは、うそはもっともいやしいこととしてある。あなたはなぜ私をうそつきと言うのか。」

みことばとの会話 小林誠一著

「今あなたは、自分の身のまわりを警護している人が気の毒だと言ったが、それは本当か。」

「本当です。」

「しかし彼らは上官の命令で、あなたの身にまちがいがないように守る責任がある。その上官もそのまた上の上官から命じられて、それぞれの責任を果たしているのだ。その人が『寒くてかぜをひくといけいから着物を着なさい』と言う。これはやはり責任上から、あなたにかぜをひかせまいという配慮だ。それを断わって、かぜをひいても、腹をこわしてもかまわぬと言うなら、まわりの人がいくら骨を折ってもかまわないでおいたらよい。もし、まわりの人の責任についてあなたに思いやる心があるなら、すなおに食べる物は食べ着る物は着て、自分の身を大切にすることがまわりの人に対する配慮ではないか。それをかまわないのなら、あなたのために何十人の人が骨を折ったとてかまわないはずだ。」

「先に申すこと誠ならば、後に申せしこといつわりなり。後に申せしこと誠ならば、先に申せしこといつわりなり」

と、こう白石に言われて、この先生、白石に一本取られました。

「たしかに、あなたのおっしゃるとおりです。私の思慮が足りませんでした。では、絹とか毛織物はかんべんしていただいて、綿入れの着物ならば、おっしゃるとおりに着ます」

こういうことで、最初の日は終わりましたが、白石はだんだん様子を見て、「この人は非常に真実で謙遜な人物だ。小さいことでも、それが良いとなれば、すなおに服従する。」

「謹懃（きんかく）にして、よく小善にも服す」と、こういうことを

書いています。

長介とお春

この取り調べの間に、人々にすすめられて、あの外国人の収容されている牢の方も視察しました。一体この「キリシタン屋敷」は別名「山屋敷」とも呼ばれ、以前に宣教師やキリスト信者などを、押しこめておいた牢獄でした。

すると白石の前に、真白な髪をした一組の老夫婦が出て来て、地面に両手をついてひれふしました。

聞いてみると、彼らは長介とお春といい、それぞれ牢の中で生れたとのこと。そんな人間が、一般の社会に出ても暮らしてゆけないだろうという役人のあわれみで、牢屋の中の雑用をさせ、生活ができるようにしたのです。

特にこの二人はキリシタン屋敷に連れて来られ、捕らえられたクリスチャンたちの世話をさせられました。彼らはクリスチャンになったわけではありませんが、世の中に出て、キリスト教のことを話しまわってはいけないと言うので、この獄内で夫婦にさせ一生「飼い殺し」することになっているのです。かわいそうな夫婦ですね。

さて、だんだん尋問が進んでゆく間に、更に白石が感心したことは、彼の学問でした。「この人物はよほど学問のある人らしく、実に多くのことを知っている。天文、地理などに至っては、とても私たちの及ぶところではない」と書いています。

白石は幾つかの例をあげていますが、ある時

みことばとの会話 小林誠一著

「いま何時ごろか」

と家来にきくと

「さあこの辺にはお寺もなし、お城も遠いため、時の鐘を聞くことができないので、時間はわかりません。」

するとそばで聞いていた外国人は、まず太陽を見て、次に庭にうつっている自分の影を見て、指を折りながらしばらく計算していましたが

「私の国の暦で言えば、ちょうど 年 月 日の、時 分ごろです」と言いました。

白石もこの「勾股（こうこ）の法=今の三角関数」という計算法を知っていましたが、こんなに早く計算できるのはすばらしい、と感心しています。

それから地図をひろげて

「お前の生れた国はどこだ」

と尋ねると、その地図を見て

「これは珍しい。七十年も前に出版された地図だ。私の国に行ってもこんなに古い地図はなかなか買えない。貴重品だから、よく裏打ちをして大事にした方がよい」

こんなことを言いながら、何かを求めららしい。

「ローマではチルチヌスだが、オランダ語ではパツスルという物が必要だ」

と説明しますがわかりません。

こんなこともあろうかと、白石はふところの中にコンパスを持っていました。

「これか」

「そうだ、大分ネジがゆるんでいるが使えないこともない」

彼はそのコンパスで地図の縮尺のところを計ると、くもの巣のような地図にコンパスを立てて、順々に方向をたどってゆきます。そして、本人には見えないほど遠くひろげた地図の一か所にコンパスの針を立てて

「この辺だと思えます」

白石がそこを扇子で突いてみると、針の頭ほどのところに「ローマ」と書いてあります。

「それでは当地はどこか」

と尋ねると、同じようにして針を立てたところを見ると、ちゃんとむこうの字で「エド」と書いてあります。そんな話を幾つも白石は記録しています。

「オランダの軍艦は、舷側に窓が三段についていて、その窓から大砲が一つずつ出ています」

それを、一生懸命手まねをまじえて説明するのですが、だれにもわかりません。

白石が左手の四本の指の間から、右手の三本の指を出して

「大砲がこうなっているのか」

と言ったら

「そうだ、殿様は賢い。ここにいる人たちの中で、あなたが一番頭が良い」

と白石を大変ほめました。

まずこんな調子で、時間をかけながら、調べていったわけです。

恋泊（こいどまり）の藤兵衛

さてこの外国人宣教師が、日本で見つかったその時の様子はどうでしょうか。そのことは、当時の屋久島や長崎の、代官や役人の調書、報告書、その他に記録されています。

鹿児島県の南の方に屋久島という島があります。この島は雨量の多いことと、屋久杉で有名ですが、その島の近くで漁師たちが魚を取っていると、帆を何段にも張った、見なれない大きな船が近づいて来ました。漁師たちはこわがって逃げて来ました。

赤ちゃんをおんぶしたおかみさんたちも、海岸にいたとき、大きな船が接近して来るのが見えましたが、珍しがって見ているうちに船は消えてしまいました。

そんなうわさのあった翌日のこと、宝永5年8月29日、恋泊という村の藤兵衛という人が、近くの山に炭焼きに行っていました。炭に焼く薪を切っているとだれかに呼ばれました。

振り返ってみると、そこに背の大きな、顔つきの違う、目つきの変な人が、一生懸命手まねきしているではありませんか。おっかなびっくりそばに寄ってみると、ちょんまげをゆって、紋付きの着物を着て、腰には刀をさしています。気味わるくて仕方ありません。その男は、刀をさしているので藤兵衛がそばに来ないと思ったのか、さやのまま刀を腰から抜いて投げてよこしました。

聞いてみると「水がほしい」と言うので水をやりました。そして村へ飛んで帰って「山に変な奴がいるぞ」と言いふらしたのです。

今度は力自慢の男を二、三人連れて引き返しました。

「どうも腹がへっているようだ」

というので、どうにか自分の家に連れてきて、ごはんを食べさせますと、喜んでごはんを食べ、ふところの中から、小判よりも小さいお金を出してくれました。

「これをもってはまずい」と思ったので断りました。

がやがややっているうちに、うわさを聞いて役人がやってきます。そのころは外国人の渡航は、オランダ人が長崎へ来る以外ご禁制ですから、すぐ逮捕し、小さな牢を造ってそれに入れました。

あちこちの役所におうかがいを立てた結果、外国人を取り調べるのに一番都合のよい長崎に護送することになりました。

小さな牢に入れたまま、舟で長崎へ連れて行き、いろいろ調べてみるがらちがあきません。これが江戸の將軍家の耳にも入り、先の白石の発言となります。そこで結局、江戸に護送して白石に取り調べさせることになった次第でした。

白石が名前と国を尋ねると

「私はヨワン・バテスタ・シローテ。ローマのパライルモの人です。」

「父母はいるか」

「父は11年前に死に、母は65歳です。」

「兄弟は」

「四人いるが、そのうち二人は死にました。」

「お前の年は幾つか」

「41歳になります。私は子供の時からキリスト教の教えを受けて育

みことばとの会話 小林誠一著

ち、22年間勉強しました。6年前宣教師の任命を受け、日本に伝道のため派遣されることになったので、3年間は、日本語や日本の風俗のことを学びました。いよいよ日本に向かって出発しましたが、3回難船して失敗し、しかしどうにかフィリピンにたどりつきました。」

昔、今ほど外国との行き来がきびしくなかったころ、日本人の渡航者が東南アジア辺に住んで、日本人町を作っていました。また鎖国時代になっても、密航、密貿易は絶えなかったのです。シローテはフィリピンで、更に日本語を学び、和服など必要な物をととのえ、頭も、変なちょんまげでも、とにかくちょんまげにゆったのです。

やがて便船を得て日本の向かったのですが、日本の近くでポートをおろしてもらい、一人でポートを漕いでやっと屋久島に着いたのです。数年来の念願がかなったのですが、すぐに逮捕されたのは、やむをえないとは言え残念なことだったでしょう。

「お前は自分の家族のことを考えるか。」

「私は任命を受けてから、どうして日本に行こうかと、そのことばかり考えていました。私の家族もみな応援してくれました。」

シローテはそう言いさしてから、しばらく黙って言葉が出ませんでした。よほどたってから、自分の体をなでつつ、

「私の体は家族から受け取った大切な体です。私は死ぬまで自分の家族を忘れるはずはありません」

と言った時は、さすがにさびしそうでした。

「お前は日本に来るに当たって、どういう覚悟をして来たか。」

「私は三つの覚悟をしてまいりました。第一は、もし伝道ができれば

9/92

こんなにうれしいことはありません。三人でも五人でもよい。キリストのことを伝えたいのです。第二は、しかしながら日本はキリスト教禁制の国です。自分がつかまって殺されるならば、それもやむをえません。自分の宗教の教えでは『その国に入ったらその国の法律に従え』というのが建て前ですから、その国の法律で死刑になるのなら、もとより覚悟の上です。私の魂は神様に、私の体は日本の国にまかせます。第三に、これが一番残念なことですが、このまま私が追い返されしまうなら、聖書にも『すべてのわざには時がある』と書いてありますから、今はその時がまだ来ていないのだ、とあきらめるよりほかありません。」

こういうことでした。

尋問がだんだん進んで

「今からお前の信じているキリスト教の教えのことを聞くから、話してみよ」

ということになりますと、シローテは喜んで

「ちょうど今、私の国ではクリスマスを祝っているところです。私はただただ、このことを伝えたいばかりに日本にやって来ました。けれども今までは、国々の学問や政治、また軍隊などのことばかり質問されて、キリスト教のお話ができませんでした。では聞いて下さい」

と言って、ていねいに聖書のお話を始めたのです。

ところが白石は

「この人は学問があり賢明でりっぱな人なのに、キリスト教の話を始めると、馬鹿みたいなことばかり言う。あの賢明な人間と馬鹿なやつが入れかわり、まるで別人の観がある。」

みことばとの会話 小林誠一著

知愚たちまちに地を易へて、二人の言を聞くに似たり と書いています。

一緒に天国へ

さて尋問がいちおう終わり、

「ではこの人をどう処置しようか」

という協議になった時、白石は次のように件言しました。

「この者は間違った教えを心から信じている。しかし、ひとたび命令を受けるや、身を捨て命をもかえりみず、老母や兄姉に生きながら別れ、以後六年間、患難陰阻をものともせず、ここまでやって来たことは、その志もっともあわれむべきである。これは主命のためにおのれの命を捨てる、われわれ日本人にもよくわかることだ。こういう人を死刑にするのは人道ではない。追い返しても、これだけの男だから、また、きっと来るに違いない。それゆえ注意深く監禁して、この地で生涯を終えさせるのが一番よい。」

これが受け入れられて、宣教師シローテはキリシタン屋敷に幽閉されました。

テレビドラマなどでしたら、殴られたり、蹴られたりしていじめられる場面ですが、昔の役人も案外紳士的で、シローテは別にいじめられることもなく、キリシタン屋敷に住んでいました。ただどこにも出られず、閉じ込められたままで、本当に気の毒でした。

そのまま7年ばかりたちました。するとある日、例の長助、お春の老夫婦が役人の前に出て申しますには

「まことに申しわけありませんが、私たちはクリスチャンになりました。」

役人が驚いて

「一体どうしたのだ。」

「はい。私たちは以前から、牢に入れられた宣教師やクリスチャンたちの世話をすることを命じられたので、その仕事をしてまいりました。クリスチャンはみなりっぱな人たちで、自然にその教えのことも耳にしましたが、きびしいご禁制ですから、恐ろしくて、私たちはクリスチャンにはなりませんでした。」

それが今度、シローテ先生のお世話をすることになって、先生の様子を見ていると、まことにやさしく、真実な、りっぱな方です。それからだんだんお話を聞いているうちに、これはまことに正しい教えだと思うようになりました。

私たちはもう老人ですから、間もなく死ななければなりません。一体世の中に、だれが不幸だ、さびしい身の上だと言って、私たちほどあわれな者がありませんか。どうしてこんなはかない地上の命を惜しみましょう。キリストの教えを信じて天国に行けるのなら、私たちもキリストを信じようと決心をいたしました。黙ってはいけいので、白状いたします。いかようにも処分して下さい。」

大変なことになりましたので、関係者一同大いに怒り、長助とお春を別々の牢に押しこめました。またシローテ先生も、以後きびしく監禁されることになりました。

ここに至って、あの紳士的だったシローテ先生も、その「真情、敗露

(あられ)して」牢屋の格子にとりすがり、

「長助さん、お春さん、私の声が聞こえますか。あなたがたは、どんな目にあわされても信仰を捨ててはいけません。殺されても、最後までキリストを信じ通して、一緒に天国に行きましょう。私の声が聞こえますか」

と、聞こえるか聞こえないかわからないのに、夜も昼も毎日叫び続けました。

10月7日に長助が死に、次いでお春も死に、2週間後の21日の深夜、シローテ先生も亡くなりました。長助は55歳、シローテ先生は47歳だったそうです。

新井白石はこの珍しい体験について、深く感じるころがあったに違いありませんが、ただ事実を書物に記して本箱の奥深くにおさめておきました。

昔、アグリッパ王は、囚人パウロのあかしを聞いて「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と叫びましたが、同じように、シローテのあかしは白石の心に迫ったのでしょうか。

あるいは白石は結局、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしなものにする』と書いてある」と言われたように、その賢さのゆえに、福音をあなどる立場を選んだのでしょうか。

しかし、「この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち無きに等しい者」である、長助、お春は「あえて神に選ばれ」救いを受け

ることができたのでした。

長助とお春、そしてシローテ先生は、いくらも間をおかないで天国に行きました。

栄光と慰めにあふれる天国で、三人が出会った時の喜びはどうでしょう。

長助とお春は、一生の間、だれに対しても頭を下げづめでしたが、天国では、今度こそしんそこからシローテに頭を下げて「先生、どうもありがとうございます」とお礼を言ったでしょう。

その時「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」というキリストの言葉は、そのままシローテ先生のものでした。

私は最後に二つのみ言葉を引いて、お話を終わります。その一つは

「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」(マタイ16章26節)

というキリストのみ言葉です。

シローテが日本に伝道したのは、時期としては最悪でした。上陸の翌日逮捕されて、亡くなるまで八年間、伝道は許されず、牢の中で暮らしました。彼がしたことは、祈ったことと、白石にあかしたことと、長助、お春を信仰に導いただけでした。働きの結果としては、外面的に見れば、最低に近いでしょう。

しかし、一人の人の魂を全世界よりも価値ありと、愛によってはかりたもう神様の評価は、それとは全く違って、シローテの奉仕を尊く価値あるものと認めて下さるでしょう。

もう一つは、使徒パウロが殉教の直前、ローマの獄中から愛弟子テモテに送った書簡の一節

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励みなさい。」(第2テモテ4章1、2節)

です。

私たちは、パウロにせよ、シローテにせよ、これらの先人たちのあかしと教えによって、熱心に忠実に伝道しなければならないと、強い励ましを受けるのです。

砕かれた心（詩篇 5 1 篇）

美しい悲しみ

私は先週いっぱい、今日のお話の準備のために祈りつつ、何回この詩篇を読んだかわかりません。何という美しい、魅力的な詩篇でしょう。これは苦しい悔い改めの詩篇です。でも人が喜んでいる時の美しさもあります。また美しい悲しみもあります。ことに、自分の罪について真剣に悲しんでいる姿はりっぱだと感じます。

この詩篇を作ったダビデは、一国の国王ですが、国王ともあろうものが、こんなにすなおに、謙遜に、真実に、自分の犯した罪を悲しみ悔い改めているとは、何と美しいことではありませんか。

ですから、昔から多くの聖徒はこの詩篇を愛しました。

アウグスティヌスは、17節の

「神の受けられるいけにえは砕けた魂です。

神よ、あなたは砕けた悔いた心を

かるしめられません」

というみ言葉を自分の部屋に掲げておきました。

ウィリアム・ケアリは

「私のお葬式には、詩篇 5 1 篇 1、2 節をテーマにして説教をしてもらいたい」

と遺言したそうです。

言うまでもなく、この詩篇のテーマは「悔い改め」ですが、「悔い改め」は、クリスチャン生活の大きなかなめの 1 つです。

キリストの先駆者、バプテスマのヨハネは

「今、救い主イエス・キリストが私たちの中にいらっしゃる。私たちは救い主を迎える心備えをしなければならない。それにはまず、自分の罪を悔い改めなければならない」

と、非常に激しい調子で、人々に悔い改めを迫りました。

キリストご自身も、ガリラヤ地方で伝道を開始された時の最初のメッセージの要約は、

「悔い改めよ、天国は近づいた」

であったと記されています。

使徒パウロも、長い伝道生涯の間、たくさんの説教をしましたが、そのメッセージは要するに

「ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである。」

と、その告別説教の中で言っています。

では、その大切な「悔い改め」とはどういうことでしょうか。それは、自分の罪を神様に向かっておわびすること、その罪のために、私たちの見代わりとなって、十字架にかかってくださった、イエス・キリストを、自分の救い主として信ずることです。

世界万民のために十字架におつきになり、死から復活して下さったキリストの、すべての人の罪をゆるし、すべての人を受け入れて下さる救いは、私たちの悔い改めと信仰によって、初めて私たちに当てはめられ

ます。

悔い改めない人たちには、キリストの十字架の救いも無効であって、その人は神様の恵みからおきざりにされてしまうのです。

ある人が

「悔い改めは、救いを受け取る右の手で、信仰は左手だ」

と言ったのも、同じ意味でしょう。

これを欠いたら、専門の聖書学者でも救われることができません。また、罪を悔い改めてキリストを信ずるならば、どんな極悪人でも救われます。

ですから

「あなたは悔い改めましたか。キリストを自分の救い主と信じていますか」

という質問は、

「あなたはクリスチャンですか」

という質問と同じなのです。

ダビデとバテシバ

この詩篇の題に

「これはダビデがバテセバに通った後預言者ナタンが来たときによんだもの」

とありますが、これが、ダビデ王によってこの詩篇が作られたいきさつです。

このお話は、旧約聖書、サムエル記下、11, 12章に出っていますが、

みことばとの会話 小林誠一著

ダビデ王と、その部下の將軍の妻バテシバとの、恋愛物語です。

かいつまんで申しますと、戦争がありましてイスラエル軍は出動して行きました。しかし、この戦争はほとんど勝利ときまったようなものでしたから、ダビデ王は出陣せず、王宮におりました。

ある日の夕方、ダビデ王が昼寝から起きてバルコニーに出ますと、王宮に近い一人の將軍の家で、若い美しい婦人が体を洗っているのが見えました。

ふと心を動かしたダビデ王が調べさせると、あの婦人は、出陣している將軍ウリヤの妻で、バテシバというものであることがわかりました。

ダビデの心は不思議に動揺しまして、多少の経緯の後、ダビデはこの婦人と不倫の関係を結び、やがて彼女が妊娠した、という事態になって来ました。

そこでこれをごまかそうと、戦場から將軍ウリヤを呼び戻します。たくさんのお土産をします。休暇を与えて家に帰そうとしますが、忠義一徹のウリヤは「神にも戦友たちにも申し訳ない」と言って家へ帰りません。

もてあましたダビデ王は、結局、参謀総長のヨアブに「ウリヤを戦死させろ」という命令の手紙を書きます。何にも知らないウリヤは、その手紙を持って戦場に戻り、ヨアブにわたします。その結果、ウリヤは危険な戦場で戦死してしまいました。事実上の謀殺です。

さてその結果、バテシバは未亡人になりましたから、ダビデ王は彼女を王宮に入れ、妻妾の中に加えました。ダビデ王の寵愛が彼女の一身に集まったことは言うまでもありません。

ひどい話ですが、これだけの話をして、うすうす気づいた人がいても、だれ一人忠告する者はいません。二人は愛欲におぼれた数か月をいちおう無事に過ごしました。

ここに「預言者ナタン」という人が出て来ますが、この人はダビデ王をはじめ宮廷を宗教的、靈的に指導する、言わば宮廷牧師です。

この人が長い、深い、苦しい祈りの末に、ある日ダビデ王のところに来ました。

「王様聞いて下さい。私の知り合いに一人の貧しい羊飼いがいます。一頭の雌羊をかわいがっておりまして、一枚の皿で一緒に食事し、一つのベッドで一緒に休み、まるで自分の娘のようにしていました。

その隣に、何千頭も羊を持った金持ちがいますが、ある日来客があつて、おもてなしに羊を一頭殺さなくてはならなくなった時、自分の羊を惜しんで、あの貧しい羊飼いの、たった一頭の雌羊を取り上げて殺し、自分のお客のためにごちそうを作ってもてなしました。かわいそうに、貧しい羊飼いは泣き寝入りです。

王様、あなたの治めている国に、こんなことがあってもかまいませんか。」

ダビデ王は怒りました。

「神様はお見通しだぞ。そのひどい金持ちは殺してしまえ。そのかわいそうな貧しい羊飼いに対しては、損失の四倍の補償をさせよ。」

その時、ナタンは王を指さしました。

「あなたこそ、その人ですぞ。」

そして、あの恐ろしいバテシバとの姦通、ウリヤの謀殺について、激

みことばとの会話 小林誠一著

しくダビデを糾弾しました。

ここでダビデは心を刺され、深刻な悔い改めに至るのですが、実はその前、あのバテシバとの愛欲の期間も、ダビデは人知れず良心の呵責(かしゃく)に苦しんでいたのです。

それを彼は、詩篇 3 2 篇 3、4 節に次のように告白しています。

「わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、

ひねもす苦しむうめいたので、

わたしの骨はふるび衰えた。

あなたのみ手が昼も夜も、

わたしの上に重かったからである。

わたしの力は、夏のひでりによって

かれるように、かれ果てた。」

しかし今、ナタンを通して、神はその罪をするどく示され、心砕かれた彼は罪を告白し、悔い改めることができました。その悔い改めの真情が詩篇 5 1 篇に記されているのです。

「姦淫と殺人」「愛と憎しみ」は、人間の感情、欲望の中で最もするどく深刻です。それゆえ、いつも小説や映画のテーマになっています。そして同時に、これはいつも人間の罪の機会です。

罪の白アリ

私たちはダビデのような、具体的な姦淫や殺人を犯してはいないかもしれませんが。

しかし、それらの罪の芽、あるいは卵はだれの心の中、あるいは生活

の中にも隠れています。そして、それらの罪は言わば未熟の形で、だれの心にもおぼえがあるのではないのでしょうか。

マタイによる福音書でキリストは教えておられます。すなわち5章21節

「昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう。」

27節

「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」

ダビデはあの罪の期間、身は罪の楽しみの中にも、心は苦しんでいました。しかしそれだけではなく、ダビデの値打ちも下降線をたどっていました。彼は神様から多くの賜物をいただいている有能な人物です。一介の牧童から身を起こして、今や国王になっているのです。しかも国威はあがり、民は豊かに、彼はイスラエル史上最高の黄金時代をもたらしました。そのすべては神様の祝福によるものでした。

しかし、今や神の祝福は失われようとしています。国民に対する感化力、指導力も失われようとしています。国民の一致と団結、神とダビデ王に対する忠誠心にもヒビが入るでしょう。第一、このあと、ダビデの家庭に、続けざまにもめごとが起こり、とうとうアブサロムの反乱とい

みことばとの会話 小林誠一著

う事態まで引き起こされます。その原因の一つは、この時の事件にあったと言わなければなりません。

どんなに堅固な城があっても、どんなに有力な家来があふれていても、ダビデ王が白アリに食われた大黒柱のようになってしまっただけでは、崩壊は必至です。罪というものは、及ぼすところの影響が非常に大きいものとなります。

ですからここで、ナタンが神様から遣わされてダビデに罪を示し、ダビデが深刻に悔い改めたということは、神のあわれみであり、ダビデ王の救いでもありました。また罪の最中でもダビデ王の良心は目ざめて、ダビデ王が内心苦しんでいたことも、神様の恵みというほかはありません。

今やダビデは、悔い改めて立ち直ることができました。

ゆるしがたい罪でしたが、心からの悔い改めと、信仰によって、神は罪をゆるし、受け入れて下さるのです。悔い改めの間、またゆるされた確信が与えられるまでの間、苦悶も不安もあったでしょうが、しっかり心が立ち直ることができた時、ダビデの喜びは非常なものでした。

詩篇32篇1、2節

「そのとががゆるされ、
その罪がおおい消される者はさいわいである。
主によって不義を負わされず、
その霊に偽りのない人はさいわいである。」

その時ダビデは、重い病気が直った人のようだったでしょう。どんなにすばらしい生活も、病気になったらおしまいです。病気が直った時に

16/92

「ああ健康は良いものだ。健康はすばらしい」
と思うように、今さら罪の恐ろしさと、ゆるされたことのすばらしさを感謝したでしょう。

生れながらの罪人

さて、詩篇51篇の内容について、少しお話ししましょう。1節から4節

「神よ、あなたのいつくしみによって、
わたしをあわれみ、
あなたの豊かなあわれみによって、
わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。
わたしの不義をことごとく洗い去り、
わたしの罪からわたしを清めてください。
わたしは自分のとがを知っています。
わたしの罪はいつもわたしの前にあります。
わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、
あなたの前に悪い事を行いました。
それゆえ、あなたが宣告をお与えるになるときは正しく、
あなたが人をさばかれるときは誤りがありません。」

ダビデの罪は第一にウリヤに対して、次にバテシバに対して犯されたものです。同時に国民の信頼、家族の信頼を裏切りました。

そして自分自身をもきずつけ、そこないました。

しかしこれは「神の前に」犯した罪であることが、最も重大でした。

ですから、後悔することも、人にあやまることも大切ですが、神様に悔い改めることが一番大切なのです。

人間は、罪を犯すと、自分自身で後悔します。人に対しても「悪かった。気の毒をした」と言います。そういうことはわかりやすいのですが、「私は神様に対して罪を犯した」という自覚が生じて、神様に対して恐れを抱くとすれば、それが救いの第一歩です。そして、それを私たちに感じさせて下さるのは、神様の恵みの第一歩なのです。

ダビデ王は、ナタンを通して語られた神のさばきの声に「神のさばき、神の宣告は正しい」と平伏して、自分は説明したり、つべこべ言い訳をしたりしないで、砕かれた心で、正直に悔い改めたのでした。

5 節

「見よ、わたしは不義の中に生れました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました。」

ダビデが祈りのうちにだんだん反省してまいりますに、自分はバテシバと姦淫し、ウリヤを殺したことによって、初めて罪人になったのではない。実は罪の根はもっと深く、もともと罪人だった人間だから罪を犯したにすぎないのだとわかったのです。子供の時の記憶にさかのぼってゆくと、「私は両親から、罪の性質を受け継いで生れて来た。最初から良い事をするのはニガ手で面白くなく、悪いことは楽しくゆかいで、勢いがついた。だから清い生活、正しい生活をしようと志しても、それはなかなかむずかしかった」と。これはもともとわかっていたことだったので、大罪を犯してしまった今こそ、それがよくわかりました。結局、一番恐ろしいのは自分です。

だから自分にとって必要なのは罪をゆるしていただくことだけでなく、救われることです。それゆえ、ここに「私を救って下さい」という祈りがあったと思います。

もちろん、厳密な意味でダビデが救われたのは以前のことだったでしょうが、今またそれを祈らなければなりませんでした。

7 節

「ヒソブをもって、わたしを清めてください。

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください。

わたしは雪よりも白くなるでしょう。」

イスラエルの礼拝制度には、たくさんの儀式がありました。

その大部分は、「人間は罪をゆるされ、罪を清められなければ神を礼拝することができない」という原則を示すために定められていました。

ライ病人のきよめ

ライ患者は、特に汚れ、呪われた者として、礼拝にも参加できず、市民生活も許されず、いわば追放の生活をしていたのです。

しかし、もしライが直れば、礼拝も市民生活も許されるのですが、その時に、祭司は「ヒソブをもって」この人を清める特別な儀式を行わなければなりませんでした。

ですから、多くある儀式の中でも、これは、最低の人のために備えられた儀式だったのです。

一国の国王でありながら、たとい密室の祈りの中であるとは言え、ダ

みことばとの会話 小林誠一著

ビデ王が「祭司がライ患者をヒソブで清めるように、罪人の私をヒソブで清めて下さい」と祈ったとは、何という謙遜真実な態度でしょうか。

神様はこの祈りを受け入れて下さったのです。

8 節から 12 節

「わたしに喜びと楽しみとを満たし、

あなたが砕いた骨を喜ばせてください。

み顔をわたしの罪から隠し、

わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。

神よ、わたしのために清い心をつくり、

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。

わたしをみ前から捨てないでください。

あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。

あなたの救の喜びをわたしに返し、

自由の霊をもって、わたしをささえてください。」

どんなに罪のために失おうとした神の恵みが尊かったでしょうか。どんなに罪のために陥ろうとした滅亡が恐ろしかったでしょうか。神様とのさまたげのない交わりが、どんなに甘美な祝福であったでしょうか。今どんなに飢え渴いて、のどの渴いた人が水を求めるように、ダビデはそれを求めていることでしょうか。本当に

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう」(マタイ 5 : 6)

のみ言葉のとおりです。

14 節から 16 節

18/92

「神よ、わが救いの神よ、
血を流した罪からわたしを助け出してください。
わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。
主よ、わたしのくちびるを開いてください。
わたしの口はあなたの誉をあらわすでしょう。
あなたはいけにえを好まれません。
たとえわたしが燔祭をささげても、
あなたは喜ばれないでしょう。
神の受けられるいけにえは砕けた魂です。
神よ、あなたは砕けた悔いた心を
かるしめられません。」

私たちは決して失敗を好むものではありません。間違いをしないよう
に気をつけ、罪を恐れる気持ちは真剣でなければなりません。

自分の心と生活をさぐって、神のみ心にかなわないものがないか、と
いつも心配するまじめさは大切です。

しかし、失敗したときの謙遜な、正直な悔い改めも大切です。自分も
弱く、しかも悪い世に住んでいる私たちは、悔い改めなしに信仰生活を
全うすることはできないでしょう。

しかも神様は百万のささげ物、供え物にまさって、砕けた魂、真実に
謙遜に罪を悔い改める砕けた魂を、尊重し受け入れて下さるのです。

詩篇 5 1 篇は私たちに罪の恐ろしさを教えます。罪を軽視し、油断す
ることなく、祈りと慎しみによって罪を避けなければなりません。

それとともに、失敗してしまった人が、絶望に陥ってはならないこと

を教えます。

悔い改めと信仰によって、神に受け入れていただく道は、常に用意さ
れているのですから。

「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが
罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父の
みもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キ
リストがおられる。彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物
である」(第一ヨハネ 2 章 1、2 節)

疲労と回復（イザヤ書40章）

慰めの対話

「あなたがたの神は言われる、
『慰めよ、わが民を慰めよ、
ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、
その服役の期は終り、
そのとがはすでにゆるされ、
そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を
主の手から受けた』」（イザヤ40：1、2）

新約聖書は論文調のところが多いですが、旧約聖書は物語や詩歌、つまり文学的なところが多く、これが旧約の魅力の一つです。

キリストより数百年も昔の預言者、イザヤのメッセージを記録した聖書がイザヤ書で、これは旧約中でも出色の名文と言われます。

今開いたのは、その40章ですが、もし名前をつければ「慰めの章」です。

私たちはいろいろな弱さや問題を持っているので、いつも自分に対して不満があります。また住んでいる世界にも問題が多く、キリストも「この世はわざわざいだ」とおっしゃったくらいですから、世の中や境遇にも満足できません。悲しみや失望が多いのです。

それゆえ、人間には「慰め」が必要です。

やさしい言葉やいたわりで悲しみがうすめられ、理解や励ましによって新しい勇気と希望が回復する、そういう慰めを人は求めます。

神様は聖書の中に「慰め主」として、しばしばご自身をあらわしていらっしゃいます。また神様を信ずる人たちの集まり、そこにも慰めがあふれます。トゥルナイゼンの『牧会学』の副題に「慰めの対話」とあるように、教会もお互いに慰め合うところなのです。私たちに必要な本当の慰めは、救われて、まことの神、慰めの神に立ち返るところから与えられます。

何ゆえに、こうまで人間は弱さや問題の中に生きているのでしょうか。なぜ世の中はこうまで問題や矛盾が多いのでしょうか。その原因は、人間が罪を犯し神にそむいて、神様から離れてしまったことにあるのです。

私たちは、自分の魂からも、生活からも、神様を追い出したつもりで、神様ぬきで暮らしています。その不信仰な人間の集合である世界も、神様ぬきのつもりで運営されているのです。それが問題の原因です。

ですから、「神様が、イエス・キリストの十字架によって、罪をゆるして下さる。悔い改めと信仰によって、神に立ち返ってくる者を受け入れて下さる」という救いのメッセージは、同時に、最高最大の慰めのメッセージなのです。

信仰と服従

イザヤのメッセージは、直接には、繰り返しの背神と罪のために、神様の祝福と保護を失い、亡国の憂き目に会い、バビロンで捕囚生活を送らなければならない、ユダヤ人に向かって語られたものです。

国が滅びることがどんなにつらくても、外国での捕囚生活がどんなに心細く苦しくても、彼らにとっては自業自得でした。

しかし今、その刑罰の期間は終って、ゆるしの時が来ます。開放と帰国がゆるされると、イザヤは預言したのです。

この預言は、その時代だけでなく、今世界に向かって宣べ伝えられている、イエス・キリストによる救いのメッセージにもっと深い完全な意味で当てはまります。

それゆえ、新約聖書の著者は、この預言を、救い主キリストの先駆者として奉仕した、バプテスマのヨハネのメッセージに当てはめて記したのでした。

「慰めよ、わが民を慰めよ、
ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ」と。

しかし、このメッセージを聞いても、これを受ける人と受けない人があるかもしれません。それでは大変ですから、次の勧告のメッセージが続きます。

3節から5節に

「呼ばれる者の声がする、
『荒野に主の道を備え、
さばくに、われわれの神のために、
大路をまっすぐにせよ。
もろもろの谷は高くせられ、
もろもろの山と丘とは低くせられ、

みことばとの会話 小林誠一著

高低のある地は平らになり、
険しい所は平地となる。

こうして主の栄光があらわれ、
人は皆ともにこれを見る。

これは主の口が語られたのである。」

王様が巡幸なさる時には、その決定と同時に、巡幸のすべてのコースで、道路工事が始まります。道路だけでなく、沿道のものいっさい、見苦しくないように、巡幸が快適であるように整備するのです。

同じように、イエス・キリストを救い主として受け入れるために、心の用意を整えなさい、という勧告です。

「主の口が語られたのである」という以上、聖書の福音は、間違いない、神様が責任をお取りになるメッセージです。

救い主イエス・キリストは、救いと、祝福と慰めをもって、あなたの魂と、生活の中に、家庭と社会の中に入って来て下さいます。

「さばく」のように荒涼として慰めを必要としているその中に、キリストの入りたもう「道」を備えよ。「卑屈、絶望の谷」は信仰によって、「傲慢の山と丘」は謙遜に、「疑惑と複雑の険しさ」は、単純と従順に整えられなければならない。かくして、すべての人は救われ、救い主キリストの栄光はそこにあらわれ、多くの人がそれを見るようになる。そういうことです。

続くメッセージ、6節から8節を見ましょう。

「声が聞える、『呼ばわれ』」

わたしは言った、『なんと呼ばわりましょうか』

21/92

『人はみな草だ。

その麗しさは、すべて野の花のようだ。

主の息がその上に吹けば、

草は枯れ、花はしぼむ。

たしかに人は草だ。

草は枯れ、花はしぼむ。

しかし、われわれの神の言葉は

とこしえに変わることはない。』」

人間はたくさんの文明を築き上げました。たくさんの事業を経営して来ました。たくさんのスローガンを掲げています。しかし「人間バンザイ」「人間の輝かしい未来バンザイ」という声は、今やむなしく、戦争、公害、犯罪などの力は、文明や進歩よりも強く、人間不信と絶望ムードの世の中になりました。またいつの時代、いつの人間にも、「すべての人の終わりに死が待っている」事実は、ここに記されたイザヤのメッセージのとおりで、すべては一時的でむなしく、私たちに本当の喜び、希望、充実、すなわち真の慰めを与えません。

それをよく知って、世のものに心を取られないで、神様に立ち返ることが大切です。

ヨハネの第一の手紙 2 章 1 7 節にも

「世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる」とあるとおりです。

夜中に嗜血

さて、私たちが、すすめられるままに罪を悔い改め、キリストの救いを受け入れ、神に立ち返った時、信仰の生活、すなわち神とともに歩む生活が始まります。

10 節と 11 節に

「見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。

.....

主は牧者のようにその群れを養い、

そのかいなに小羊をいだし、

そのふところに入れて携えゆき、

乳を飲ませているものをやさしく導かれる。」

ここに「見よ」とあるのは、「注目する」「考察する」ということでしょうか。

これは聖書を読むこと、祈ること、集会に出席することがそれに当たるとでしょう。またクリスチャンの長い、神とともに歩む生活の中で、神様のご真実と愛と、そのみ力を次第に経験し、いよいよ深く神を知り、信頼し、愛するようになるその経験の進展も示しています。人間同士の交際でも、本当に肝胆あい照らす知己の交わりというものは、年月をかけてできてくるものですが、神との関係もそうです。

あなたが祈りつつ主なる神を仰ぎ見、注目しつつ待ち望む時、「主なる神は大能をもって」あなたに「こられ」ます。その神の「その腕」こ

そは常に全宇宙をすべおさめておられるのです。

私は戦争の間、ずいぶん無理な伝道と、無理な生活を続けていました。そして過労と栄養失調のため体をこわしました。ある寒い冬の夜、長野県の山の中の、小さな町の伝道所に出張して、夜おそくまで何かやっているうちに、突然咯血しました。

まったく一人ぼっちの旅さきで、口から出て来る血をハンカチで押えながら、一人でふとんを引っぱり出して、冷たい寝床に横になって、時々出てくる血にむせながら、本当に心ぼそかったのです。

私は祈りながら、神様を思いました。

「私の体はふとんの上に横たわっている。そしてタタミ、床板、根太（ねだ）、その下に地面があって、私はその上にささえられているのだ。その地球は神様のみ手にささえられている。その地球が浮いている宇宙、それも神様が支配していらっしゃるのだ。ああ満天の輝く星。すべてをささえ支配している神のみ手。私の髪の毛一すじも、私の病んでいる肺の細胞も、神の愛と全能のみ手の中にあるのだ。何という美しい、すばらしいことだ。」

私の心はとても平安になりました。あのピリピ人への手紙4章7節の

「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう」という有名なお約束が本当であることを経験したのでした。

主は牧者が子羊をかいなに抱き、子供づれの母羊などを特にやさしく導くように、私たちを導いて下さるというお約束も、すばらしいものです。

羊はもともと弱い動物ですが、羊の中でもこれらは特に弱いものです。この群れは、言わば「弱虫をまじえた行進」です。そしてやさしい羊飼いの配慮は、いつも弱い者に向けられているのです。

家族全体で旅行する時に、幼児や赤ちゃんが弱いから、愚かだから、目的地に着けないということはありません。強いお父さん、お母さん、兄さんや姉さんたちが、かわいがって面倒を見ますから、みんなそろって元気に目的地に着きます。

「主は牧者のようにその群れを養う」というこのみ言葉は、弱い立場の人、また自分を弱いと感じている人にとって、何と大きな慰めでしょうか。

神の栄光

12節以下は、神様についてのすばらしい叙述です。

ここには人のよく使う「ものすごく」「非常な」「絶対に」というような言葉は一つも出て来ません。全部目に見えるような、いわゆる具象的表現です。

「だれが、たなごころ（手のひら）をもって海をはかり、指を伸ばして天をはかり、地のちりを枳に盛り、てんびん（はかり）をもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはかったか。」

宇宙の広さ、山や丘のマッス（量塊）また泉や川、海や雲など、地球の水の量とその循環、それらの設計と創造はどなたのお仕事でしょう

か。

「見よ、もろもろの国民は、おけの一しづくのように、
はかりの上のちりのように思われる。

見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。

．．．．．

主のみ前には、もろもろの国民は無きにひとしい。」

おけのしづく、はかりのちり、立ちのぼるほこり、それらは、あること
とは事実でも全く無きにひとしいのです。

それなのに、本当の神様を知らない人間は、愚かな偶像礼拝をします。

「偶像は細工人が鋳て造り（鋳造し）
鍛冶が、金をもって、それをおおい（金メッキをする）
また、これがために銀の鎖（ネックレス）を造る。

貧しい者は、ささげ物として

朽ちることのない木を（せめてよい木材を）選び、

巧みな細工人を求めて、

動くことのない像（木像）を立たせる。」

そして

「その前にひれ伏して拝み、これに祈って、『あなたはわが神だ、わ
たしを教え』と言う」（４４：１７）

これは本当にムダな、愚かなことです。

「主は地球のはるか上に座して、

地に住む者をいなごのように見られる。

主は天を幕のようにひろげ、

これを住むべき天幕のように張り、

また、もろもろの君を無きものとせられ、

地のつかさたちを、むなしくされる。

彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、

その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、

神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、

わらのように、つむじ風にまき去られる。」

ナポレオンも、ヒトラーも、スターリンもそうでした。

「聖者（神）は言われる、

『それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、

わたしは、だれにひとしいというのか』。」

睡眠不足

さて、神を信じて生活しているクリスチャンでも、むずかしい境遇の
影響でしょうか、自分の弱さのためでしょうか、疑惑、不信仰に陥ること
もあります。

２７節に

「ヤコブよ、何ゆえあなたは、

『わが道は主に隠れている』と言うか。

イスラエルよ、何ゆえあなたは、

『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。」

これは「私は神に見捨てられてしまった。私の祈りなど、神は全然聞
いてくれない」という、不信仰のつづやきです。

しかし、祈りなさい。

30 節以下にあるように、

「年若い者も弱り、かつ疲れ、

壮年の者も疲れはてて倒れる。

しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、

わしのように翼をはって、のぼることができる。

走っても疲れることなく、

歩いても弱ることはない」

のです。

有名なトゥルナイゼンの『牧会学』に次のような話がのっています。

大企業を経営する一人の実業家が、働きすぎてしまった。睡眠不足と心臓の機能不全が始まった。

医者は言った。

「数週間休養を取らなくてははいけません。そうでないと、私は何も保証しませんよ。」

この患者は山の中に保養地を探した。そこでは、日曜日には小さな礼拝堂で礼拝がなされていた。

近代的な産業の中で働くことに全生涯をかけて来たこの男は、久しく教会を訪れることがなかった。しかし、滞在の最後の日曜日、散歩をし、礼拝堂の前を通り過ぎようとして、ふと礼拝堂の中に入った。わずかな数の保養客がそこにいた。

牧師が説教の中で講解したのは、イザヤ書 40 章 31 節の

「主を待ち望む者は新たなる力を得る」

という言葉であった。

続いて聖餐式が行われた。彼もそのまま聖餐式につらなった。

この牧師は聖餐を与える時に、一人一人に聖句を与えていた。牧師は未知のこの男に、もう一度イザヤの言葉を繰り返した。そして、この言葉がこの男を打つということが起こったのである。

礼拝から帰りながら、彼は問い続けた。

「今聞いたことは、本当にこの私にも当てはまることなのだろうか。自分に力を与えていただくために、これを用いることができるだろうか。」

彼は更に牧師と対話をした。牧師は「『神を待ち望む』とはどういうことか」ということも「これは彼にとっても約束なのだ」ということも明らかにしてくれた。

生れ変わって彼は、自分の仕事に戻った。そして彼の健康も正常に復したのである。

本当の慰めのために、まだ神に立ち返っていない人は、神に立ち返り、救いを受けなければなりません。

そして、神を信じているクリスチャンは、常に神を見上げ、神を待ち望みましょう。そこに慰めに満ちた生涯が約束されているのです。

教会とは何をするとおころですか

礼拝するところ

「教会って何をするとおころなの？」

「あなたは教会に行くとおころをとするの？」

などと聞かれることがあります。

そこで今日は、「教会とは何か」ということを改めて考えてみましょう。

いろいろ考えられる中で、今日は四つの点をお話しします。

第一に、教会は神様を礼拝するところではす。

神様を礼拝するための建物、施設を造るようには神様がイスラエルの人たちにお命じになった話が、出エジプト記25章8節に記されています。

「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。」

また22節には

「その所でわたしはあなたに会い、……イスラエルの人々のために、わたしが命じようとするもろもろの事を、あなたに語るであろう」とあります。

この時イスラエルの人たちは、つい最近までエジプトで奴隷のような生活をしていたのが、神様の助けによってエジプトから脱出して来たばかり、

いわば解放奴隷の一群ではす。

まだ国土もない。住む家もない。移動式のテントで生活している。田畑山林も産業もない。政府も軍隊もない状態ではすでしたが、礼拝は最優先ではすたから、神様のみ言葉に従って力いっぱいのお努力で幕屋を建てました。幕屋とは、テント式、移動式の神殿ではす。後に彼らがパレスチナに定住するようになり、りっぱな家に住むようになると、その時々のお努力で、やがては世界の七不思議の一つと言われるような、壮麗な神殿を経営するようになるのではす。

キリストはご在世当時、エルサレムに上京すると、弟子たちとの会合などに、マルコとその母親との家をお使いになったようではす。当時まだ少年だったマルコは、後に「マルコによる福音書」を書く人ではす。この家族は早くからキリストを信じていたのではす、喜んでその二階座敷を提供したのではす。

最後の晩餐もこの部屋で行われました。

キリストの十字架のあと、弟子たちが集まって来て泣いていたのもこの二階座敷ではす。

復活したキリストは、その弟子たちの信仰を回復するために、親しくこの部屋を訪れたのではす。

キリストの昇天を見送ったあと、120名の弟子たちが集まって、十日間の祈り会を持ったのも、その祈りが答えられて、ペンテコステの日に、約束の聖霊がそそがれたのも、驚いて集まった人々に、ペテロが宣教の第一声をあげたのもこの家ではす。

その後もこの家は、エルサレムの最初の教会として長く用いられたこ

とは、聖書の種々の記録から推理されるのです。

この記念すべき家は、エルサレムの聖キュリロスやエピファニオス、エウセビオスの記録に見えるそうですが、今もエルサレムに「ケナクルム」と呼ばれる記念の二階座敷が（建物自身はずっと後代のもの）あります。

それ以後、キリスト教は世界各地に宣べ伝えられました、クリスチャンあるところ、必ず教会が建てられる、という原則は変わりません。

丸太小屋の教会

私たちがテレビの西部劇で、開拓当時のアメリカのいなか町の様子を見ると、町の中央の広場に教会があります。

英国の国教会の迫害を避けてアメリカに移住して来たピューリタンのクリスチャンたちは、何も無いところから生活を始めなければなりません。山から材木を切って来て、いわゆる丸太小屋を建てます。十本切ってくればそのうちの一本は教会のための広場へ持って行くというふうにして、やがて丸太小屋の部落ができるころは、丸太小屋の教会ができました。毎週の聖日礼拝がそこで守られました。ある時代には、そこが小学校でした。収穫の感謝祭も、結婚式もそこで行われました。お葬式も行われ、飢饉や戦争の時には、人々は教会に集まって祈ったのです。

今日、礼拝に集まっている皆さんは、町の内外、各方面から集まってこられました。中には家族そろって、三十分、一時間、ある人は二時間近い時間をかけて、自動車や電車でやってこられたのです。その方々は、

みことばとの会話 小林誠一著

平素は別れ別れになって、それぞれご自分の家に住んでいますが、その心のことを言えば、教会を囲んで、教会のまわりに住んでいるのです。それはシナイの荒野で、テント造りの幕屋を建てたイスラエル人と、また丸太小屋の町のまなかに丸太小屋の教会を建てたピューリタンの人たちと同じです。

このように、神様は教会によって私たちの中に住んで下さり、私たちは教会において神様を礼拝するのです。

ソロモンは、壮麗な神殿を建てて神様にささげた時に

「主よ、上の天にも、下の地にも、あなたのような神はありません。……神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。ましてわたしの建てたこの宮はなおさらです。しかし……あなたが『わたしの名をそこに置く』と言われた……この宮に向かって夜昼あなたの目をお開きください。……しもべと、あなたの民イスラエルがこの所に向かって祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかである天で聞き、聞いておゆるしください」(列王上8：22～30)と祈りました。

そのように、私たちは教会において神様を礼拝し、心から祈りをささげます。そして神様は

「その所でわたしはあなたに会い、あなたに語るであろう」とおっしゃったように、私たちの礼拝をお受け下さり、私たちを祝福して下さるのです。

また神様は、そこで私たちに語りかけて下さるのです。ある時は神様

の愛と恵みとお約束、ある時は私たちの生活の指針を語りかけて下さるのです。そして私たちは、いつも神様のご臨在と祝福を感じて、喜びと慰めと力に、あふれます。

ある時は光と警告をいただくことがあります。私たちは緊張して、光に従い、悔い改めます。そこで生活の軌道修正が行われます。

「神様が私たちの中にいらっしゃる」という聖書のお約束が、現実的な具体的なものになるために、教会生活はもっとも大切なものです。

訓練と奉仕

第二に、教会はクリスチャンが集まって、聖書を勉強し、魂を養い、信仰生活を整える、修養と訓練の場です。

皆さんがご自分の家庭で、来客もなく、電話もなく、雑用からも離れて、二時間ほど、祈りと聖書の勉強に専念するチャンスを持つことができるでしょうか。よほど条件のよい生活でないと、むずかしいのではないのでしょうか。ところが教会に来ることによって、すべての人にそれが許されるのです。そして牧師を通して聖書の講解を聞くことができます。お祈りもできます。

本当に教会は「祈りの家」です。またクリスチャン同士、つまり同信の友との話し合いや交わりもできます。クリスチャンにとって、教会と集会は大切です。

使徒行伝時代についても（当時はまだ特別な建物、教会堂はありませんでしたが）使徒行伝2章42、47節に

「一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共に

みことばとの会話 小林誠一著

パンをさき、祈をしていた」

「神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」

と記しているとおります。

第三に、教会はクリスチャンが力を合わせて主に奉仕する所です。

旧約聖書のヘブル語でも、新約聖書のギリシャ語でも、あるいは英語でサービスという場合でも、「礼拝」と「奉仕」を一つの言葉で表現することが多いのです。永井直治先生の「新契約聖書」では、こういう場合を「奉事」と訳しております。

イザヤが神殿で礼拝をしている時、まのあたり神の臨在を拝し、天使のさんびを聞くという尊い経験をし、様々な恵みのお取り扱いを受けました。

その時イザヤは

「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」

という神様のみ声を聞きましたが、彼は

「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」

と答えました。

実はこの「献身と服従」すなわち「奉仕」ということは、大切な礼拝の一部なのです。この話はイザヤ書6章に見えています。

パウロも、ローマ人への手紙12章1節で、

「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」

28/92

と言っています。

教会の充実

さてテサロニケ人への第一の手紙5章12節以下に、教会生活とご奉仕について、行き届いた教えがあります。

「兄弟たちよ。わたしたちは願います。どうか、あなたがたの間で、
勞し、主にあってあなたがたを指導し、かつ訓戒している人々を重んじ、
彼らの働きを思って、特に愛し敬いなさい。互に平和に過ごしなさい。」

神様と会衆のために、指導的な立場で勞する、努力する、骨折りをす
る奉仕は大切です。教会のよい働きは、よい指導者なしには考えられま
せん。すべてのクリスチャンは、自分がその大切な奉仕に用いられるよ
うに、祈り努力しなければなりません。また教会の中に、そういう人材
が多く起こされるように、祈らなければなりません。

これは、あるいは牧師であり、役員でもありましょう。あるいは委員、
教師でもありましょう。

教会は、神と会衆によって立てられたそれらの指導者のために祈り、
いよいよ彼らが神に用いられるよう、祈り協力することが必要です。

「この人々を重んじ（大切に）彼らの奉仕の重要さを考えて、
特に愛し敬いなさい。（嫉妬したり、ケチをつけたり、軽視したりする
ことがないように）互いに平和に過ごしなさい。（気まずさや、遠慮が
あっては、うまく指導ができません。一致と自由が大切です）」
ということでしょう。

これは指導者に対してですが、仲間同士では

みことばとの会話 小林誠一著

「怠惰な者を戒め（注意して戦列に連れ出す）、小心な者（自信がな
くて臆病な人）を励まし（自信勇気を持つように）、弱い者（実際に能
力とぼしく不利な人）を助け（私の経験では、教会に大勢の奉仕者が起
こされるためには、経験も勇気もない人を、いかに上手に助けて次第に
教育し、奉仕に立ち上がらせるか、ということが、キメ手のように感じ
ます）、すべての人に対して寛容でありなさい（ひろい心で人を理解し、
その長所能力を見つけ出し、短気を起こさないで、静かに根気よく指導
すること）」

という教えが続きます。

いくらクリスチャン同士でも、長い間には失敗もあるし、迷惑をこう
むることもありましようが、そういう時に

「だれも悪をもって悪に報いないように心がけ、お互に、またみんな
に対して、いつも善を追い求めなさい。」

悪に対して、悪をもって応ずるなら、悪が倍になってサタンが喜ぶば
かりです。善をもって報いれば、そこでサタンが教会に持ち込んで来た
悪はストップになります。逆に恥ずかしくなってその人が悔い改めれば、
結局善の勝利です。

トピック好きという人もあって、不思議に良くないことに興味を持ち、
話題にして言いふらすことがあります。それで悪がエスカレートするこ
ともあります。ですから、どんな時、どんなケースについても祈り深く、
良い心、良い判断、良い知恵をもって善を生み出し、善を追求してゆき
ましよう。よしんば悪材料でも、どうしたら善に変えることができるか
を考えましよう。こういう知恵とエネルギーが教会には必要です。何し

る人間は弱点が多いのに、しかも悪い世界に住んでいるのです。教会もまた悪い世におかれているのですから。

こうして、祝福された健康な教会は、成長し充実し、奉仕の意欲と能力にあふれ、そしてあのキリストの大命令

「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えよ」(マタイ 28 : 19、20) を果してゆくことができるのです。

世の光

第四に、教会は社会に対して神の栄光を示し、よい感化影響をおよぼします。

難船した船の乗組員たちが、小さなボートで漂流しているうちに、一つの知らない島にたどりつきました。

この島に人食い人種がいやしいかとみんな恐れましたが、とにかくこわごわ歩き始めました。先に立った一人が、高い所に登ってゆきましたが、あとから来るみんなに、うれしそうにさげびました。

「おおい、大丈夫だ。安心しろ。この島に食人種はいない。教会があるぞ。」

そうです。教会のあるところは、その土地の人が全部クリスチャンにならなくても、教会の感化影響を受けますから、もう食人種はいなくなるのです。

世界の宗教に道德に、学術に文明に、キリスト教は洪水のような、美

しくエネルギーな影響を与えて来ました。それは、歴史が証明するとおりです。

私たちの教会がおかれている市町村でも、神様の祝福によって、教会はその点でも、役目を果さなければならないのです。

マタイによる福音書 5 章 13、14 節に

「あなたがたは、地の塩である。……あなたがたは、世の光である」

とキリストがおっしゃったのも、その意味だと思います。

地の塩として教会は、罪のために疲れ滅びようとするこの世に対して、腐敗を食い止める力を発揮するはずで、喜びと幸福の味を失った人々の中に、それらの味わいをもたらすはずで、また道徳的な暗黒、生きる目的を見失った暗黒の世に、救いと希望の灯を輝かす燈台であるべきです。

私たちが救われてクリスチャンとなり、教会に加えられているということは、何という喜びであり、幸福でしょうか。何という光栄であり、プライドでしょうか。また、何というすばらしい責任でしょうか。

お互いに祈りと励みをもって教会生活を守り、私たちの教会を通して主の栄光が拝され、主のみわざが前進するよう期待しましょう。

山の頂上とそのふもと（マタイによる福音書 16～17章）

祈りの家

あけましておめでとうございます。

新しい年を迎えましたが、どうぞ今年も災難などに遭いませぬように、幸福な一年でありますようにとはだれしも願うことです。

そこで、各地の神社などに初もうでに押し寄せる人数は年々多くなるそうです。「どうもこれは人間の力だけでは及ばない、神頼みだ」ということなのでしょうか。

幸福を求める点ではクリスチャンも同じですが、元旦祈り会と言い、新年礼拝と言い、教会に集まって、物言わぬ偶像でなく、まことの神、生ける神にお祈りできることは、本当にさいわいです。

私は今日「祈りの教会」という題でお話しいたします。どうか今年一年、教会をあげて祈りすすんでゆきたいと願っている次第です。

マタイによる福音書 21章 12、13 節に

「それから、イエスは宮にはいられた。そして、宮の庭で売り買いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえされた。そして彼らに言われた、『わたしの家は、祈りの家となえられるべきである』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている」

とこういうお話があります。

宮というのはエルサレムの神殿のことですが、これはもちろん、イエス様がおっしゃったように、本来「礼拝の家」「祈りの家」でした。それと同じく、今教会もまた「祈りの家」です。

ところが、当時のエルサレムの神殿は、ヘロデ王が国力を傾けて建てた、ぜいたくでりっぱな神殿で、四十年もかかっても細部はまだ完成していない、というくらいのものでしたが、どうも本当の礼拝の空気、祈りの空気が欠けていました。りっぱである。整備されている。盛んだ。にぎやかだ。しかし祈りが欠けている。こういうことでした。

そこで、キリストは非常にお怒りになって、余計なものを片づけておしまいになりました。少し荒々しいことをなさいましたが、熱心と威厳に打たれて、だれもさからう人はいませんでした。

これは今日でも、私たちに深い反省をうながすお話です。

私たちの家庭でも、教会でも、祈りが十分でないと、神様のみこころにかなわず、キリストはお喜びになりません。どんなにりっぱでも、盛んでも、にぎやかでもだめです。ですから私たちも、キリストにおこられないように、家庭からも教会からも、どうかみこころにかなわないもの、祈りのさまたげになるものを取りのぞいて「祈りの家」として整え、神様に新しくささげて行きたいと願うのです。

それによって、キリストは家庭の中に、教会の中に、いつもご臨在下さって、私たちの祈りを受け入れ、私たちを祝福して下さるでしょう。

問題の中にも入って来て、進行の先頭にも立って、そして私たちの教会によって栄光をあらわし、教会をみわざの前進基地として用いて下さ

るでしょう。

本当にすばらしいことです。

奇跡と説教

マタイによる福音書 16 章と 17 章は、特別にキリストが弟子たちに、祈りを教え、祈りのご訓練をお与えになったところだと思えます。

大体三つの場面に分けられますが、順にお話ししてみましようか。

第一の場面は「ピリポ・カイザリヤの地方」です。これが 16 章です。

私は先年、イスラエルを旅行した時に「バニヤス」と呼ばれる、ヨルダン川源流の一地点に行きましたが、林に囲まれた流れのほとり、とても美しい静かなところでした。

第一の場面は多分そこだったと思われます。

キリストが 12 名の弟子を連れて、言わば水入らずでこの地方に退かれたのは、つい先ごろまでは人気の絶頂で、群衆に追いまわされていたキリストの、評判が急に落ち、人気しらけ、身辺寂寥（せきりょう）となった時で、一同しょんぼりという形だったのです。

なぜそんなにキリストの人気が高まったのでしょうか。それは「パンの奇跡」が行われたからでした。

ではなぜそんなに急に人気落ちたのでしょうか。それは奇跡の後で「説教」をなされたからです。

ヨハネによる福音書 6 章を見ると、キリストが五つのパンと二匹の魚（これは子供が自分の弁当をささげたのです）を祝福して、弟子たちに分配させ、数千人の人を満腹させた、という奇跡が行われたことが記さ

れています。

そこで大さわぎが起こりました。

人々がキリストを立てて王様にしようという運動が始まったのです。

「キリストに王様になってもらえば、もうパン問題は解決だ」

ということだったのでしょう。

キリストはこれを好まず、人を避けて退かれました。

ところが、群衆はキリストを捜しまわって、多分翌日、再びキリストのもとに殺到して来ました。

キリストはここで、人々に一つの説教をされました。これも同じ章にあります、その要点はこうです。

「あなたがたがわたしを尋ねて来たのは、パンを食べて満足したからだ。

たしかにパンは必要だが、これは地上のしばらくの生命をささえるだけのもので、永遠の生命には関係がない。

わたしが神から遣わされて地上に来たのは、あなたがたに、その程度の食物を供給するためではない。

『永遠の生命』を与えるためだ。

わたしはあなたがたがすべての罪をゆるされ、神の怒りとさばきから救われ、死後は復活にあずかり、神から永遠の生命を受けるために、あなたがたの罪のため身代わりとして十字架にかかる。

わたしはそこで私の肉を裂き血を流す。

あなたがたは信仰によって、この十字架の身代わり、すなわち罪のあがないを受け入れねばならない。

ちょうどパンを食べるように、信仰をもって、心の中で、わたしの肉を食べ、血を飲むのだ。

それによってあなたがたは救われる。

そして永遠の生命を得る。

わたしはパンを与えるためではなく、永遠の生命を与えるために地上につかわされて来たのだ。」

これはキリストの必死の説教でしたが、パンの奇跡ほどは人々の心に訴えませんでした。

「これはひどい説教だ。こんな話を聞いてはられない」というのがその反応でした。

聖書には

「それ以来、多くの弟子たちは（群衆とともに）去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった」と伝えていきます。

キリストのそばにはつまらなそうな十二名の弟子だけが残りました。

そこで、キリストは彼らにお聞きになりました。

「あなたがたも去ろうとするのか」

ペテロは答えました。

「先生、私たちは、あなたを離れてだれのところへ行きましょう。あなたは今説教されたではありませんか。『永遠の生命の言葉を持っているのはわたしだ』と。私はそれを信じます。私たちは信じ、また知っています。あなたは『神の聖者、救い主だ』と。」

これはペテロが、一生懸命疑惑と戦い、さびしさと戦ってキリストに

申し上げた、精いっぱい言葉だったのです。

ほめられたペテロ、叱られたペテロ

このあとキリストも、もはや人々を避けて、あの十二名だけを伴い、ピリポ・カイザリヤに退かれたのです。

そこで、言わば車座になっての話し合いになりました。

どうも情勢ということになると、いったん上りつめたものが下り坂になって来ました。落ち目になって来ました。そして、もう一度盛り返す見込みがない、落ち込んだ空気でした。

いろいろなお話もあったでしょうが、キリストは弟子たちに向かって「世間の人は私のことを何だと言っているでしょうか」という質問をなさいました。

弟子たちは

「そうですね。ある人はバプテスマのヨハネだと言っています。ほかの人はエリヤだと言うし、またエレミヤだとか、とにかく預言者の再来だと言っているようです。」

しかし、実はもっといろいろひどい悪口を言われていて、中には

「あれは悪鬼のかしらベルゼブルだ」

などと言う人もいたのですが、まさかそんなことはキリストに話せませんでした。

しばらく黙っていたあとで、今度は

「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」

弟子たちの中から、今度もペテロが立ち上がると

「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」

これも、ペテロにとっては一生懸命です。

「宇宙、地球、世界、いっさいを創造し支配していらっしゃる神様、あなたはその神様のひとり子なる神であると、私は信じています。また、あなたは救い主キリストです。旧約の預言者たちが預言したお方です。あなたによってのみ私たちも世界も救われるのです」という告白です。

キリストは、この時ペテロの肩に手を置いて「あなたはペテロ（岩）である。そして、わたしはこの岩の上に教会を建てよう。悪魔の力も、決してこの教会に勝つことはない」とおっしゃったのです。

ペテロの告白した信仰こそ、教会の内容をなすものであり、この信仰を持つ人こそ、教会の基礎、教会の柱となるべきものでした。

キリストはこのように、弟子たちの信仰をたしかめられたので、今は安心されたのでしょうか。ご自身の十字架について、打ち明けてお話を始められました。

「わたしはこれからエルサレムに行く。そこで長老や祭司長、学者たちなど、ユダヤ人の指導者によって、多くの苦しみを受け、最後には殺されるだろう。しかしわたしは、三日目には復活する。」

しかし、弟子たちもペテロも、このお話を理解することができませんでした。

彼らは一途に先生思いでしたから、キリストがそんな目に会うことは耐えられません。

またそれは、いかにも神の子らしくない、救い主らしくない、弱さと敗北の結末です。

またペテロは、自分が教会の柱石となる光栄は喜びましたが、キリストの十字架のおつきあいは気が進みませんでした。

そこで、ペテロはキリストを引き寄せ、わきの方に連れていって、強い口調で忠告したのです。

「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません。何をおっしゃるのですか。」

その時キリストは、この愛する弟子に向かって

「悪魔よ、行ってしまえ。お前はわたしの邪魔物だ。あなたは神のみこころを思わず、人間的なことばかり考えているのだ」と激しくお叱りになりました。

おそらくキリストは、ご自分が、多くの人の罪のあがないのために、十字架の上に死ぬことが、神様のみこころだと、長い時間をかけ、長い祈りの間にたしかめて来られたのでしょう。

その間、この恥と苦しみのコースを避けるように、ほかの道を選ぶように、姿を変え形を変えた悪魔の誘惑を、いつもお受けになって来たのでしょう。

それが今、安心して信頼したばかりの弟子の口から、急に出て来ましたから、キリストもぎょっとなされたかもしれません。

ですから、こんなに激しい言葉でペテロに、というよりは悪魔に、お答えになったのでしょう。

変貌と脱皮

このあとキリストは、またいつものようにやさしく、ていねいに、十字架について弟子たちに教えて下さいました。

「だれでも、わたしについて来たいと思うならば、わたしの弟子たる者は全部、わたしのように自分を捨てなければならないのだよ。そして、わたしのようにだれにでも、神様から与えられ、命じられたその人の十字架があるのだから、自分自身の十字架を負うて、そしてわたしに従って来るのですよ。

そうでなく、十字架を避けて、この世的な自分の生活や生命を救おうと思う者は、神様の前に価値のある生活、そして神様から与えていただく永遠の生命を失います。反対に神様のためキリストのために、地上的な生活や生命を犠牲にする者は、神様によって、かえって永遠にそれを獲得できるのです。

全世界のものを全部自分のものにしたって、自分の生命がなくなれば何にもなりません。だから、だれだって、自分の生命と引きかえに物をほしがるとはしません。一度生命を失えば、何をもってしても、その生命を買い戻すことはできないのですから。

わたしは、エルサレムで十字架にかかり、殺されますが、必ず三日目には復活し昇天します。

そしてやがて、こんどはこんな姿でなく、神の栄光のうちに、多くの天使を連れて再臨します。そして全世界にさばきを行います。

そしてその時こそ、わたしはあなたがたの犠牲に対して、必ず報いま

す。」

何というていねいな、ねんごろな教えでしょうか。

弟子たちはよくわかりました。

しかしよくわかって、沈みきった弟子たちの気持ちは変わりません。

おそらく、悄然として考え込んでいたでしょう。

こういう時に、人々の気持を回復させるのに二つの方法があります。

その一つは好材料を示すことです。

病氣の人を直してあげたり、貧しい人にお金をあげたりするような方法です。

この場合はキリストが

「よし、では十字架にかかるのはやめよう。十字架を抜きにして栄光を取るようにしよう。お前たちも十字架を負わないで、そのまますぐに栄光を受けられるようにしてあげよう」

とおっしゃれば良いのですが、それはできません。

ここでキリストは、他のもう一つの方法、すなわち「祈り」に弟子たちをお導きになったのです。

ここから17章、第2の場面になります。

1節から8節を見ると、キリストは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネだけをお連れになって、高い山に登られました。

遠くヘルモン山まで行かれましたか。

あるいはタボル山に登られましたか。

現在タボル山には、この時のことを記念した「変貌教会」が建っていますが、どちらであるか、今はっきりはわかりません。

山の上で、4人が熱心に祈っている間に、気がついてみると、彼らの目の前で、祈っているキリストの姿が変りました。

旅のちりでごれ、苦勞にやつれた、キリストの姿は変りまして、そのお顔は太陽のように輝き、その衣服はまっ白な雪のように輝いていました。

しかも、あきらかに天にいるはずのモーセとエリヤが現れて、キリストと語り合っていました。

ほかの福音書を見ると、この3人は「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて話していたのである」と記してあります。

この出来事は「変貌」と呼ばれています。

「変貌」とは「脱皮」のことです。

生きものが脱皮しますと、かぶさっていた皮が破れて、中身が現れて来ます。

とんぼの幼虫は、水や泥の中にすんでいるみずぼらしい虫です。

それが、時期が来ると草の茎などにすがって、水の上に出て来ます。そして間もなく、みずぼらしい姿をぬぎすてると、あの美しくりっぱなとんぼが出て来ます。

彼はあのすきとおった羽で、自由に明るい太陽の下を飛びまわります。

これが「脱皮」です。

キリストはやがて復活の朝、今までの弱さにまとわれたお体に変えて、

すばらしい栄光の体をお受けになります。

しかし今、お祈りの中で、短い間でしたが、栄光のお姿に脱皮なさいました。

その時、キリストが、モーセとエリヤとともに語り合われたのは、地上の問題ではなく、神の救いのプログラムのかなめ、すなわちキリストの十字架でした。

それはピリポ・カイザリヤで、ペテロたちが話し合い、恐れ悲しんだようなものでなくて、神様のプログラム、人類の救いの希望、またキリストの復活と栄光の門出となるものでした。

キリストの変貌は、実は彼を囲んでいるあらゆること全部の変貌だったのです。

そして、キリストは「輝く雲」すなわちアブラハム、モーセ以来、父なる神のご臨在のしるしと言われる「シェキナー」の中から

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」

という、父なる神のあかしの声をお聞きになりました。

今から2年前、キリストは30年の私生涯を終わって公生涯に出発なさろうとした時、ヨルダン川で、バプテスマのヨハネからバプテスマをお受けになりました。その時も今と同じ神様のお声をお聞きになったのですが、そのいずれも、これは「キリストのご存在、ご生活、みわざが、神のみこころにかなっている。そのままのコースを進みなさい」という、神様のご承認のあかしであり、キリストにとっての確信でありました。

これはすばらしい場面でした。ペテロがキリストに

「主よ、私たちがここにいるのは、すばらしいことです」
と言ったのは当然でした。

祈りの山は、すなわち、天国の栄光に満ちた山でした。

でも、ペテロの次の言葉は許されません。

「もしおさしつかえなければ、私はここに小屋を三つ建てましょう。
一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのため
に。」

キリストがそのみわざを終り、私たちがまたそれぞれの奉仕を終り、
そして主が栄光のうちに再臨なさったら、その時私たちも、栄光の主と
ともに、また多くの聖徒とともに、いつまでも栄光と慰めの中に住むこ
とを許されるでしょう。

しかしまだその時は来ていません。

問題児

みなさん。

祈りの中の変貌とはすばらしいことではありませんか。

そこで私たちは信仰によって、聖霊によって、高く深い霊の経験に引
き上げられるのです。

ふだんさまざまな弱さと困難の中にある私たちも、キリストの救いによ
って与えられた霊的な本質に立つことができます。力と栄光の姿
を取り戻し、脱皮し、変貌するのです。自由と力に満たされるのです。

いっさいのものを、人間的、地上的観点からでなく、神様の、愛と全
能による誤りのない摂理の中から、完全な神のプログラムの中に見なお

みことばとの会話 小林誠一著

すことが許されるのです。

よくわからないことも、祈りの中で神様の恵みに圧倒された私たちに
は、いっさい万事「アーメン」です。あらゆる物が急に輝きをもって感
じられて来るのです。

私たちも祈りの山で、ペテロたちと同じようにシカイナに包まれ、神
様の声を聞くでしょう。

これは、ペテロたちの信仰と心を回復したすばらしい経験でした。

そして彼らは、生涯それを忘れませんでした。

ペテロは後に、ペテロの第2の手紙1章16節以下で

「わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだ」

と言っています。そして

「イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、
おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、『これは
わたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』。わたしたちもイエ
スと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである」
と続けています。

いかがでしょうか。私たちも困難な時、さびしい時、自分の十字架を
重く感ずる時、祈りの山にキリストとともに登りましょう。

キリストに「祈ること」を教えていただきましょう。

最後に弟子たちは山で、キリストが彼らに手を置いて

「起きなさい、恐れることはない」

とおっしゃった時、彼らが目をあげると、

「イエスのほかには、だれも見えなかった」

とあります。そこに立っていらっしゃるのは、またいつもの、親しく見なれたキリストで、もう輝く雲も、モーセもエリヤも見えませんでした。

しかしそれでよかったのです。

弟子たちはそれで十分でした。

キリストただ一人を見上げながら、確信と喜びと勇気をもって、お供をする心の用意ができたのでした。

第3の場面は9節から21節までに記されている「山のふもと」です。弟子たちはそのまま山にとどまることなく、山から下って来ました。なぜならばキリストにも弟子たちにも、それぞれなすべきご用が、まだまだ地上にあったからです。

そこに、一人の問題児が出て来ます。

またこの問題児のために困らされている家族が出て来ます。

一生懸命心配し努力しても、この問題児は彼らの手におえませんでした。

この子はテンカンでした。しかもこれは、悪霊の力による病気のようなものでした。

発作が起こって激してくると、制止することができないで、火の中でも水の中でも倒れます。この子の父親は一生懸命ですが、できることは、急いでこの子を引き上げて、ある時は火の粉をはらい、ある時はぬれた体をふいてやるような、一時的な、表面的な助けだけです。

決定的に病気を直し、この子を救ってあげることはできませんでした。

父親は、この子の救いを求めて弟子たちのところに来ました。

弟子たちもいろいろしましたが、彼らをどうすることもできなかった

ようです。

悪霊が働いて人間の精神、感情、欲望を刺激し、挑発し、けいれんさせます。そうすると、どんなに危険な火の中、水の中でも飛び込んでゆき、そしてその身を破滅させます。これは人間全体に共通した問題で、実は人間全体が、悪魔と罪のために、始末に悪い問題児になっているのではないのでしょうか。

罪を犯し失敗した時、失敗を後悔はするが、それが致命的な結果をきたさないように、前後をとりつくろうだけで、人格の内部に巣くっている本質的な問題は、人間自身にはどうにもならず、親も家族も、学校も教育もどうすることもできません。どうしても必要なのは、神によるキリストによる救いです。

ところが弟子たちは、この少年を助けることができませんでした。これも問題でした。同じように、救いを必要とする人々を、決定的な救いの経験に導くことのできない、今の教会の無力さこそ、最も大きな問題と言うべきです。

祈りと断食と

この様子を知ったキリストは、すぐにこの少年から悪霊を追い出し、テンカンをいやして下さいました。

あとで弟子たちはキリストのところに来て、

「私たちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」と質問しました。

キリストは第一に、

「あなたがたの信仰が足りないからである」(20節)
と指摘されました。

ご承知のように「信仰」は原語で「フィステイス」と言います。これは「真実」という意味です。

「神様のご真実を信じます。ですから、私たちも神様に対して真実です。」これがフィステイス、信仰です。

神様のご真実と人間の真実がかみ合う。その時に神様のみ力は働き始める。これが霊的な力の原則です。

第二は祈りを求められました。

「このたぐいは、祈と断食とによらなければ、追い出すことはできない」(21節)

少年のテンカンの背後に働いていた力は悪魔でした。

人間は悪魔に勝つ力はありません。そして、悪魔の力から解放されることなしに人は救われません。しかし、悪魔の力に勝って下さったのはキリストです。

ほかのことはいろいろできるかもしれませんが、この場合は、神様に、キリストに、聖霊に出て来ていただく以外、どうにもならないのです。私たちはそのことを知って、ただ御名をあげ、信仰をもって、いっさいをゆだねて、肉の力は引っこませて、祈らなければならないのです。

人が救われるのは、ただ神の奇跡なのでから。

ここに言われている「断食」とは何でしょうか。

それは、祈りのために、きよめのために、ご奉仕のために、「食物を断つ」ことです。

よくないもの、みこころにかなわないものを捨て、あるいは断つのは当然です。

しかし食物は正当なもの、また必要なものです。その正当なもの、必要なものを、場合によっては思い切って、またがまんして、また喜んで断つ。これが断食です。

寝たいだけ寝て、食べたいだけ食べて、やりたいだけのことをやりながらでは、おそらくクリスチャン生活はなり立たないし、祈ることもできないでしょう。ご奉仕もできません。

正当で必要なものに関しても、祈りつつよく研究して、時にあるものを排除し、犠牲にして、神様に時間と力をささげるといことなしには、何事も始まらないのではないのでしょうか。

「信仰と祈りと断食。」これが、霊的無力の理由について質問した弟子たちに対して、答えられたキリストのお言葉でした。

みなさん。

そういうわけですから、今年、私たちの教会に対してキリストが期待なさることも、同じだと思うのです。

元旦の祈り会で氣勢を上げて、「祈りの教会」というモットーを壁に掲げて、それですむことではありません。

ある方は今年は進学の年で、試験のことがもう頭に来ています。ある方は就職、ある方は結婚のことを祈っているでしょう。

今年中に赤ちゃんを産む人もいます。

私たちの生活の前進のために、祝福のために心を合わせて祈ってゆきましょう。

神様は祈りに答えて下さいます。

しかし、それとともに神様のご事業の前進のために祈ってゆきましよう。

心を合わせて祈り、ささげ、従ってゆきましょう。

主の祈り

祈りの姿

主の祈り

あなたがたはこう祈りなさい、
天にいますわれらの父よ、
御名があがめられますように。
御国がきますように。
みこころが天に行われるとおり、
地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの食物を、
きょうもお与えください。
わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、
わたしたちの負債をもおゆるしてください。
わたしたちを試みに会わせないで、
悪しき者からお救いください。（マタイ 6:9 ~ 13）

これは、キリストが教えて下さった「祈りのお手本」です。
私たちが、お手本の上手な字を見ると、そういうりっぱな字を書きた

くなります。またお手本で字を習い始めると、自分の字の悪いところに気がついて、だんだんお手本に似た字を書くようになるでしょう。

同じように「主の祈り」によって、私たちの祈りの心が励まされ、熱心に祈るようになり、また祈りが整えられて、神様のみこころにかなう祈りに、進歩成長するでしょう。これが、キリストが「主の祈り」を教えて下さった目的だと思います。

私たちが自分の弱さ、みにくさを感じるとき、それを正していただくために、また理想や願望があるとき、その実行実現のために、問題や苦難のときは助けていただくために、神に訴え求めます。それが祈りです。これは一つの人間の本能です。

それゆえ、キリストが「主の祈り」を教えて下さったのは、尊いことでした。

ルカによる福音書 11 章 1 ~ 4 節を見ると、キリストが祈り終わったとき、弟子たちが「わたしたちにも祈ることを教えてください」と頼みました。そこでキリストは「主の祈り」を教えて下さったようです。

キリストの祈りは、美しく、魅力的だったでしょう。彼が「天の父よ」と祈る時、心から神様を愛し、神様から愛されているという自覚に満ちていました。

キリストの生涯は貧しく、困難に満ちたものでしたが、しかし祈る時に、彼はいつも幸福でやすらかでした。祈りはキリストの霊的生活の中心でした。

「ああ私たちもキリストのように祈ることができたら。」

これは弟子たちの心からの願いだったでしょう。

天の父

「天にいますわれらの父よ。」

キリストはいつもこう祈られましたが、これはキリストにとっては至
当な祈りでした。

彼は永遠から永遠まで、神様のひとり子であられましたが、肉体をお
取りになった地上のご生涯でもそうでした。

ヨハネによる福音書 8 章 29 節に

「わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、
いつも神のみこころに かなうことをしているから、わたしをひとり置
きざりになさることはない」

と記されているとおりです。これはいつもお持ちになっておられた、キ
リストの確信でした。

ヨハネによる福音書 11 章 41 ~ 45 節

「イエスは目を天にむけて言われた、『父よ、わたしの願いをお聞き
下さったことを感謝します。あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれ
て下さることを、よく知っています。……』こう言いながら、大声で『ラ
ザロよ、出てきなさい』と呼ばわれた。すると、死人は手足を布でまか
れ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。」

これは何という確信に満ちた力強い祈りでしょうか。そして、ラザロ
の復活とは何という大きな、祈りの答えでしょうか。

明日の十字架の死が、確定的となった夜のことです。キリストは最後
の晩餐のあと、弟子たちを連れてゲッセマネの園に行かれました。その

時の祈りは、ヨハネによる福音書 17 章 1 節から 5 節にあります。

「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、
子の栄光をあらわして下さい。……わたしは、わたしにさせるためにお
授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。
父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前
にわたしを輝かせて下さい。」

死の直前においても、キリストは確信と希望に満ちた、こういう祈り
をささげました。

このように、キリストの祈りは、本当にすばらしいものでした。それ
ゆえに弟子たちは、「祈ることを教えて下さい」と頼んだのです。

その時キリストが、人間であり罪人である弟子たちに向かって、キリ
ストと同じように

「あなたがたはこう祈りなさい、

天にいますわれらの父よ」

と教えて下さったのは、実は「教え」以上のものでした。

キリストはご生涯の間、十字架のことを思い続けておられました。奇
跡もお話も、十字架の覚悟なしになさったことはないでしょう。なぜな
らいいっさい、十字架なしに成就するものはなかったからです。

キリストが弟子たちに「あなたがたも祈る時はわたしと同じように『天
にいますわれらの父よ』と祈りなさい」と教えて下さったときもそうだ
ったでしょう。そのとき「この教えが有効であるために、わたしは彼ら
のために十字架にかかるのだ」と、また新しく思い定められたに違いあ
りません。

キリストは祈りを教えて下さっただけでなく、十字架のあがないによって、そう祈る資格を弟子たちに与えて下さったのです。

それはキリストの十字架と復活によって成就しました。それゆえ、あの復活の朝、キリストはマリヤに

「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」

とおっしゃったのでした。これは、ヨハネによる福音書20章17節に記されています。

同じように「主の名によって祈る」資格もまた、キリストの十字架によって与えられました。

ヨハネによる福音書16章23、24節

「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう。今までは、あなたがたはわたしの名によって求めたことはなかった。求めなさい、そうすれば、与えられるであろう。そして、あなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」と記されているとおりです。

もし天国で私たちの名がとなえられれば、それは汚れたみにくい罪人の名ですから、天の使いも顔をそむけるでしょう。

しかし、キリストのみ名がとなえられれば、天使はうやうやしく礼拝します。

「わたしは、あなたがたの身代わりとして十字架にかかり、あなたがたの罪をあがないました。あなたがたは以後、わたしと同じように、神様を天の父と呼びなさい。そして十字架によって義とされたあなたがた

みことばとの会話 小林誠一著

は、わたしの名によって祈りなさい。」

キリストはこう教えて下さったのですが、教えて下さっただけでなく、キリストは十字架の死と復活によって、弟子たちにも私たちにも「祈る資格」「祈る力」「祈りの答えの約束」を与えて下さったのでした。

日ごとの食物

さて主の祈りの内容は、6か条です。そして自然に前半と後半に分けられます。前半は神様のための祈り、後半が自分のための祈りです。これは正しい祈りの順序ですが、わかりやすくするために、後半の方からお話ししてみましようか。

11節は

「わたしたちの日ごとの食物をきょうもお与えください」

です。

ある聖書では「日ごとのパンを」となっています。

日曜学校の先生「なぜキリストは『パンのために祈るように』教えて下さったのでしょうか。」

生徒「パンは主食だからでしょう。」

「では、なぜ『日ごとに』と教えて下さったのでしょうか。」

「あしたになるとカビるからでしょう。」

この生徒はパン屋さんの子だったそうですが、実はこれは、パンだけでなく、衣食住のすべてを含めた「私たちの日常の必需品」のことでしょう。場合によっては、本も自動車も必需品です。これらのものを与えて下さるのは神様です。「生活の点で神様を信頼しよう。神様にまかせ

43/92

よう。毎日、家族とともに神様に祈ろう」ということです。

毎日このお祈りをしている人は、欲ばらなくなるでしょう。物質に依存しなくなるでしょう。あるいは会社、職業、人間関係などの保証に、深い信頼はおかないで神様を深く信じます。もともと当てにならないものに、深く信頼して生きようとするから、それが失われると、たとえば破産、失業から、一直線に、自殺、一家心中に直進してしまうのです。

この祈りによって、クヨクヨ、生活のこと将来のことを思いわずらわなくなりします。

生活の脅威に目がくらむことなく、試練の時でも、信仰と良心を守ることができます。

ですから、同じ章の25節以下に続く

「それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。……空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養って下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか」

という有名なみ言葉は、ちょうどこの祈りの注解のようです。

ある程度のたくわえのある人も、その日暮らしの人も、進学、就職など、これから一生の生活の準備に入る青年も、また孤独の老いを迎えようとする人も、だれもがこのように「日々の食物」のために祈ることは本当に大切だと思います。

罪と誘惑

次に、「罪」に関する祈りが2項目続きます。

その1は、12節です。

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください。」

生活のこととともに、人間の大きな問題は罪です。ここに負債と言われているのは罪のことです。第1に罪を犯すことがないように、祈らなければなりません。とともに、いつもすなおに正直に、罪を悔い改めて、神様にゆるしを求めなければなりません。そして、いつも私たちの罪をゆるし受け入れて下さる、十字架の恵みに対する信仰と感謝が新鮮でなければなりません。

私たちは日々ささげる、このすなおな祈りによって、日々良心の恐れから救われ、神様との自由な交わりの確信を持ち続けます。とともに私たちの心は高ぶりからも守られるでしょう。

「私はいつも神様に罪をゆるしていただいているのだ。それゆえにこそ、私の心と生活は、神様の恵みと祝福の中に守られているのだ」という自覚は、ほかの人の罪をゆるす寛容につながります。

この寛容こそ、常に私たちと神様との関係を、私たちと人々との関係を、根本的に調整する、大切な秘訣だと思います。

それは14節に、

「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさ

ないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」とあるとおりです。

第2項は13節です。

「わたしたちを試みに会わせないで、
悪しき者からお救い下さい。」

「試み」というのは特別な聖書的表現で、一般的には「苦難」あるいは「誘惑」と言われるものです。聖書は、これらは「神様が私たちに与えて下さるテストだ」という意味から「試み」と呼んでいます。

学生はテストを受けることによって、自分の実力を判断し、また進歩して行きます。できあがった機械でも、船や飛行機でも、テストを繰り返してから始めて実用に供されます。それゆえ、時に神様が私たちに苦難を与え、あるいは誘惑にさらして下さるのも、それがみこころならば私たちに必要で大切なテストなのです。

神様は、いつも私たちクリスチャンを苦難や誘惑に会わせぬように、守って下さいます。私たちは日々「今日も私たちを守って下さい。試みに会うことなく平和に生活させて下さい」と祈るのです。また自分の不注意などで、とんでもない困難にまきこまれたり、誘惑やジレンマに陥らないように、祈りながら自分も注意します。

さて、それでも時には神のみこころによって、テストとして苦難や誘惑を受けなければならないことがあります。その時こそ、神様から力と助けをいただいて、「苦難を乗り越えさせて下さい。誘惑に勝たせて下さい。敗北して悪魔の手に陥ることがないようにして下さい」と祈るの

です。

天国の生活

さて次にお話する前半の3か条は、「神様のため」の祈りとも言うべきでしょうか。

9節には、

「天にいますわれらの父よ、
御名があがめられますように」

とあります。

「あがめられる」とは原語で、「区別される、きわ立つ、拡大される」というような意味です。つまり「同類として扱われる、無視される」の反対です。

日本人は、昔から「神も信仰も、信ずる者の心次第、どの宗教も帰するところは一つだ」などと言って、「わけのぼるふもとの道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」の歌をよく引き合いに使います。

けれども、私たちクリスチャンは聖書に啓示された真の神、すなわち天地万物と人間を造られた神様、また十字架によって私たちを救って下さったキリストが、一般の神々と同列に扱われることにがまんがなりません。

私たちの行動や生活を通して、「さすがにクリスチャンたちの信じている神様は違う。キリストの救いというのは本当にハッキリしたものだ」と、神様が「目立つ」ように、神様のみ名が「拡大される」ように願っています。それゆえ、これは救われたクリスチャンの、毎日の、自

然な、心からの祈りのはずです。

10節

「御国がきますように。」

御国とは天国です。天国とは、人が死んでから行くところだとばかり思われやすいのです。たしかにクリスチャンが最後に行くところは天国ですが、私たちは現在、地上で天国の生活をゆるされるのです。もちろん、ある限定のもとにですが、それはちょうど、潜水夫が、地上の生命と生活を海の中に持ち込んでいるようなものです。

それは、キリストがあるところで

「神の国は……『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」と教えて下さったとおりです。

私たちが、この地上の生活を終って天国へ行くと、神様は私たちの涙をぬぐって下さいます。そして、もう

「死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。神が人と共に住み、人は神の民となる」(黙示録21:3、4)

とありますから、それはすべてのクリスチャンの望みです。

しかしながら、今地上でも神様はクリスチャンとともにいて下さり、現に今、クリスチャンは神の民です。よしこの地上で、悲しみ、苦しみに出会うとも、常に神様は私たちを慰め励まし、目の涙をぬぐい、強くして下さいます。その喜びと幸福は、現在クリスチャンのものでした。

私たちは、天国のような神と共なる生活に深められてゆきたい。本当に天国に住んでいるような人になりたい。まわりの人々にも、感化影響

みことばとの会話 小林誠一著

を与え、皆が救われて天国の経験に入るようにしてあげたい。また自分の家庭も天国のように、教会も天国のようにしていただきたい。これは、そういう祈りだと思います。

献身と奉仕

10節は

「みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように」

です。

今この世界は、神様によって造られ、神様によって守られ、養われているのに、神のみ名はあがめられず、そのみこころは無視されて、神様のおきらいなことばかりが横行しています。メチャクチャな世の中ですが、それでも天国で神のみこころが行われるように、地上でも神のみこころが、少しでも行われるように。神様もお喜びになり、人々も幸福になるように。これもまた、クリスチャンの切なる祈りであり、また愛の努力です。

なぜルターは命がけで、宗教改革の事業に当たったのでしょうか。なぜナイティンゲールは赤十字の運動を起こしたのでしょうか。なぜリンカーンは奴隷解放のために戦ったのでしょうか。それらは「せめて私の力の及ぶ限り、地上に神のみこころが行われるように」という、祈りと献身と奉仕のあらわれではないでしょうか。

愛するクリスチャンのみなさん。

私たちが日々、また一年と、クリスチャン生活をささえられて来たの

46/92

は、毎日「主の祈り」をささげ、神様がそれに答えて下さったからではないでしょうか。教会生活、ご奉仕の生活に進んでこられたのも同じだと思います。どうかこの「祈りのお手本」によって、私たちの祈りの心が励まされるように。更に、祈りが整えられ、深められるように。そして、その祈りに主が答えて下さることによって、お互いのクリスチャン生活、また主にみわざが進展してゆくように、期待しましょう。

「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう」(ピリピ4：6、7)

愛のカノン（コリント人への第一の手紙 13章）

幸福の源泉

コリント人への第一の手紙 13章は、昔から「愛のカノン」と呼ばれています。

「カノン」は「標準」という意味の、神学用語です。長さをはかるのに「ものさし」があり、目方をはかるのに「はかり」があり、正しい線を引くために「定規」があるように愛にも、ここに神様が与えて下さったカノンがあるのです。

そもそも聖書全体が「信仰と道徳のカノン」なのですから。

愛は人間の価値と幸福の源泉とも言うべき大切なものです。夫婦があり親子があり、家庭があっても、愛がなければ決して幸福ではありません。愛を獲得するか、それを失うかの瀬戸際では、人間は命がけで、殺人にも自殺にも駆り立てられます。

愛は美しく魅力的で、幸福の源泉、生活のエネルギーですが、それだけに誤った愛は非常に危険なものです。

誤った愛がご主人をとらえてしまって、家庭が破壊されはしないか、というのは奥さんの心配です。息子や娘が、人から愛されるのはうれしいのですが、誤った愛にまきこまれて、一生をダメにしてしまうことな

どもあるので、これもまた心配です。

それゆえ、正しい愛をたしかめ、見極めるために、神様が与えて下さった「愛の憲章」「愛のカノン」を学ぶことは大切です。

さて愛にも、親子の愛、師弟の愛、友情、恋愛と、いろいろある中で、ここで取り扱われているのは、教会の中の愛、すなわち神とキリストを中心にした、クリスチャン同士の愛について、その標準が語られているようです。教会は、老人、若者、資本家、労働者、またお姑さんもお嫁さんもいます。ですから、教会の中にある本当の愛は、これはそのまま世間一般にも通じます。そして具体的な愛の手本、サンプルとなるはず

です。

「神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいます」(ヨハネ4:12)。

「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」(ヨハネ13:35)と記されているとおりです。

そして、私たちが教会の中で本当の愛を学び、かつ実行の訓練を受けらるならば、その他の人間関係、一般社会における愛もよくわかってくるし、また実行もできるのだと思います。

説教と善行

初めの3節では、教会の中でいろいろ大切にされているものと比較して、愛がもっとも大切ななくてはならぬものだ、ということが強調されています。

第一は「説教」との比較。説教は言うまでもなく、教会でもっとも大切なものの一つです。

1 節

「たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鑊鉢と同じである。」

クリスチャンは、すばらしい説教を聞くのが大好きです。説教によって聖書の真理がよくわかり、魂は養われ、信仰と善行に勇気づけられるからです。しかも「天使が語っているような説教」と言えば、これは最高です。しかしそれでも、もしその説教に、もしくは説教家に愛がなかったら、それはドラやカネが、むなしくドンチャン鳴るのと同じで、ただやかましいだけで、無意味、無価値だと言われるのです。

次は「信仰者としての資質」です。

2 節

「たといまた、わたしに預言する力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。」

教会は神様との深い霊的な交わり、体験、そして神様からいただく、霊的な能力を大切にします。

ですから、指導者の中に神様に代わって、神様の権威をもって、神様のみこころ語る「預言」や、学問や常識の領域に属さない、深い霊的な「奥義の知識」や、あるいは病気をいやし、人々を霊的熱狂に駆り立て、大運動を起こし、大教会を立て上げる「山を移すほどの信仰の能力」などがあれば、それはどんなにすばらしく大切なことでしょう。

みことばとの会話 小林誠一著

しかし、それらの中に愛がなければ結局、全部「無に等しい」つまり「ナンセンスだ」と言われるのです。「神は愛である」と記されているとおり、まことの神の臨在のあるところに、愛がないということはないはずです。愛の欠如は、むなしいニセ物の可能性もあります。

次は善行です。

3 節

「たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。」

全財産を投げ出す慈善、命を投げ出す身代わりの死。そういうことも本当の愛がなくても、賞賛、名望を得るために、時には意地づくやもの勢いで、やってのけることがあるかもしれません。浪曲や映画の主人公のように。

本当の善行は教会の宝であり、教会史の誇りです。しかしここでも、神様の前にも、本人のためにも、教会の本当の目的のためにも、愛が根元の動機でなければならないのです。

有力な説教者、有数の聖書学者、熱狂的な集会、莫大な献金、りっぱな会堂、大きな事業、いずれも大切ですが、愛はもっと大切です。

どんなに豪華な結婚式も、愛がなければナンセンス。どんなに物を買って与えても、実は子供が求めているのは本当の親の愛。これらの原則は、あらゆる場面に真理なのです。

寛容から真理へ

次に愛の属性、本当の愛はどのようなものかと言うことがあげてあります。

4 節

「愛は寛容である。」

人にはいろいろな性質があり、したがってやり方、方針も違います。また、お互いに弱い人間だから間違い、失敗で迷惑をかけることもあります。それを理解し、受け入れ、時に許して深くとがめない、それが「寛容」で、これはたしかに愛の入口です。この入口を通らないで、寛容を基礎にしないでは、にこにこ顔も、親切そうな行為も、物の贈答も、本物ではないでしょうね。

「愛は情け深い。」

これは、人の困っているのを黙って見てもらえない。自分が困っているのと同じに感ずる心です。何とかしなくてはならぬと、人のことでも自分のことのように努力する態度です。これなしには、どんな愛の形も、やっぱりそらぞらしいのです。

「また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。」

人の幸福、美点を見た時に愛は「嫉妬」しません。わがことのように喜ぶでしょう。

ローマ人への手紙 12 章 15 節に

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」

とありますが、泣く者と共には泣けても、喜ぶ者と共にはなかなか喜べないものです。まず第一にこみ上げてくるのは嫉妬というのが人間の実状です。

次は自分が幸福な時に、あるいは自分の成功した場面では、愛は「高ぶらない」。むしろ、神のみ名をあげて感謝し、いばったり、見せびらかしたりしません。

次に「誇らない」というのは、表面は注意して、しおらしく、決して軽率に高ぶった言動は取らないが、実は心の中に誇りがぷんぷん。愛にはそういうこともありません。

これは自分と人の評価ということにあらわれて来る愛でしょう。

5 節

「不作法をしない。」

人の感じに対する愛の配慮があって、不快感を与えないように注意すれば、この人は自然に礼儀正しく不作法はなくなるでしょう。これは言動にあらわれる愛です。

「自分の利益を求めない。」

これは利害における愛です。いわゆる利他主義です。お母さんが「私はいいからお前おあがり」と言って、子供においしいものを食べさせて、子供の食べる様子を見ながら、自分が食べているよりもっとおいしそうな顔をしている。自分の母親のそういう姿をよく思い出します。

「いらだたない。」

反対に今度は自分が不利益になった。迷惑をこうむったという時にいらだちません。

「恨みをいだかない。」

これは恨みを記憶するメモを、心の中に持っていないことです。いつか精算してやろう。いつか復讐してやろう、という気持がなく、人の悪

事は許し、すぐ忘れて長くこだわらないことです。愛はもともと、悪事や争いを好かないから、そんなものを大切におぼえておきません。

6 節

「不義を喜ばないで真理を喜ぶ。」

これも本当の愛の特質の一つとして教えられています。本当の愛は本物を感じ取ります。そして、それに親近感と魅力を感じます。間違っただけのものや低級で不潔なものには拒絶反応を示します。

よく新聞に出る不純異性交遊。おまわりさんなどが補導しようとする時、「私たちは愛し合っているのに余計な世話をやく」と言うかもしれませんが、実はそこには本当の愛の性格が欠けているのです。

「愛は清潔でなければ強靱でない」などと言われますが、たしかにこれも、愛の属性の一つであると思われまます。

変らないもの

その次に、また別の姿が四つあります。

7 節

「(愛は)すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。」

私はお父さんお母さんが子供を育てる間には、この四つのことをいつも経験しているのではないかと思います。子供について「いつも忍耐し、信用し、希望を捨てず、徹底的にねばる」からこそ、子供は育ってゆくのではないのでしょうか。

さてこれはずいぶん、大ざっぱな勉強ですが、それでもどうも勉強し

ながら、だんだん恥ずかしくなってくるのをどうすることもできません。

実は私もお話をしながら、内心とても困っているのです。なぜなら、お話を自分に当てはめれば、自分の中に本当の愛はなくて、その反対のものしか見ることができないからです。

もし、この「愛」というところに自分の名前を入れて読んでみるならば、恥ずかしくて終りまで進めないでしょう。

しかし、もしそこにイエス・キリストの名を入れて読むと、全部アーメンです。キリストは、聖書のとおりのお方です。

この愛のカノンは、第一にまず私たちに本当の愛が欠けている実状を示して、反省を与え、謙遜にし、私たちに強いうえかわきと祈りの心を起こして下さるのです。

第二に、愛そのものでいたもう主イエス・キリストを愛し慕い、そのうるわしさにあこがれ、彼の姿にならいたいという、真剣な祈りを与えます。

第三に、人間の愛、すなわち異性の愛でありましても、親子の愛でありましても、それが本当の愛かどうかを見分ける標準になります。そして私たちの愛を、本当の、正しい愛に、規制し、深める力となるでしょう。

次に 8 節から 13 節まで

「愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。……全きものが来る時には部分的なものはすたれる。……いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」

一言で言えば「愛は時間や状況の移り変りによって、変質したり、価値がうすれたりすることはなく、完全最大のものである」ということでしょう。

私の父は九十歳ですが、元気で私と一緒に生活しています。小さい時、私は父に育てられ、守られ、また教えられて大きくなりました。今はその関係は変って、むしろ私が父の面倒を見、保護しているのです。でも私の父に対する愛、父の私に対する愛は、私が幼かったころと変わりません。そして、その愛のゆえに私たち父と子は幸福です。

私たちの生活や環境、年齢も人間関係も変わるでしょう。でも愛は変わりません。

私たちは最後に天国に行きます。そこに、クリスチャンの完成と栄光が待っています。しかしそこでも、変らないものが一つあります。それは愛です。そしてその栄光の天国でも、愛がもっとも大いなるものであると言われているのです。これは、今の私にはまだ十分にはわかっていない、深い愛の奥義なのでしょう。

ライ病院

私はある時、青森県のライ院の集会に行ったことがありました。その地方で伝道していた外国人の宣教師が連れて行ってくれたのです。その時、この宣教師の小学生の息子があとをついて来ました。行って見るとこの子供は、ライ院の気の毒な人たちと、とても親しい友達なのです。

宣教師は私に話してくれました。この子がまだ赤ちゃんのころ、宣教師は夫婦でライ院に伝道に行きました。ライ院では、伝染を避けるため、

赤ちゃんのうちに子供を引き離してしまうので、お母さんたちは赤ちゃんに飢えているのです。それで、輪になって、遠くから、お人形のような宣教師の赤ちゃんをながめているのです。その時奥さんが「だっこしてみますか」と赤ちゃんを貸してあげました。お母さんたちは代わる代わる赤ちゃんを抱いて、涙を流して喜び、ある人は「キリストの愛がわかった気がする」と言ったそうです。それから人々は、目に見えてキリストの福音に心を開くようになりました。

この赤ちゃんは大きくなって、もう小学生でしたが、ライ院の集会の時は、自分が一緒に行くのを役目のように思っているのです。

「家内はいつも勇気がありますから」

と宣教師は笑いながら話していましたが、私は心を打たれました。集会では私がお話をしましたが、私の心はずっと、この宣教師の愛に感動していました。

説教も講義も、金銭も事業も、愛に及ぶものではありません。愛の中に神のみ名があがめられ、神のみわざがなされてゆくのだということを今更に強く感じていました。

ローマ人への手紙 5章 5節に

「聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」

とありますが、私たちも、私たちの周囲も、聖書の標準で思ってみれば、本当の愛の欠乏で実は砂漠のようです。神の愛の水が、このみ言葉の約束のように、そそがれることを祈りましょう。

主婦サライと奴隷少女ハガル（創世記 16 章）

女のすすり泣き

創世記 16 章は、アブラムの家庭に起こった出来事の話である。

この話の中では、家長のアブラムは受身の立場で、むしろその妻サライと、サライの奴隷で、エジプト生れの少女ハガルが主役になっている。

それゆえ、これは「女性の章」と言える。

しかし「女性の章」と言っても、サムエルの母ハンナのサムエル記上、1 章、キリストの母マリヤのルカによる福音書 1 章、さてはルツ記やエステル記のような「りっぱな女性の章」ではない。

この章には、女性の弱さ、愚かさ、悲しさがそのままあらわれていて、いっそ「女性のすすり泣きの章」と呼んでもよいくらいのものだ。

アブラム夫妻に子供がないということは、この家庭のさびしさであるとともに、その信仰にかかわりのある重大な問題だった。

そもそもアブラムが故郷のカルデアのウルを離れて、遊牧の旅に出発したのは、神様の召命を受け、大きな祝福の約束をいただいて、その召命に従ったからだった。

このアブラムの使命も祝福も、全部彼の子孫によって成就するのである。

それゆえ神様は、彼に多くの子孫を与えること、子孫はやがて大民族、

みことばとの会話 小林誠一著

大国民となること、そして彼らこそ、全世界に神の救いと祝福を取り次ぎ拡大する大使命を果すであろうことを、約束なさったのであった。

この約束はカルデアのウルで、メソポタミヤのハランで（12 章）カナンンのベテルで（13 章）ヘブロンで、繰り返し与えられた。

しかしそれにもかかわらず、妻のサライに子供が生まれる様子はなく、彼らの夫妻の年齢は進む一方で、常識ではそろそろあきらめなければならぬ状態になっていた。長く祈り続けて来た夫妻の祈りは答えられそうもない。

これはただ家庭がさびしいというだけの問題ではない。子供が生まれなければ神様の約束もむなしく、結局カラ手形だ。生涯信じ従い続けて来た神様のご真実が疑わしくなれば、アブラムの信仰も破産、一生をそれにかけて来た、彼の生涯の価値も目的もむなしくなると、人生の破産にもつながるのである。

こういう場合に自然に話題にのぼって来るのは養子の問題だ。養子の候補者として、しばしば夫妻の話の中に出て来たのは、ダマスコのエリエゼルである。

彼は最初は奴隷だったが、アブラムの感化指導のもとに深く神を信じ、忠実で信頼できる男なので、今や人事や経営もまかせて、家族同様にしているのだった。

しかしこれは神のみこころではなかった。

「アブラムの身から出る者があとつぎとならなければならない」とおっしゃって、神様は養子の考えを差し止められたのであった。

しばらくたってその次に考慮にのぼったのは、妾腹の子をもうけるこ

とである。

なかなか子供が生れないのにあせった彼らは、今このことを考えたのであった。

そこでサライは、自分の奴隷として長く身近で仕えさせていた、エジプト生れの少女ハガルを、アブラムに推薦した。

この提案はサライから出たようである。

アブラムのために、世継ぎの子供を生むことのできない責任感も、一度はわがひざにアブラムの子供を抱きたいという願いも、サライにおいてももっとも切実であったと思う。

妾を持ち子供を産ませるぐらいのことは、昔の有力者では普通のことだ。

夫のため家のため、自分の嫉妬心、独占欲、誇りなどを殺して、このように取りはからったサライの行為は、昔は、一般社会ではむしろ賞賛されるはずのものだったのである。

少女ハガル

私は礼拝で、この章の講解説教をしようと思って、勉強していた時、ご婦人方の考えを聞いて参考にしたいと思い、4、5人の奥さん方が集まった時に言ってみた。

一人が言下に答えて

「もちろんアブラムは、サライの提案を断然拒絶すべきだった。そうすればサライも、本心では喜んだに違いない」と言った。

あまり簡単なのでみんな笑い出した。

しかしそれが本当だ。世間の常識ではイザ知らず、アブラムの家庭では、これは神様のみこころではなかったに違いない。これは人の愛の自然に反することであり、夫婦間の貞操の義務責任にもそむくことである。

こんな誤った方法の助けを借りて、神様のみこころ、みわざが全うされるということとはありえない話だ。

たしかに、アブラムがサライのこの提案を受け入れたことは、彼と家族のつまずきとなったのである。

もし彼がエリエゼルの養子の場合のように、今度も静かに神のみこころを尋ねたら、神様のおさとしがあったに相違ない。

しかし、今はそういう状態ではなかった。彼は、これも神の許容なさる一つの方法だと考えた。アブラムもあせっていた。とにかく待ち望むことに疲れて、何か方法を講じたかった。

少しアブラムの弁解を試みようか。

年老いたサライ。

一生子女の生れることを念願しながら、ついにその望みがかなえられず、悄然として老い朽ちてゆくサライ。

このサライに、とうとう子供を産ませることができないかもしれないという、夫としてのあわれみの心と責任感、アブラムにおいて深かったと思う。今サライの提案を受け入れたのは、たしかにアブラムのやさしさからという一面もあったに違いない。

一体アブラムは失敗の少ない人だが、軽い失敗の記事が、ここを含めて、聖書の中に2、3回記されていて、それがみな奥さんのサライに関

係がある。

孔子は「人の失敗をよく観察すれば、その人の長所がわかってくる」という意味のことを言ったが、その筆法を用いれば、アブラムは奥さんにやさしい人だったと思われる。

一方、ハガルも女主人のサライから、こういう大切な、しかもデリケートな役目の推薦を受けるくらいだから、最初は奴隷でも、今は、その信仰、忠実、従順、そして若さと健康と美貌によって、サライから妹のように、愛され信頼されていたに違いない。

そこで安心してアブラムに推薦したと思うが、さてハガルが妊娠してみると、事態が少しずつ変化した。

まずハガルの心境に変化が生じたが、これも人情の自然と言えば自然で、彼女は次第に今の立場を自覚して来たのである。愛されることにもなれて来たし、特別な待遇を受けることも当たり前に感ずるようになった。

アブラムに子供を与えることができないで、むなしく老いたサライの地位は、実力を失った形骸のようなものだ。今やアブラムの子供を宿したハガルは、アブラムとその一族に光明と希望をもたらした天使のようなもので、それにふさわしい若さと健康と美しさに輝いているのである。

「彼女は自分のはらんだのを見て、女主人を見下げるようになった」と聖書に書いてあるとおりだ。

アブラム家は次第にむずかしい空気になって来た。

女のあさはかと言えばそれまでだが、それなら、今になってハガルに腹を立てているサライだってやはり女のあさはかさだ。

みことばとの会話 小林誠一著

アブラムはこの事態に対して、どう対処しなければならないか。

サライの不安

男性には男性特有の問題があり、女性には女性特有の問題があって、それぞれ神の恵みと助けが必要なのである。

アブラム一族と言え、遊牧民だから領地こそないが、その地方では、大名ぐらいの勢力である。一族の管理、財政の運用、他種族との交渉など、すべてはまずアブラムの責任で行われなければならない。

14章には、思いがけぬ戦争にまきこまれて、捕虜になって連れてゆかれた、甥のロトとその一族を救うために、三百数十名の手兵を率いてダマスコまで遠征し、みごとに敵を打ち負かしてロトを救い出した話が出ている。

この戦争で、結果的には、思いがけなく戦争当事者の一方を助けたことになり、これを機会に、ある種族とは同盟関係に、ある種族とは敵対関係に立つはめに陥りかけたが、アブラムは信仰生活を守るために、異邦人との同盟を拒否した。

この孤立は實際上、損失と危険をまねくことになったが、神のみこころにはかなうことであつたから、アブラムにとって、更にまさる祝福のポイントとなった。

これらすべては、アブラムの決断と責任によるのであって、男子たるもの、その責任は重大と言わねばならない。

特別に神の恵みと祝福が必要なわけだ。

これに反してサライの方は、弁当でも用意したり、主人が帰って来た

ら風呂でもわかしておけば（私たちの家庭の話だが）よいのだから、女性の立場は気楽だ。

しかしその反面、女性は夫に服従する間に、いつの間にか自分に過重な重荷を負ってしまい、それに耐え切れなくなる、という場合がある。

サライはもともとから信仰の女性であることは言うまでもない。

しかし11章でカルデヤのウルを出発し、13章で甥のロトと別れた時など、アブラムの決断に服従して来たことも事実なのである。

商人の妻になったために、お店でお客の相手をし、農家の嫁であるがゆえに畑仕事に疲れ、牧師の妻であるがゆえに牧会のむずかしさに耐えるなど、これが女性の姿なのだ。

サライがアブラムの妻として尽くしながら、子供の生れないことに、普通の家庭の妻以上に深刻に悩んだのは、夫のアブラムに、大切な神の召命、また使いがあればこそそのことなのだ。そして、とつおいつの思案の末に、おのれを殺してハガルをアブラムにすすめたのも、良かれと思っただけのことである。

しかるに今、飼犬に手をかまれるように、若いハガルに見下げられて、くやしがつて泣く。

祈りの不足と、神のみこころにかなわない小刀細工と、女性特有の読みの浅さで、みずから招いた結果とは言え、私は良い悪いは別として、この場合はサライがかわいそうで仕方がない。

サライはついにアブラムに訴えた。

「ハガルの態度は主人たる自分に対して無礼です。この調子では先ゆきが心配だ。これもあなたの責任です。何とかして下さい。」

みことばとの会話 小林誠一著

サライはすでにくやしいだけでなく、大きな不安を抱いている。その立場はすでに弱く、ハガルは自分の奴隷であっても、今はアブラムの子の母であってみれば、アブラム抜きにはどうすることもできない。場合によっては、アブラムの気持ちひとつで、それこそ文字どおりサライとハガルの立場は逆転しかねないし、今後のサライの運命もどうなっていくかわからない。サライは自分のことでも、最終的に物ごとを決定する力を持っていない。もどかしいことである。

ここでアブラムに訴えるサライの言葉は自分勝手のようなのだが、実は不安を押し隠しながら必死に懇願しているようでもある。

一方、ハガルはサライに妹のように愛されて、その上アブラムに推薦された。これは彼女の出世であり、光栄である。

しかしこれは問題を含み、悲哀を含んだ出世だ。

彼女は所詮奴隷なのだから、推薦と言っても、これは実は命令と同じで、奴隷の小娘がそれを断わることはむずかしい。

奴隷でも人間だから、その気持は複雑であったかもしれない。イヤ、奴隷にそんなデリケートな心理はない。ただキョロキョロして喜んでいただけかもしれない。しかし、それならなおさら、ハガルはあわれな少女なのだ。

やがてハガルが妊娠したとたん、いばり出して女主人を見下げたのはよくない。軽薄だ。

しかし15や16の小むすめが、急にこんなことになった場合に、「前の身分を忘れるな、有頂天になるな、謙遜にしている」と言っても、それはむずかしい無理な注文ではないだろうか。今のハガルの身分も、実

はやはり、女性特有の、服従によって負わされた、過重な負担なのである。

アブラムの決断

さてむずかしいことになって来たが、この場合のアブラムの結論は次のようなものであった。

「あなたのつかえめ(ハガル)はあなたの手のうちにある。あなたの好きなように彼女にきなさい。」

私が話し合った例の奥さんたちは

「これではアブラムは無責任だ」

と評していたが、しかし実は、アブラムにはこれしか態度の取りようはなかったし、またこれはなかなかりっぱな態度だったと、私は思う。

「ハガルがかわいそうだから」

と言って、アブラムがハガルをかばい、サライを黙らせるのはよくない。それでは、ハガルがいい気になってつけ上がる一方だし、あまりにもサライの立つ瀬がなくなってしまう。

しかし反対に、アブラムとサライが一緒になってハガルをしりぞけるとなると、そもそもこのことが、サライの提案と、アブラムの賛成と、そしてハガルの服従によって始まったことだけに、片手落ちの感をまぬがれがたい。

もちろん、いろいろ調停、話し合いのような方法が、何度も繰り返されたあげくのことだったろうが、つまりはアブラムの最後の申しわたしの内容はこうだ。

「もともとこれは、サライの考えから始まったことだ。ハガルはそれに従ったのだ。そしてサライの希望どおり、彼女は妊娠した。

今の状態の解決については、二人で祈って、最初からのいきさつをよく考えて善処するがよい。

ただ念のために言うておく。

ハガルがアブラムの子を宿していても、アブラムは彼女に対して、サライの賛成なしには何事も特別な決定はしない。サライは主婦でハガルはその奴隷だ。アブラム家の構成と秩序には変化はない。

私はしばらく祈りつつ黙っていよう。

お前たちでよく祈り、考え、話し合っって一番良いと思うようにきなさい。

私はお前たちが、最後には良識を働かせると期待しているし、また神様が導いて下さることを信じている。」

これはいかにも穏健だが、もう少しアブラムから特別な取り扱いを受けると期待していたハガルにとっては、ショックだったに違いない。結局自分は利用されたにすぎず、いいごきげんでいばったのも、要するに空中楼阁だった。そこでいくらかフテくされる。

ハガルがフテくされれば、またサライに叱られる。感情的になれば、今はサライにいじめられる立場だ。

とうとうハガルは家出した。

アブラムをうらみ、サライにいきどおり

「自分は利用された。裏切られた。絶望だ。ヤケだ」という調子だったに違いない。

家出と言っても無断で逃亡した奴隷だから、これは一種の犯罪で、いわゆる日かげ者、お尋ね者になるのだから、ハガルにとっては自殺の次ぐらいだったに違いない。

故郷はエジプトだから、とりあえずその方角に歩き出してみたものの、奴隷に売られた身であってみれば、故郷のエジプトが、暖かいわけでも楽しいわけでもなく、第一、遠く危険な砂漠の道を女一人で歩き通せるかどうか。よしや歩き通してエジプトに着いても、はんぱな妊婦が新しい生活を開けるだろうか。

荒野の泉

聖書には

「主の使は荒野にある泉のほとり、すなわちシュルの道にある泉のほとりで、彼女に会い、そして言った」とある。

泉のほとりでハガルは泣いていたのか。

砂漠の泉と日本の井戸とは違うが、井戸のほとりやお勝手は、食事の用意や洗濯など、女の仕事場であるとともに、昔から女の泣き場所なのだ。お嫁さんも女中さんも、昔はよく井戸やお勝手に泣いたものだ。

しかし今、気持の持ってゆき場も、身のおきどころもなく、一人で泣いているハガルを、主の使いがじっと見ていたこと、ここでハガルに話しかけて下さったことは、何という感動的な場面だろうか。

ハガルはこの経験について、あとで言っている。

「ここでも、わたしを見ていられるかたのうしろを拝めたのか。」

みことばとの会話 小林誠一著

その意味は

「主はここでも私を見ていて下さったのか。そして、ここでも主は私の礼拝を受け入れ、私の祈りを聞いて下さるのか」ということだろう。

井戸やお勝手は、女の仕事場で泣き場であるだけでなく、同時に多くの女性の祭壇であり、聖所であるのだ。

主は偉大な聖徒アブラムとともにいて下さるように、奴隷女ハガルとともにいて下さり、女性の弱さと問題のまんなかにご臨在下さるのだ。ありがたいことだと思う。

さて、今ハガルには問題解決の道がないのか。彼女は本当に八方ふさがりなのか。

主の使いは語られる

「サライのつかえめ（奴隷）ハガルよ、あなたはどこからきたのですか、またどこへ行くのですか。」

ハガイは今へりくだって、新しい心で、本来の自分の立場を自覚しなければならない。

そこから、あらためて万事を見なおし考えなおしてみなければならない。

どういうところから、自分の感情と行為と生活に誤りが生じたのか。どうしてあんなに気負い立って傲慢になり、わがままになってしまったのか。

なぜ頭に来て、ムキになり、短気を起こしたのか。

そして、その結果、今の自分はどのような状態にあるのだろうか。

反省し、悔い改めないで、このまま進んだら、最後に自分は、またおなかの赤ちゃんはどういうことになるのだろう。

本来の自分を忘れ、神様の祝福と、人の愛や行為になれすぎて謙遜も感謝もなくなり、高ぶりと勝手のかたまりになっていた自分を反省し悔い改めるように、主の使いはさとしたのだった。

それが本当の問題の発生源、ガンだ。

それを悔い改め、清められるならば、決してハガルは八方ふさがりでも絶望でもないのである。

なお主の使いは言う。

「あなたは女主人のもとに帰って、その手に身を任せなさい。」

これは、ハガルにとって気の進まぬことであつたに違いないが、再びへりくだって、もとの一女奴隷として、女主人サライに仕え服従せよ。

信仰と忍耐をもって神の摂理配剤を信ぜよ。境遇を甘受せよ。その中で祈りつつ希望をもって生きよ。そこに次第に道が開かれ、問題は解決の方向を見だし、ついには必ず、神の導きと祝福を感謝するはずだからである。

ことにハガルを慰め励ましたのは、その胎内の子供に対する神の保護と祝福の約束であつた。まごまごすれば一端の短慮から、母子もろとも野たれ死にをしかねなかつたこの子も、健康な男子として成長し、やがて有力な一族の族長になるという約束であつた。

このように主の使いの言葉は、するどくハガルの心の真相と問題点を突いて、悔い改めと服従を命ずるものであつたが、同時に彼女を深い愛とご摂理の中に包み、本当に彼女と彼女の子供を生かすものであつた。

みことばとの会話 小林誠一著

まことに

「主のおきて（み言葉）は完全であつて、魂を生きかえらせる」（詩篇 19：7）

とあるとおりである。

そこでハガルはみ言葉に従い、悔い改めてもう一度アブラムとサライのテントに帰って行った。

仲なおり

アブラムとサライの方でも、ハガルの家出はショックだった。

アブラムにとっては、せっかくできた自分の子供を、その母親もろとも失つたことになる。

サライは結果として、自分が保護を加えなければならないはずの、弱い立場の少女を、利用し虐待して、家出にまで追いやってしまった。ハガルと、胎内にいるアブラムの子供に万一のことがあれば、それは主としてサライの責任である。

一体実力を持った人、強い立場の人が、おとなげもなく弱い者と五分五分に口をきけば、結果的には「弱い者いじめ」になる。

だから、弱い人に対してはよほど注意深くしなければならないのは、ボクサーがふだん簡単に人を殴れば、大変なことになるのと同じだ。

ムキになっていたサライも、心を痛めていたアブラムも、今落ちついてみると、主のしもべとして、とんでもないことをしていたのに気がついた。

彼らは悔い改めて、主のゆるしを祈つたに違いない。今更、ハガルに

対するあわれみの心がこみ上げて来たに違いない。

彼らは、ハガルが無事であることを祈るとともに、百方手を尽くして、そのゆくえを尋ねさせていたろう。

そこへ、疲れやつれ、心砕かれ、へりくだったハガルが帰って来た。

ハガルが涙ながらにゆるしと保護を請えば、アブラムもサライも、同じくゆるしを求めながら、一生懸命ハガルを介抱したろう。

これはたしかに三人にとっての救いだった。

そしてまた三人の生活が始まった。

祈りと愛と知恵。それによって三者とも本来の正しい立場を悟り、お互いにそれを認め合い、嵐のあとの静けさのような生活が続いたと思うが、その中に、一つの諦念のようなものもただよっていたかもしれない。

やがてハガルからイシマエルが生まれた。

主の使いの預言のように健康な男の子として育つとともに、これもまた預言のように、反抗児、不良児、問題児となって行ったのもやむをえない。

彼は今はアブラム家のあとつぎではない。

ハガル母子は低い身分立場に甘んじなければならず、ハガルの腹からもう一人の子供が生れることをだれも望まない。おそらくアブラムからも遠ざけられたろう。

アブラム、サライの夫婦は再び神の約束のとおり、サライの腹からあとつぎの子供が生れることを祈り始めたが、祈りもやや消極的になり、ハガルやイシマエルが、その祈りに心を合せるにも、その気持は複雑だ。

これは、いわゆる信仰と祈りの沈滞で、さしものアブラム一家も、こ

の沈滞のまま、約 13 年を過ごしたものと思われる。

15 章までは、アブラムの信仰は高揚に次ぐ高揚だった。17 章からまた、アブラムの信仰が回復して積極的となってゆくのが見える。16 章はアブラムの生涯におけるうす暗い谷間で、彼にとってはなくもがなの感じだろう。しかしこれもまた貴重な章である。

アブラムでもダビデでも、聖書の中に類型的な優等生としてのみ記されてはいない。彼らもさまざまな弱さの中であって、ただ神の恵みによって信仰生活を全うすることができたのだ。

これらの学びによって、私たちもみずから警告を受け、また神様のご忍耐と恵みを信じさせていただくのである。

「旧約の魅力は説教が少なくドラマが多いことだ」とよく言われるが、本当にそうだと思う。

デナの事件（創世記34～35章）

今日的な聖書

創世記34章は、有名でもないし、この章が説教のテーマになる機会も少ないと思います。しかし、創世記の連続講解説教をしながら、ここにさしかかったところですから、今日はこの章からお話ししましょう。

この章の登場人物は

- (1) 不注意な少女
- (2) 自分勝手な青年
- (3) 甘い父親
- (4) きびしくはげしい兄たち

という人たちです。

そしてお話のテーマは

「恋愛とセックスと結婚」

あるいは

「交際にしては深入りしすぎた、しかしとうとう結婚はできなかった話」

ということになると、ひどく今日的な感じになって来ます。

ご承知のようにヤコブとエサウの兄弟は、兄弟げんかのあげく、別れ別れになって、20年も遠く離れて暮らしていました。

しかし、ヤコブの心が砕かれて来て、ペニエルの祈りにおいて深い神の取り扱いを受けた結果、人柄も変わりました。

柔和な、しかし深い確信を持つ人となりました。

その結果、名前も変えるように神様から命じられました。

今では

「ヤコブ」その意味は「押しのける者 = 邪魔物はのぞけ」だったのが今度は

「イスラエル」その意味は「神様のプリンス」と名のるようになりました。

そして兄エサウと和睦ができて、今は先祖の地カナンに、再び住むようになったのでした。

しかし兄エサウはもともと乱暴な人で、いくらか気まぐれでしたから、注意深いヤコブはただちに一緒に住むことをしないで、別の方面を遊牧していました。

そしてある期間、シケムに滞在していましたが、その時のこと、ある日娘のデナが「その地の女たちに会おうとして出かけて行った」のです。

文語の聖書では

「デナ、その国の女を見んとて出でゆきしが」

となっています。

山室軍平氏は

「どうせ女たちを見るだけでなく、男たちをも見たっかたのだろうし、見るだけでなく、自分も見られたかったろう」

と言っていますが、多分そうでしょう。

デナはバザール、マーケットなどの盛り場か、あるいはお祭りのようなところに行ったのか、あるいはヤコブ一族も、ハモル一族も両方とも有力者ですから、すでに交際があって、ハモル家で開かれた、今日で言えばパーティーのようなところに招かれて行ったのでしょうか。

とにかくそこで、ハモルの息子のシケムという青年が

「彼女を見て、引き入れ、これと寝てはずかしめ」ました。

そして

「彼は深くヤコブの娘デナを慕い、この娘を愛して、ねんごろに娘に語った」ので、

お父さんのハモルに

「この娘を私の妻にめとってください」

と頼みました。

恋愛と姦淫

シケムはデナを

「引き入れてはずかしめた」

と書いてありますが、こういうことの判定はデリケートで、今日といえどもむずかしいのです。全くの暴力で犯されたのでしょうか。あるいは、青年のしつこさを断わり切れず、心ならずもそういう結果になったのか、またある場合はむしろ女性の媚態の度が過ぎた、ということもありえます。

恋愛と姦淫は紙一重とよく言われますが、これは順序から言えば逆で、

みことばとの会話 小林誠一著

まことにまずいことでした。

人が愛情を感じて結婚の希望を抱くようになった場合、まずそれを打ち明けてよく話し合い、祈り合うことが大切です。

一体そういう場合には男性たるもの、女性が「イエス」も「ノー」もどちらの返事もしやすいように、ゆっくり考えたり、だれかに相談したりできるように、節度のある申し込み方をするはずです。

そのために、わざわざ直談判を避け、しかるべき人を立てて意志を伝えてもらうような配慮が、昔から行われていたのです。

利害や圧力を使っての有無を言わせぬ掛け合いや、女性の意志の弱さや、ムードに弱いところなどにつけこんでたらしこむなどは、男性としては実はみっともないのです。

最初に紳士的な申し込み。それから交際、話し合い。やがて、家族の賛成同意。いよいよ結婚式をあげる。セックスはそのあとのはずです。

シケムとデナの場合は順序が逆です。

事がそもそもセックスから始まるのではまるで動物です。

しかも、男性の側の強行という要素があったとすれば、シケムは男の風上にもおけないやつです。

しかし、デナの方はどうでしょうか。

一体彼女は真の神に選ばれ、尊い使命をになっている選民の娘です。偶像礼拝と不道德の異邦人とは、先祖代々、常にその交わりに一線が引かれていて、それはよく教えられていたはずでした。

もちろん、異邦人との結婚などは、初めから考えられないことでした。彼女にその自覚が強く、そしてもともと乱暴で危険な異邦人に対する

警戒心があったら、こんな事件にまきこまれることもなかったのではないのでしょうか。

結果論でデナをとがめるのも気の毒ですが、こういう場合、責任が百パーセント男性の側にあるとも言えないのです。

積極的な悪意はなくても、女性の無邪気そうな、何気なさそうな、態度や服装の油断が、事件のキッカケとなることはよくあります。

悪魔は人を誘惑しますが、悪魔に言わせると

「人間も案外悪魔を誘惑するよ」
ぐらいなことを言うかもしれません。

いずれにしてもシケムは、無責任な態度でデナと関係しました。

その結果、この娘が好きになって、結婚を望むようになったからいいようなものの、そうでなかったら、デナは結局、遊び半分でもてあそばれた被害者として、泣き寝入りになりかねないところでした。

さて、この知らせはだれかによって、ヤコブのところにもたらされました。

聖書の表現では

「シケムが娘デナを汚したことを聞いた」
とありますが、たしかにそうです。

しかも本人のデナは、シケムのところにとどまっていた帰って来ないので。

ヤコブはこの知らせを聞くと、野に出て家畜を飼っている息子たちが帰って来るまで黙っていました。

反射的な言動は危険ですから、怒りにしても悲しみにしてもいちおう

押さえたのでしょうか。

何よりもお祈りしなければなりません。

また、息子たちが帰って来たら相談しなければなりません。

断わりにくい交渉

さて息子たちが仕事から帰って来てこの話を聞くと、非常に悲しみ、非常に怒りました。当然です。

それにしても、なぜデナはシケムのところにとどまっていたのでしょうか。シケムのこういう形のプロポーズに対して、どういう態度で応じていたのでしょうか。

シケムはデナを、強制的に捕えて、家に帰ることを許さなかったのでしょうか。

あるいはすでに、デナもこの結婚を望んでいて、その方法として、親や兄弟との交渉の間、自分がシケムのところにとどまっている方がうまくゆく、と考えていたのでしょうか。

あるいは、どうしていいかわからないで、ただ泣いていたのでしょうか。わかりません。

さて翌日になると、本人のシケムと、父親のハモルが、すっかり着飾って、大勢の召使いにりっぱなおみやげを運ばせて、交渉にやって来ました。

父親のハモルはわが子かわいさから、ただもう息子のために、欲しがっているお嫁さんをもらってやりたい一心のようです。

また、かねがねヤコブ一族を尊敬していたと見えて、これを機会に親

類づきあいができれば大喜びだというのも、その精いっぱい気持でした。

ハモルは言います。

「息子のシケムは、心からお嬢さんを愛し慕っています。どうか彼女を息子の妻に下さい。今後とも、あなたのご一族と私の一族は、親類づきあいをしましょう。お互いの息子、娘たちに自由に結婚を許しましょう。

ご一族もどうぞわれわれと一緒に、この土地に住んで、自由にわれわれの土地をお使い下さい。

経済的協力もいたしましょう。

あなたがたはここで、大財産家になれるはずです。」

シケムも言います。

「よろしくお願いします。ご要求は何でもおっしゃって下さい。結納金や、結婚のプレゼントその他、何でもおっしゃるとおりにします。

どうかデナを僕に下さい。僕は彼女に夢中なのです。僕はきっと彼女をシェアせにします。」

とてもいねいな話ですが、しかし本人のデナをつかまえてあるのですから、実はこれはいやおうなしの交渉です。

またヤコブ一族が、彼らの言っているような関係を、異邦人との間に結ぶことは、神の堅く禁じたもうところでした。

どうしたらいいのでしょうか。

ハモル父子はただもう、デナをもらいたい一心です。

一方のヤコブは、事情がなかなか複雑だから、即答、即決は避けたい

ところですよ。祈りつつ、やがて解決の道を開いて下さる神様にまかせよう、という態度です。

しかし、兄シメオンとレビは非常に怒っているので、もうその腹は決まっていたでしょう。

第一に、こんな無理押しに持ちこまれて来た、彼らの提案を受け入れることはできません。

第二に、妹のデナは必ず取り返さなければなりません。

第三に、族長の娘がはずかしめられたのだから、報復をしなければなりません。

一体遊牧民は、牧畜が仕事ですが、自分の土地は持っていません。

(土地を所有することが必ずしも必要でもないし有利でもないのは、狭い土地に住んで先祖から農業に従って来た私たちには想像もできません。)

言わば、人の住んでいない土地に生えている草を、家畜に食べさせながら移動する。しかし彼らとて畜産品だけで生活できるものではありませんから、交易のためにいろいろな民族と接触をしなければならないのです。

ですから、他民族と事を構え、争ってばかりいたら生きてはゆかれません。

しかしその反面、他民族にあなどられて、好き勝手にいじめられているようでも、やはり生きてゆけないのです。

それゆえ、族長の娘を侮辱されたまま、泣き寝入りはできません。

しかし、ここで話がこじれて正面から争うことになる、小戦争が始

まります。土地の人間には味方する者も出ましようが、こちらはそうもゆきません。

損害ばかり多くて目的は達せられず、かえってこちらが逃げ出すはめにならないとも限りません。

そこでさいわい、相手が友好ムードでいるのを利用して、だまして不意打ちを食わせよう、ということになりました。

すばやく攻撃して完全に相手をやっつければ、まわりの部族も、あっけに取られ、もう済んでしまったこととして、今さら面倒な問題にはしないでしよう。

報復の行きすぎ

すでに欺瞞作戦となれば、相手が信用してだまされるような、もっともらしい材料を持ち出さなければなりません。

そこで、宗教的儀式の「割礼」が使われました。

ヤコブ一族が神の選民をもって自任し、その神によって異邦人との交際を禁じられていることは、だれもが知っていました。

そして、その選民のしるしが「割礼」であることもまた、人のよく知るところだったと思います。

それゆえ「ハモル一族の男子が全部割礼を受ければ、それを条件にして、こちらもハモルたちの提案を受け入れ、友好関係を結ぼう」という言葉に、彼らはあざむかれました。

そこで彼らは自分の町に帰ると、ヤコブ一族との友好がいかに有利であるか、ということで人々を説得します。有力な族長の発言ですからみ

んな賛成して、男たちはそろって「割礼」を受けました。

「割礼」というのは、体の一部分に傷をつける儀式ですから、傷の痛みで男たちはしばらくは立ち上がれないことになりました。

そこにシメオンとレビは、武装した一族の青年たちを率いて不意打ちを食わせます。

ハモル、シケム親子を殺し、デナを連れ戻しましたが、勢いのおもむくところ、多くの人を殺傷し、また略奪をして帰りました。

やむをえない事情もありましたが、「割礼」のような神聖なことを、欺瞞と戦術の材料に利用したこと、ハモル一族への報復が過剰残忍であったことは、シメオン、レビの間違い、行きすぎと言わざるをえません。

ヤコブの家の方もおさまりません。

ヤコブは言います。

「お前たちのやりかたはひどすぎる。この地の住民をあまり刺激しすぎた。皆が集まって攻撃をして来たらどうする。われわれは全滅だぞ。一体どうするつもりだ。」

「それではわれわれの妹デナを、親や兄弟がついていながら、遊女のようにしていいのですか。そして、ハモルたちと友好、交際の関係に入った方が良かったのですか。それは、神が禁じられたことではありませんか。ソドムに住んだばかりに墮落したロトの話をしてくれたのはお父さんですよ。

一体、事の起こりはデナ、お前だぞ。お前はもう外へはデナ。」

デナは泣きながら

「いくら私だって、どこへも出ず、だれとも交際しないでいられます

か。シケムは乱暴だったけど、それだけ私を真剣に愛してくれたんだわ。かわいそうに殺しちゃうなんて。あんなに私を愛してくれる人はもういません。私はもう一生結婚なんてしないわ」

ぐらいのことは、言ったかもしれません。

実際に起こってくる問題は複雑で、本当にむずかしいことです。

私は長年牧師をしています。問題の解決などというものは、いくら牧師だって、手品師がシルクハットから、兎を取り出すようなわけにはいきません。

この事件の一人一人の動き。その中でやむをえなかった点。間違っていたと思われる点。これはたしかにそうすべきだった、良かった、と思われる点、などを研究し、話し合ってみるのも有益です。

またヤコブ、ハモル、シケム、デナ、兄たち、それぞれの立場も責任も異なりますが、私たちがそれぞれの立場だったら、どうでしょうか。

さてヤコブはどうしたかという、熱心にお祈りを始めました。そして一同にも、祈ること、へりくだること、悔い改めること、心の態度や生活を改めて神に従うことを命じました。

神のあわれみがそそがれて、真実な悔い改めが始まりました。

デナと言い、シメオンやレビと言い、ああいう事件が急に起こったのではありません。やはり心と生活の中に、いつか神のみこころでないものがまつわりついて来て、霊的な濁り、生活の低下が起こっていたのでした。それが事件の本当の原因でした。

ヤコブも家長として、指導力、感化力が足りなかったこと、祈りと指導訓練の怠慢を悔い改めたでしょう。

デナも、シメオン、レビも、へりくだって祈るうちに、失敗の萌芽が、今まで気がつかなかった、隠れた所に存在していたことを知って、今更のようにそれを悔い改めたことでしょう。

例をあげれば、そっと持っていた美しい小さな偶像や、また耳かざりなどの異教的装身具が、悔い改めと放棄の対象とされました。

やがて神様はヤコブに、一族を連れてここを立ち去るようにお導きになりました。

それは、これ以上の紛争を避けるためにもよいことだったと思います。

その時その地方の人々は、だれもヤコブ一族を追跡しませんでした。

聖書には

「大いなる恐れが周囲の町々に起ったので」

と記しています。

ヤコブは一同とともに、神に示されたベテルに着きました。

ここは昔ヤコブが、兄エサウとの争いのために生じた危険を避けて、メソポタミヤに向かって心細い逃亡の旅に出発した時、最初に野宿した所です。

ここで神様は、悔根と傷心のヤコブに、彼を見捨てず彼を離れず、生涯、保護と祝福を与えて下さると、お語り下さったのでした。

その記念の地です。

今ここで、また神様は、失望と恐怖の中に沈んでいるヤコブに、次のように祝福の約束を、繰り返し与えて下さったのでした。

「神はまた彼に言われた、

『わたしは全能の神である。』

あなたは生めよ、またふえよ。

一つの国民、また多くの国民があなたから出て、
王たちがあなたの身から出るであろう。

わたしはアブラハムとイサクとに与えた地を
あなたに与えよう。

またあなたの後の子孫にその地を与えよう。』』

信仰の疑惑（詩篇 73 篇）

健康と病気

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」とは、テサロニケ人への第一の手紙 5 章 16 節以下にある有名なみ言葉ですが、このように、クリスチャンはいつも祈りと感謝と喜びに満ちて、張り切ってご奉仕に励んでいるはずです。言うまでもなく、すべてのクリスチャンはそれを望み、期待しています。

しかし時には、必ずしも期待のごとくならず、クリスチャンでも意気消沈して、自分でも持てあますような不信仰、疑惑に陥ることもあります。

それは、人間はいつも健康でいたいけれども、心ならずも時々病気にかかるのと似ています。

それにはいろいろ理由があるでしょう。

たとえば神様から示された罪を悔い改め、捨て去ることをためらっている。あるいは、同じように神様からなすべきことを示されながら服従することをしない、というようなケースもありましょう。

そのために、神様に対して私たちの心が気まずくなり、祈りにも自由がなくなります。教会生活にも奉仕にも力がなくなります。

それゆえ私たちはいつも、祈りによって、み言葉の光によって、魂と

生活を調べていただいて、故障が生じないように、魂が健康であるように、霊的生活が自由でスムーズであるように、注意深くなければならないのです。しかしながら、それ以外にも、人間の気持は境遇の影響を受けやすいので、クリスチャンといえどもその影響を完全に免れることはできないでしょう。

ごちそうを食べた時にきげんが良く、おなかがすいてくるとさびしくなったり、あるいはイライラするというのは日常の経験です。

さびしく孤独な青年時代に、信仰に救いと慰めを求め、教会生活に励んでいた人が、神様の祝福によって、幸福で華やかな生活に入ると、いつか教会生活をやめてケロリとしている、などというケースもありますし、反対にいくらクリスチャンでも、病気や貧乏や、むずかしい人間関係など、苦しいことが続けば、気が弱くなるのもやむを得ません。人間が境遇の影響を受けやすいことは事実です。

どんな理由にせよクリスチャンも、魂が弱くなって、霊的生活が順調でないのを経験することがあります。この詩篇 73 篇は、そういう苦しい人の祈りの詩篇です。

1 節に

「神は正しい者にむかい、

心の清い者にむかって、まことに恵みふかい」

とあります。

これは私たちが聖書を勉強してよく知っている、信じている、また期待している原則です。よくわかっていることです。だが作者は「しかし」と言います。今の実際の状態を考えれば、

2 節

「しかし、わたしは、わたしの足がつかずくばかり、
わたしの歩みがすべるばかりであった。」

どうもすべったりころんだりの、はかばかしくない、むしろあぶなっかしい信仰生活の有様です。

なぜでしょうか。その理由の一つが3節以下に出ていますが、この人はノンクリスチャンの生活に気を取られました。ノンクリスチャンがいかに自由で幸福そうに見えて来ました。その反動でクリスチャン生活が、窮屈でさびしい、不幸なもののように感じられて来ます。

そういうところに、この人の場合は原因があったようです。

3 節から 6 節まで

「これはわたしが、悪しき者の栄えるのを見て、
その高ぶる者をねたんだからである。

彼らには苦しみがなく、

その身はすこやかで、つやがあり、

ほかの人々のように悩むことがなく、

ほかの人々のように打たれることはない。

それゆえ高慢は彼らの首飾となり、

暴力は衣のように彼らをおおっている。」

彼らは成功と幸福を誇り、まるで高慢をネクタイにし、暴力をコートにしています。

ノンクリスチャンの魅力

みことばとの会話 小林誠一著

7 節から 10 節

「彼らは肥え太って、その目はとびいで、
その心は愚かな思いに満ちあふれている。

彼らはあざけり、悪意をもって語り、
高ぶって、しえたげを語る。

彼らはその口を天にさからって置き、
その舌は地をあるきまわる。

それゆえ民は心を変えて彼らをほめたたえ、
彼らのうちにあやまちを認めない。」

すぐくもうけた。成功している。社長になった。政治家になった。大きな邸宅をたてた。新聞やテレビに出る。そうになると、それに驚いて、気を取られて「彼らは良くない事をしている。罪を犯している。彼らの生き方にも、問題や間違いがある」などということは全然気になりません。問題にもなりません。

11 節

「彼らは言う、『神はどうして知り得ようか、
いと高き者に知識があろうか』と。」

これでは「神様だって実は何にもわかっちゃいないんだ」と言わざるを得ません。

12 節から 14 節

「見よ、これらは悪しき者であるのに、
常に安らかで、その富が増し加わる。

まことに、わたしはいたずらに心をきよめ、

罪を犯すことなく手を洗った。

わたしはひねもす打たれ、
朝ごとに懲らしめをうけた。」

そういう中で私たちクリスチャンは、正直に真実に神様の前に罪を悔い改め、そして自分の心と生活が清く、神のみこころにかなうように、いつも注意がかくしています。それなのに、神様はいっこうに私たちを守って下さらないし、祝福も幸福も与えて下さらないような気がします。このごろといえば、まるで試み、懲らしめの毎日で、朝から晩まで打たれどおしみたいに感じます。

悪い人たちが、平気で栄えているのを見ると、私たちの戦々恐々とした清い生活もムダな力みにすぎないのでしょうか。

どうもこれは、弱さと、不信仰に沈んだクリスチャンの泣きごとのようです。

しかしこれは、クリスチャンが、世の中のノンクリスチャンの姿を見た時だけでなく、クリスチャン同士を見てさえ、場合によってはやはりつまづくことがあるのです。

「どうも私は、ほかの人に比べると神様の恵みを十分受けているとは言えない。一生懸命忠実にやっているつもりなのに、むくいられない。かえってそれほどでもない人の方が成果をあげている。」そういう嫉妬心やつぶやきに心をいためることもあります。

もしこういう気持ちに落ちこんだら、一つ自分に質問をしてみると良いと思います。

(1) ノンクリスチャンは全部、またいつも幸福で、クリスチャンは全

みことばとの会話 小林誠一著

部、またいつも不幸か。

(2) ノンクリスチャンの幸福は全部、またいつも罪が理由で、クリスチャンの不幸は全部、またいつも信仰が理由か。

(3) クリスチャン生活を中止して、ノンクリスチャンの生活に移れば、すぐ幸福になれるのか。

これを、詩篇73篇の作者アサフに聞いてみても良いのです。

少し考えてみればわかります。クリスチャンの生活も、ノンクリスチャンの生活も、それぞれ幸と不幸の混合です。そして、長いゆっくりした目で見れば、罪は多くの場合、人の成功繁栄をそこないます。成功繁栄から得るはずの幸福感、満足感をむしばみます。また、私たちが、悪魔にだまされてうっかり信仰生活をすてようものなら、必ずしもすぐに現世的な幸福が得られるわけでもありません。しかも信仰は失います。いわゆる、アブハチ取らずの結果に終るのです。

ですから、実はこの危険な心境は、一つの間違いで、霊的斜視、霊的近视とでも言うべき、魂の病気です。

おしゃべり

さて、こんな心境の時にはどうしたら良いでしょうか。

第一にしゃべりたくなりますが、それはいけません。

15節に

「もしわたしが『このような事を語ろう』と言ったなら、わたしはあなたの子らの代を誤らせたであろう。」

熱心なクリスチャンの一家がありましたが、その家の子供たちが大き

くなると、どうもすなおな信仰に育たないことがあります。理由はいろいろありまじょうが、子供本人の言葉によると

「私の父親は大体熱心なクリスチャンだったが、それでも一時期おかしくなつたことがあつて、教会から帰つてくると、牧師や信者の悪口をさかんに言つていた。そして時には『クリスチャン生活がバカらしくなつた』などとぼやいていた。それはほんの一時期で、その間も教会には行つていたし、間もなく元のように心からの熱心なクリスチャン生活が始まつた。しかしどうも、長い熱心な父親のクリスチャン生活は認めるが、それとともにあの時の、父親の言葉から、いわゆるクリスチャンの本音のようなものが耳についていて、いざという時、信仰の決心をさまたげるのですよ。」

つまり、かりそめの、一時期の、そこなわれた心から出た言葉が「子らの代」をつまずかせた、ということでしょうか。

そして、そんなことを人に言つてゐるうちに、自分の不信仰もエスカレートして来ます。引っこみもつきにくくなります。ほかの人にも不信仰にさそいこみます。

良いことはありません。

ですから

「今の私の心境は本当ではない。一種の病気だ。人に語るべきではない」

と自ら押えるのは大切です。これがまたその人の救いにつながるのです。

一体長い生涯に「いっそ会社をやめてしまおう」と一度や二度思わぬ人はありません。「家出をしようか」「夫婦別れをしようか」、あるいは

みことばとの会話 小林誠一著

は「自殺をしてみようか」とさえ何回か思つたのではないのでしょうか。

そのとき、すぐ実行しないで、気持ちの落ち着くのを待つたから、あなたの生活が今まで継続しているのでしょうか。

まして大切な、神と靈魂と永遠にかかわりのある信仰のことですから、忍耐と自制を持つべきです。やたらにしゃべりちらすのはまことにまずいのです。

しかし、思い切つてぶちまけたいのも人情ですから、場合によっては教会に聞き役の人があるのも良いことです。

「こういう時はあの人にかぎる。あの人なら何を話したつて大丈夫だ」

という人のところへ行つてぶちまけます。

「ははあ、この人は相当頭に来てゐるな。重態だ。ではゆっくり聞いてあげよう。」

そこであいつちでも打ちながら聞いてやるのも良いでしょう。そうすると、どんどんぶちまけてゐるうちに、一種のエネルギー発散になります。そのうちに飽きて来ます。疲れて来ます。

「いつまでもこんな駄々をこねても仕方がない」と自分で反省し、自分で気持ちが立ち直つて来ます。

まるで大人と子供ですが、大人になつて受け止める人が、教会にゐるのは良いことです。その代わり、自分も不信仰にさそいこまれたり、人に言いひろげたりしないようにしなければなりません。しっかりしてゐることが必要です。

さて、おしゃべりは注意を要するとして、次には、これらの問題につ

71/92

いて黙想するのはどうでしょうか。改まって「さあ黙想」ということでなくても、風が吹くように、水が流れるように人は物を思います。まして悲しい苦しい時に、私たちは考えこみます。

16節

「しかし、わたしがこれを知ろうと思ひめぐらしたとき、

これはわたしにめんどうな仕事のように思われた。」

「苦しみそのものより、その理由を理解できないのがもっと苦しい」などと言われます。理解しようとしていろいろ考えてみても、これはめんどうな仕事で、時間ばかりたって、疲れるだけで、らちがあきません。いわゆる「思いは千々に乱れる」のです。

人類の宿題

実はこの問題は昔から、宗教家、哲学者、文学者、その他たくさんの人たちが、考えて考えぬいてなかなかわからない、千古の疑問、人類の宿題とも言うべき事柄なのです。

ギリシア人の信仰では、人間の運命は、勝手に運命の糸をつむいだり、ハサミで切ったりする、気まぐれな三人の女神の手にあるとされ、どんな神々でも、この三人の運命の女神にはかなわない、ということになっていました。

昔中国の司馬遷は『史記』という長い歴史の本を書きましたが、その中で、

「天道というものは私がなく、常に善人に味方すると言われている。しかし伯夷、叔斉のような義人が、きびしく節操を守ったため首陽山で

みことばとの会話 小林誠一著

餓死し、孔子の弟子の中で最も孔子に推薦されていた顔淵は、生活に困って若死にをした。反対に盗跖という悪人は、悪党を集めて天下に横行し、物を奪い人を殺し、悪事と残虐の限りをつくしたのに、何の天罰も受けず天寿を全うした。こういう事態は私を困惑させる。はたして天道なるものは正しいものなのかどうか。天道是か非か」

と言っていますが、これが『史記』の事実上の序論だと言われています。

聖書の中でも「ヨブ記」全42章は、もっぱらこの問題を取り扱っているということが出来るくらいです。

ですから、アサフが考えてみても、なかなからちがあかず、「ただ目がさえてくたびれるだけだった」と言うのもむりがありません。

次に17節

「わたしが神の聖所に行って、

彼らの最後を悟り得たまではそうであった。」

「神の聖所に行く」というのは、お祈りをする、ということです。とにかく聖書を開いてお祈りをします。そしてすべてありのまま、いっさいの思いと問題を「水のように神の前にそそぎ出して」お祈りし、待ち望みましょう。それまでは魂の進展、問題の解決はありません。

個人的に祈りの中にしりぞき、祈りに打ちこむこともあります。

「主を待ち望む者は新たなる力を得る」(イザヤ40・31)

というお約束を果して下さるのは神様のご責任です。

また、いわゆる祈りの友と、心を合わせて祈る、ということもありません。

その時

72/92

「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう」(マタイ18・19)

とのお約束は成就するに違いありません。

また集会に出席することも大切です。

「集会に出席するのも気が進まないが、こんな気持でいつまでぐずぐずしていても仕方がないから行ってみよう。」

その時、祈りに答えて神様が「彼らの最後」を悟らせて下さったのです。

表面だけでなく、また一面の観察でなく、現在だけを考えるのではなく、窮極の真相、永遠の未来ということをおぼせて下さいます。

それによって、目が開かれ、アサフも疑惑不信仰から解放されました。

物事には一面だけということはありません。必ず別の面があります。事柄が単独ということはありません。幾つかの事柄が組み合わさっています。また物事は時間とともに推移して行きます。私たちの心の眼が一面的、近視眼的になっていると、物事を本当に正しく見ることはできません。祈りに答えて、神様が私たちのヒステリックな、せっかちな、早合点をいやして、落ち着きと健康な心を与え、そして今まで見られなかった窮極の真相、永遠の価値をわからせて下さるのは、本当にありがたい救いです。

会衆の中に、私の家内も座って一緒にお話を聞いています。牧師の家庭ですから、人と比べてみれば貧しいでしょう。しかし牧師さんであるご主人、つまり私は、家内に貧しさだけを与えているわけではありませ

ん。酒のみません、浮気もしません、乱暴もしません。その尊敬信頼を裏切るような低級下品な態度を示したこともありません。つまり、自分で言うのはおかしいですが、貧乏とともに、少なく見つっても十分満足すべき、感謝すべき夫の姿を示していると思います。

それを貧乏だけを取り上げてぐずぐず言うとすれば(家内は決してそんな事はありませんが)これは偏見やぶにらみです。

しかも人は次第に人生のコースを進み、浮いたり沈んだり、獲得したり失ったりしながら、老年を迎え、最後に死を迎え、そして神の審判を受けます。

その罪のさばきのとき、地上で罪と抱き合わせに獲得した富と幸福に何の価値があるのでしょうか。

その時、片目、片腕、片足を切りすてて不具になっても、永遠の生命、永遠の祝福を得たいと嘆くでしょうが、もう間に合わないでしょう。

その時すでに救われて、義とせられ、永遠の生命を持っている私たちクリスチャンが、滅びゆく彼らをうらやみ、嫉妬するのでしょうか。いな、クリスチャンの心は感謝とさんびにあふれるでしょう。

これが「彼らの最後を悟る」ということではないでしょうか。

ノンクリスチャンの持っていないもので、クリスチャンには与えられているもの、その尊さがハッキリするように、心の眼をいやしていただきたいものです。

病気の河馬

18節から20節まで

「まことにあなたは彼らをなめらかな所に置き、
彼らを滅びに陥らせられる。
なんと彼らはまたたくまに滅ぼされ、
恐れをもって全く一掃されたことであろう。
あなたが目をさまして
彼らの影をかるしめられるとき、
彼らは夢みた人の目をさました時のようである。」

ここにある人が、

「私は神を信じません。神に従いません。私は自分の方針によって自分の一生を送ります。私は福音を聞いたこともあるし、クリスチャンの生活も見てはいるけれども、私はクリスチャンにはなりません。」

そういう場合、その人の方針が最後にその人をどういうところに導いてゆくでしょうか。結末まで神様が放置なさる場合があります。案外その人は自分の能力次第で、抵抗のないスムーズな生活をするかもしれません。しかし、その「なめらかな所」は危険です。

ちょうど医者に

「もういいから心配しないで、これからは自由に食べたいものを食べ、
したいことをして気楽に暮らさない」
などと言われれば、これはもう絶望の宣告も同じです。神様から「なめらかな所」に置かれるのもそれと同じです。

最後に真相があらわれ、虚像が消滅します。その時、人々は夢がさめたようでしょう。どうかクリスチャンの心に重くのしかかっている虚像の消滅せんことを。

どうぞその誤った夢がさめて、信仰の眼の明らかにせられんことを。

21節、22節

「わたしの魂が痛み、わたしの心が刺されたとき、
わたしは愚かで悟りがなく、
あなたに対しては獣のようであった。」

「あの期間は、私の心は病気だった。魂は不信仰のために痛み、心は疑惑に刺されて苦しんでいたのだ。」

これらは、原語では心臓病の形容だそうです。昔は、心臓や腎臓は人間の感情の宿るところとされていましたが、これはそこに感ずる痛みのことだそうです。

「神様に対してわきまのないこと、まるで動物のようだった」というその動物は、これまた原語では「河馬」のことだそうです。まことにピッタリで、いわゆる「バカみたい」な状態でした。

悔い改めて回復した魂の眼で見ると、あのときはあわれな病人のようでもあり、すねたダダツ子のようにもあり、河馬が眼をむいたようでもあり、何ともおはずかしい次第でした。

しかしその間でもあわれみ深い神は

23節、24節

「けれどもわたしは常にあなたと共にあり、
あなたはわたしの右の手を保たれる。
あなたはさとしをもってわたしを導き、
その後わたしを受けて栄光にあずからせられる。」

実は、あの不信仰の中に沈んでいた時でも、神様は私たちを見すてず、

共にいてささえてくださったのです。そして今こそ、その教えをもって私たちを教え、さとして下さるのです。その神のあわれみとご真実こそ、私たちの魂の立ち直り、回復の原因でした。

そして、依然として愚かな私たちではあるけれども、神様は結局その恵みによって最後まで私を導き、その栄光にあずからせて下さるでしょう。

主を喜ぶ力

私の妹は、今足利で牧師をしています。彼女が子供のころの思い出を書いた文章がありますから紹介しましょう。

「私が小学校一年生のころ、五つ年上の姉と、その友だちと三人で、小学校の砂場であそんでいました。何があったかおぼえていませんが、私がすねて怒り、ムシャクシャした勢いで手さげ袋をほうりなげてしまいました。家に帰る時が来ても、姉はひろってくれないし、私も片意地で、困ったと思いながらそのまま帰ってしまいました。

夜の八時ごろになって、そのままは寝られず、母に打ちあけて話しました。

すると母は「二人で今から行ってさがして来なさい。大切な袋だから」と言うことです。

私の母はこうなったらもうダメですから、観念して、姉と二人で暗いいなか道を学校まで行って、袋はそのままあったので、拾って帰りました。とてもこわくて逃げかえりそうになったのですが、しかられるのがこわくて、姉と二人、お互いにはげまし合いながら頑張って行って来たので

す。帰って寝床に入っても、あんな暗い道を歩いて来たのが夢のようでした。

あとでわかったのですが、母はその時、そっと私たちのあとをつけて、一緒に小学校まで歩いて往復してくれたのでした。私たちは知りませんでした。母は私たちと一緒にいて、私たちを見守っていてくれたのです。

母はそういう、きびしい反面やさしい人でした。」

これはユーモラスな話ですが、母親の美しい思い出でしょう。この母親のように神様もやさしく、私たちがすねたような気分にいる時でも、お見すてにならず、回復に導いて下さるのです。 25節から28節
「わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。

地にはあなたのほかに慕うものはない。

わが身とわが心とは衰える。

しかし神はどこしえにわが心の力、わが嗣業である。

見よ、あなたに遠い者は滅びる。

あなたは、あなたにそむく者を滅ぼされる。

しかし神に近くあることはわたしに良いことである。

わたしは主なる神をわが避け所として、

あなたのもろもろのみわざを宣べ伝えるであろう。」

これは恵みに回復したクリスチャンの魂の声です。苦しい経験をしましたが、幸いな結論に達しました。

結論と言っても論理的なそれではなく、信仰の結論、愛の結論です。

共にいて下さる神様、キリスト、このお方の愛とうるわしさに、彼の

心は満たされました。地上であっても天国であっても、現世であっても永遠の未来であっても、神様の愛と神様を愛する喜びに、心は満ち足りて、太陽の前の星のように、ほかの物は魅力を失ってしまいました。そして地上的な意味での幸福と不幸、立場と境遇のいかに動かされず、信仰の喜び、「神に近くある」ことの幸福を経験する心の用意ができたのでした。

そしてこれこそ、クリスチャンの霊的な力の根元であり、「あなたのもろもろのみわざを宣べ伝える」伝道のエネルギーの源泉でもあるのです。

「主を喜ぶことはあなたがたの力です」(ネヘミヤ8・10)。

生活の結実（ヨハネによる福音書 15 章）

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいな状態にするのである。……わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」（ヨハネ 15：1～11）。

実り多き人生

この章のテーマは「まことのぶどうの木」です。あるいは「実を結ぶ人生」、あるいは、「実を結ぶクリスチャン」「実を結ぶ教会」のお話でもあります。

「実を結ぶ」とは、結果がはっきり出てくること、「実を結ばない」とは、結果が少しも見えないことでしょう。

勉強のために学校に通っても、いっこうに学問が身につかない。結果がないということではつまりません。お医者さんに通っても、何も結果がない、となるとこれは大変です。

結果が見えなければ、何でも続けてやる気がしません。

「どうも私の生活はむなし。実りがない。生きている張り合いがない」と多くの方が感じているのですが、もしそういう方が「どこかに、

みことばとの会話 小林誠一著

実り豊かな、むなしさを感じない生き方がないだろうか」とおっしゃるなら、その方にキリストは語られるのです。

「わたしはまことのぶどうの木です。わたしの父は農夫です。ここに結実があります」と。

「私はせっかくクリスチャンになったのに、何の結果も見えて来ない。これではクリスチャンになりがいがない。」

「私たちの教会は、伝道はしているが、なかなか結果が見えないので、伝道のしがいがない。」

「こんなことでなく、どうかもっと喜びと励み、自信とプライドのあるクリスチャンになりたい。教会でありたい。」

そういう願いに対しても、キリストは語られます。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人につながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。」

もし、キリストにつながることによって、豊かに実を結ぶようになれば、そこに楽しい、魅力的なクリスチャンと教会の姿が見えてくるでしょう。

キリストの私たちに対するご期待、ご要求も、私たちのキリストに対する祈りも、これが根幹なのではないでしょうか。

きれいなクリスチャン

8 節

「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、

それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。」

私たちのようなつまらぬクリスチャンが実を結ぶならば、神様が栄光をお受けになるとは不思議なことです。

太陽が昇る、雨が降る、花が咲く、そのすべては神の栄光です。無限大の宇宙、それも神の栄光です。神様はご自身の栄光を現わすのにご不便はありません。このすばらしい天地も一言をもってお造りになったのですから。

しかるに、尊いキリストの御血をもってあがなわれたクリスチャンが、その生活の中に、うるわしい実を豊かに結ぶならば、それをもって神様は栄光をお受けになるとは、何という尊いご期待でしょうか。

11節

「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。」

キリストはずいぶん犠牲の多い、ご苦労の多いご生涯をお送りになりましたが、いつも喜びを持っておられました。

「前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわないで十字架を忍ばれた」とあるように、十字架においてさえ、キリストは喜びを持っておられたのです。

それは、人間的な喜びとは別種の、想像のできない、天来の喜びでした。

実を結ぶクリスチャン生活の中にも、その喜びがあふれるとは、すばらしい約束です。

さて「豊かに実を結ぶために、キリストにつながっておる」ということについて、いろいろ学ぶことがあります。

一つは、9節にあるように、キリストの愛の中にとどまることです。一つは10節にあるように、信仰と服従をもってキリストのみ言葉の中に生活することです。一つは7節にあるように、祈りの中にキリストとのつながりを持続することです。

しかしそれとともに、2節には

「もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである」

と、もっと豊かに実らせるために、クリスチャンを神様がきれいにして下さるといってお約束があります。

もちろん「きれいに」と言っても、全部のクリスチャンの、男子はハンサムに、女子はチャーミングにして下さるということではないでしょうが、神様はクリスチャンのいっさいの罪をのぞき、汚れをきよめ、聖なる者として下さるのです。これは豊かに実を結ぶために、どうしても必要なお取り扱いです。

きれいな生活、これこそは十字架の賜物と言えます。

商売がもうかる、病気が直る、恍惚状態に入るなどということは、ほかの宗教にもあるでしょう。しかし、きれいな生活はキリスト教の専売特許です。

一体世の中の、不潔低級なものでも、人間にある種の喜び、満足を与えようという呼びかけがあったのに、私たちはそれを好まず教会に来ました。清潔な生活と、本当の幸福と、その両方を約束している聖書の教

えが魅力的だったから、それで私たちは世のものを避け、教会に来てクリスチャンになったのでした。

それゆえ、きれいな生活こそ、いつでもクリスチャンの魅力であり、感化力であるのです。

きれいな者だけが、神との深い交わりを保つでしょう。神に用いられるでしょう。

不品行な人でも政治家や軍人として成功し、不道德でも実業家あるいは芸術家として通用することもあるでしょう。しかし神様に用いられて豊かに実を結ぶためには、清くされねばならないのです。いまクリスチャン、牧師、伝道師が、ただ「キリストにつながって」いるときに、神様のお役に立つように神様は彼らをきれいにして下さるのです。

キリストの手入れ

枝が幹につながっている様子を想像してごらん下さい。朝行ってみます。枝は幹に落ち着いています。夜行ってみます。変わりません。冬は枯れ枝のように見えます。しかし、枝は幹にとどまっています。葉が出ます。そして豊かに実を結ぶ時が来ます。枝は幹にとどまり、生きています。これは一時的な熱狂や興奮ではありません。瞬間的なショックでもありません。最初の出発はあるにしても、キリストのお求めになるのは、「いつもキリストにつながっていなさい」ということです。食事の時、休んでいる時、ご奉仕の時、クリスチャンの魂の姿は、あのぶどうの枝のように、キリストにつながっているのです。

ローマ人への手紙 6章 4節以下

みことばとの会話 小林誠一著

「すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。……わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。」

これらのみ言葉は「神様が手入れしてこれをきれいになさる」そのみわざの奥義です。それはキリストの十字架によるのです。

私たちは死ぬべきものでした。たくさんの罪を犯した人間だからです。「罪の払う価は死だ」と言われるとおりです。

その反面、いくら罪人でも、自分の罪のために死ねば、つまり死刑になれば、もう罪の責任から解放されます。

すでに死刑になった死骸に対して、新しく発覚したもっと大きな罪状が示されても、それはもう問題ではありません。「すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。」

キリストが私たちに代わって、私たちのために十字架にかかって下さった、とはそういうことなのです。

信仰によって受けるとき、キリストの十字架は、私たちに対して、私たち自身が十字架の上に死刑になったと同じく有効なのです。

同時にまた、死刑によって、この人は二度と再び罪を犯さない者にな

ります。「すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。」

どんなに意志が弱く、また罪の習癖に深くとらえられた人でも、死骸になってしまえば、その人に対してもういっさいの誘惑は無効です。棺に入って刑務所から出て来た人には、黒服、黒ネクタイ、黒メガネをつけた、ボスからの使者も、なじみ深い情婦も齒が立たず、彼にはもう再犯のおそれはなくなりました。

キリストが私たちの罪のために代わって十字架にかかって下さいました。私たちは信仰によって、キリストとともに十字架につけられました。そして、罪に死にました。しかも「神に生きるためにキリストと共に死からよみがえった。今私の中に生きるのは私ではない。キリストである」という、ガラテヤ人への手紙2章20節の奥義は、キリストにつながっている者のうちに常に成就します。

キリストの十字架は私たちの救いのため、復活も昇天も、所詮は私たちの救いのためです。そして彼は聖霊をそそいで下さいました。聖霊はキリストにあって、私たちの中にとどまっています。私たちが悔い改めと信仰によってキリストを受け入れ、「彼につながれ」ているならば、キリストの死と復活の力は、聖霊によって常に私たちの中に働きます。それはぶどうの枝が、幹の樹液によって生きるのと同じです。そしてこのいのちは、私たちをきよめる力として働き続けるのです。

束縛からの解放

ガラテヤ人への手紙5章22節に、聖霊の実、すなわち人がキリストにつながっている時に結ぶ実の数々が記してあります。

みことばとの会話 小林誠一著

「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。」

こういう実を結んでいるならば、クリスチャンはもう律法の禁止条項の束縛から解放されます。こういう人を批評して「あの人はキリスト教の規則に束縛されて、無理な、不自然な、不自由な生活をしている」と言うのは当たりません。

自由で自然な御霊の実は、私たちを律法や戒律の束縛、神様のさばきや刑罰の恐怖からも解放してくれるのです。

子供を愛するお母さんにとって、子供を愛することは、自由で自然で幸福なことです。「子供を愛しなさい」「子供に無責任ではいけません」という律法や戒律に束縛されるものではありません。それは、決して無理でも窮屈でもないのです。

さてこういう、自由で幸福で、しかも自然に美しい実を豊かに結ぶクリスチャンがいたら、この人は魅力的です。感化力、影響力があります。その人のあかしには説得力があります。おそらくその周囲には、救いを求め、信仰を求める人が集まるでしょう。そして、結局この人は自然に、多くのクリスチャンを生み出す、つまり、もう一つの別種の実をも豊かに結ぶクリスチャンになります。

これこそ結果のある、なりがいのある、そして幸福なクリスチャンの姿です。

そこに「それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」また「わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」とおっしゃった、キリストのみ言

葉は成就するでしょう。

新改訳聖書では「きれいにする」が「もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます」と別の表現になっていますが、これはもう一つの意味です。

植物はほうっておくと、ムダな枝葉が茂ってきます。それでは栄養のムダ遣いになるし、日当たり風通しが悪くなります。害虫がはびこり、次第に枝がやせたり枯れたりしてきます。これは、実を結ぶさまたげになるのです。

ですから、農夫は「もっと多く実を結ぶために、刈り込み」をしなければなりません。

祈りをさまたげるもの、キリストとの自由な霊的交わりをそこなうもの、あかしとご奉仕の時間とチャンスを食いつぶしてしまうようなもの、これはクリスチャンが実を結ぶためのさまたげです。

キリストはこれを刈り取って下さるのです。

長くもないお互いの人生です。多くもない自由時間、豊かでもない才能、限られた可能性です。刈り込むこと、集中することなしに何ができるでしょうか。

勉強したかったらテレビを消しましょう。教会生活を守りたかったら、日曜日にはほかの計画はやめましょう。献金したかったら、ムダ遣いをしないようにしましょう。

ある人は「一生勉強をしたかったら、最初から将棋やマージャンなどの勝負事はおぼえない方がいい」と言います。一芸に秀でた人、何かをやりとげる人は、必ず目をつむって、ムダな枝を刈り取る人です。

ましてキリストは、私たちにムダな枝があればそれを刈り込んで下さいます。これはもう一つのキリストの恵みです。

誘われてもなかなか人は教会に来ません。また時にはクリスチャンでも、信仰生活も教会生活もうまくゆかず、途中で信仰を離れる人もあります。そういう場合、「キリスト教は無価値だ、排除すべきだ」と結論してそうなるのではありません。要はムダな枝を刈り込まないからです。それが次第にさまたげをなして来た結果ではないでしょうか。信仰を離れてサッパリしているわけではありません。

いつも「自分は墮落したのだ」という自覚があるでしょう。

満タンの服従

熱心な信者になると、日曜日はいそがしいです。私たちの教会でも、三十名以上の日曜学校教師たちは朝八時に教会に出勤です。日曜学校のご用をします。もちろん、次に礼拝に出席します。次に食事をします(私たちの教会はコロッケ定食です)。少し休んで、午後は数か所の開拓地の集会に分散してゆきます。館林教会でももちろん集会があります。夕食を食べると、二か所の開拓地で集会。熱心な人はその全部に出席し、また、ご用に当たるのです。

メンバーは、サラリーマン、主婦、教員、学生、さまざまです。

ある人は七時半に出勤します。身体障害者を教会のバスで迎えにゆくためです。この人もまた終日組で、全部の集会が終るのは夜の9時半です。この人は翌朝仕事に行くために何時に起きると思いますか。午前3時です。

ある家族は東京から、日曜学校が始まるまでに来ます。一時間半かかりますから、冬はまっくらで、途中で夜が明けます。夜の集会が終ってから東京まで帰ります。

ある小学校教員の若夫婦がいます。家庭を解放して、子供数十名、おとな十数名の集会をしています。日曜学校の教師を養成しようと、別の日に教師会をしたり、日曜日には一時間以上かけて、館林の集会に来るので、なかなかいそがしいようです。

こういう人たちに「休日にそんなにムリをして疲れてしまうでしょう」と言えば、「いいえ、これは私の喜びです。もしこの喜びを失えば、私は人生そのものに疲れてしまいます」と言うに違いありません。

この教員の奥さんが、ある日、小学生の子供と祈り会をしていました。

「百パーセント神に従う」というテーマを子供に教えようとして、コップに水をつぎながら

「これで何パーセント、こんなことではダメです」

などとやっていたら、子供に

「お母さん、百パーセントというのは満タンのことだろ」

と言われました。

「そうです。満タンに神様に従いましょう」

とお祈りしたそうです。

この母親はちゃんと三人の子供を育てています。大きい子でもまだ小学生、小さい子は赤ちゃんです。ご飯たきもおそうじもしています。

こういう人たちは、聖書を読むこととお祈りすること、集会とご奉仕だけで、その他職業や家庭のやむをえない用事のほかは、何もできない

でしょう。またする気もないでしょう。つまり十分刈り込んでいただいているのです。そして豊かな、幸福なクリスチャン生活を送っています。その喜びはあふれています。

どの国、どの時代、どこの教会でも、こういう人たちによって、神様のみわざは進められているのです。

実は私たちは、何が結実をさまたげているか自分ではよくわからないことがあります。

ですから、キリストに刈り込んでいただくためには、キリストの前にすわりこんで、ゆっくりキリストと相談しなければなりません。

キリストは決して強制をなさいません。私たちに、祈り、求めがないと、またお従いする心の用意がないと、黙って待っていらっしゃるので

す。私たちが祈り始める時に、従う心の用意がある時に、静かに語りかけて下さいます。

もし人が「私はキリストを信じません。受け入れません。罪を悔い改めるのはイヤです。地獄へ行くつもりです」と言ったらどうでしょう。ムリヤリに天国に入れるでしょうか。いいえ、静かに、根気よく、その人がキリストに同意し、信じ、服従するのをお待ちになります。

私たちの祈りに時間がかかるのは、こちらの気持が複雑すぎるからなのでしょう。かけひきがあるからでしょう。キリストの祝福はほしいのですが、キリストに従うのは苦手です。すなおに刈り込んでいただく用意がなかなかできません。

小さな舟に乗った人が、綱を投げて大きな岩にひっかけます。一生懸

命綱を引っぱると、岩が舟の方にはよって来ません。舟の方が岩に引きよせられます。

お祈りとは、そうしたものです。

「私を祝福して下さい。私の働きを助けて下さい」

と祈るとともに

「私の問題を教えて下さい。わがままで注文ばかり多い人間ですが、複雑で、しかも固い私の心を砕いて下さい。しもべは聞きます。主よ、語って下さい。」この祈りが大切です。

私が昔住んでいた、いなかの家の近くに果樹園があって、そのの主人と親しくしていました。

果樹の刈り込みは、よほど大胆にやらないとダメだそうで、自分では思い切った刈り込みはできないから、同業の人を頼んでやってもらうのです。

その代わり、今度は自分が先方の果樹園に行って、スパスパやってきます。そうしないと収穫が少ないそうです。

皆さん、キリストがあなたに刈り込みをして下さるのは、あなたの喜びがあふれるため、豊かな実を結ぶため、そして神様が栄光をお受けになるためです。

どこを刈り取ってもらわなければならないか、自分によくわからないように、私たちには自分のクリスチャン生活にどんな可能性があるのか、どんな展望があるのか、自分では知りません。私たちのクリスチャン生活のプログラムはキリストがお持ちになっていらっしゃるのです。そして、それはすばらしいものであるはずで

今のあなたには思いもよらぬほど大きく豊かに、キリストはあなたを用いて下さるでしょう。多くの実を結び、神の大きな栄光を現わす者として、私たちの生涯を用いて下さるはずで

今キリストがあなたの前に立っていらっしゃるのわかりますか。いや、むしろひざづめの場面です。キリストのひざがあなたのひざについているかもしれません。

今キリストのみ手に全く陥って下さい。キリストがあなたの中に隠していらっしゃる、すごい爆発力、すごい可能性が現われてくるために。

信仰の剣士（エペソ人への手紙 6 章 10～20 節）

「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」（エペソ 6：10，11）。

抵抗の排除

これは「クリスチャンの武装」の章です。なぜクリスチャンの武装のことが言われるのでしょうか。

なぜクリスチャンに武装が必要か、と言えば、クリスチャン生活はすなわち戦いだからです。

クリスチャン生活が始まると同時に、抵抗が始まり、クリスチャン生活を推進しようとする時に、そこに戦争があります。

そしてその抵抗は排除し、その戦争には勝たなければなりません。

それは、自動車が走り始めると同時に、重力、摩擦、空気、その他の抵抗が始まるのと同じです。

なぜ自動車、汽船、飛行機などがみな、いわゆる流線型に造られるのでしょうか。それは、最初から抵抗の排除とういことが計算に入っているからです。

クリスチャン生活も同じです。

「このように、キリストは肉において苦しまれたのであるから、あな

たがたも同じ覚悟で心の武装をしなさい。……それは、肉における残りの生涯を、もはや人間の欲情によらず、神の御旨によって過ごすためである。過ぎ去った時代には、あなたがたは、異邦人の好みにまかせて、好色、欲情、醉酒、宴楽、暴飲、気ままな偶像礼拝などにふけてきたが、もうそれで十分であろう。今はあなたがたが、そうした度を過ぎた乱行に加わらないので、彼らは驚きあやしみ、かつ、ののしっている。彼らは、やがて生ける者と死ねる者とをさばくかたに、申し開きをしないではない」（ペテロ 4：1～5）。

このみ言葉のように、かつては私たちも世の中の人と同じように、偶像礼拝と罪の中に生活していました。しかし、キリストを信ずることによって救われましたから、そういうことをやめて新しい生活に入りました。

人々はそれを不思議に思い、不愉快に思います。またクリスチャンの存在が、彼らにとって気づまりなものになって来ます。その結果、自然クリスチャンは仲間はずれにされ、孤立し、圧迫を受けるのです。

それとともに「そう孤立していないで折り合おう。一緒に調子を合わせてゆこう」という妥協のさそいもあります。

そういうわけですから、この罪の世の中で、清潔なクリスチャン生活を通そうと思えば、なみなみならぬ抵抗と誘惑を排除しなければなりません。また、その抵抗と誘惑のうしろにはいつも悪魔が働いているのです。

私たちは、こういう戦いに勝たなければなりません。み言葉が教え勧めているのは、第一に、み言葉と祈りにより、聖霊によって私たちが

「主にあって」すなわち主に結びついて、その結果「その偉大な力によって、強くなる」ことです。

しかし、どんな大力無双の人でも、はだか、素手では戦えません。周到に神の武具をもって武装しなければならないのです。

ですから第二に

「神の武具で身を固めなさい」と命じられています。

私たちの戦争は人間が相手ではなく、神に敵対する悪魔です。もちろん悪魔は目下この世界を支配して「この世の君」「この世の神」と言われますから、人間でも物質でも、快樂でも文化でも、いつでも私たちとの霊的な戦いのために用い、私たちとの戦いに動員をかけます。

しかし、私たちは当面するさまざまな戦いの中で、本当の相手は人間でなく物でなく悪魔であることを知るべきです。本当の戦闘は霊的な分野で戦われるのです。

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、……やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(12節)。

悪しき日

「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい」(13節)。

お話をしたように、悪魔はこの世の支配者ですから、クリスチャン、教会に対する戦いのために、いつでも、何でも用いることができます。いろいろなものが動員されて、あるものは迫害者として、あるものは誘

惑者として、私たちの前に立ちあらわれて来るのです。

ある時はふだん親切だった社長です。

ある時は家族です。

ある時は友人です。

ある時は職場全体、学校全体です。

ある時は襲いかかって来る、さまざまな出来事です。

ある時は快樂、ある時は趣味などなどです。

そういうふうに、特別に悪魔の働く「悪しき日」が来るでしょう。

そういう時に当たって、クリスチャンが「よく抵抗し」と言われているのです。すなわちこれは、「妥協する、姿勢がくずれぬ」ということの反対です。

「完全に勝ち抜いて」とあるのは「敗北する」ことの反対です。

「堅く立つ」とは「倒れる、信仰生活に挫折する」ということの反対です。

そういう勝利のために「神の武具を身につけなさい」と言われる、その神の武具とは何でしょう。

「真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう」(14～16節)などの武具です。しかし今、その一つ一つについての説明は省略しましょう。

しかし、これに続いて記してある三つの武具は特別に大切に、これは

クリスチャンの信仰を守るとともに、今度は悪魔に対する攻撃の武器となるものです。

すなわち

「救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈り、そのために目をさましてうむことがなく、すべての聖徒のために祈りつづけなさい」とありますが、ここに「神の言を取りなさい」「祈りなさい」「御霊によって祈りなさい」と、聖書と、祈りと、聖霊と、三つのことが書いてあります。これらは、もっとも大切な霊的生活と霊的戦争の武器なのです。

み言葉との会話

第一は「神の言」です。

私たちは神様のみ言葉、聖書の中に、話しかけて下さる神様のみ声を聞きます。一人で聖書を読んでいる時でも、集会で説教を聞く時でも、神様は聖書の中から語りかけて下さるのです。

私たちはまた、語りかけて下さったみ言葉に対して、祈りによって応答します。

感謝の祈りをささげることもあります。あるいは「今お語り下さったお約束を、私は信じます。このみ言葉の約束を期待しつつ、私は生きてゆきます」と、ハッキリ信仰をもって祈ることもあります。

あるいは、神様から「それは良くないからやめなさい」と警告を受け、時には「このことを実行しなさい」と指示を受けます。そのとき「はい、そういたします」と答えます。これが祈りです。

みことばとの会話 小林誠一著

反対に祈りの中で、私たちもいろいろ神様に求めます。また苦しいこと、つらいこと、困ったことを神様に訴えることもあります。

その祈りに対して、まず神様が答えて下さるのは聖書のみ言葉からです。

「祈っていた時に、これこれのみ言葉をいただいた」というのは、多くのクリスチャンの経験です。

ですから、聖書と祈りというのは、私たちと神様との会話なのです。

そして、この経験について、私たちを助けて下さるのは聖霊です。

聖霊の助けなしに、人間的な常識や学問で聖書を理解することはできません。まして、その中から神様の語りかけを受けることはできません。

「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」
(ペテロ 1 : 20、21)

また祈りについて

「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」(ローマ 8 : 26)

と記してあるとおりです。

ここに親子がおり、夫婦がおりまして、うれしにつけ悲しいにつけ、話し合うということがなければ、すでに二人は断絶でお互いは孤独です。

86/92

何か良いことがあったとみえて、うれしそうにしているのに一言も話してくれない。話してくれれば一緒に喜べるのに。

何だかさびしそうにシヨンボリしているのに、打ちあけてくれない。打ちあけてくれれば相談ができるのに。こういう状態はさびしいものです。

私たちと神様の間も、聖書と祈りと聖霊による交わりがそこなわれることがないように、この三つをいつもたしかに保持しなければなりません。交わりの断絶があっては、クリスチャン生活は成り立たないのです。

信仰と服従の両手

マタイによる福音書4章1～11節を見ますと、有名なキリストの「荒野の試み」の話があります。

キリストはここで、非常に苦しい経験をなさいました。

伝道のご生涯の開始の段階で、一人祈っておられました。花も咲かず鳥も鳴かぬ荒野に、四十日間を過ごされました。全くの孤独で、また飢えておられました。公生涯にお進みになるに当たっての、根本的なご方針が、まだ必ずしも明確ではありませんでした。

この間キリストは、しきりに悪魔の攻撃や誘惑をお受けになりましたが、これに対して聖書のみ言葉をもって勝ち、み言葉によってその魂をお守りになったのでした。

つい先ごろ、キリストはバプテスマのヨハネから洗礼をお受けになりましたが、そのときのご経験は次のようなものでした。

「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』」(マタイ3:16,17)

しかし、今この荒野で悪魔は言います。

「あなたはそれでも神の子ですか。それにしては、何という孤独で索漠とした姿でしょう。これが神に愛される者の、公生涯の出発の姿ですか。

あなたは現実に飢えて、生活に困っている。これではどこに神の祝福がありますか。天からの神の声もむなしいではありませんか。

あなたは何を手がかりにして、ご自分の生涯とわざを進めてゆくつもりですか。

まず自分のために奇跡をなさい。孤独や貧しさを脱却しなさい。神様のみこころは、あなたにもあなたを信ずる者にも、パンを与えず、現世の幸福、快樂を与えないではありませんか。

あなたは力があるのだから、自分にも会衆にも、現実的でわかりやすい『満腹』を提供しなさい。」

「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」(マタイ4:3)

しかしこの間、キリストの魂と肉体をささえていたのは、み言葉と祈りによる神様との深い霊的な交わりでした。それゆえキリストは、有名な申命記のみ言葉を引いて

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言
で生きるものである」

と、悪魔に答え、み言葉の力によって、悪魔の誘惑にお勝ちになったの
でした。

この場合、キリストがお取りになった方法は、特別にむずかしいもの
ではありません。

「聖書にこう書いてあります。だから私はしません」、あるいは「聖
書に書いてあるとおり、実行します」ということは、実は日曜学校の生
徒でもできるのです。

しかしこの場合は、キリストがみ言葉をお取りになった時、その切れ
味がするどく、強いものだったので、悪魔は撃退されたのでした。

なぜ同じみ言葉が、キリストの場合にそんなに切れたのでしょうか。
それは、「御霊の剣、すなわち、神の言を取る」その手が違うのでしょ
う。

私はほとんどスポーツができませんが、わずかに剣道だけ経験があり
ます。

テレビの時代劇などで俳優が持つ刀の持ち方は「くそにぎり」と言う
ので、あれではすぐ刀をハネとばされてしまいます。

実は、刀は左手でささえるのです。右手は刀に方向を与え、切る時の
圧力を与えるために軽くそえるように持つ。右手は決して握りません。

キリストが「み言葉の剣」を持つ左手は「信仰」です。右手は「服従」
です。

私たちも、この二つの手でみ言葉を持たなければ、み言葉は私たち自

身に対しても、また悪魔に対しても、切れ味よく力強いものにはならな
いでしょう。

み言葉の剣士

「御霊の剣」はこのように、悪魔とこの世の力から身と魂を守る武器
であるとともに、また攻撃の武器でもあります。もちろん人を殺す攻撃
ではなく、人を罪と悪魔の力から解放して救いに導くための武器です。

私が今強調したいのは、み言葉はみ言葉自身、力のある「御霊の剣」
「神の言」だということです。

エレミヤ書 23章 29節には

「主は仰せられる、わたしの言葉は火のようではないか。また岩を打
ち砕く鎚のようではないか」

とあります。

人の心にみ言葉と聖霊によって、神のきよさと神の愛が示されるとき、
鉄のように頑固で冷え切った心もとかされ、岩のように強情な心も砕か
れて謙虚に、すなおにされるのです。

ヘブル人への手紙 4章 12節には

「神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精
神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと
志とを見分けることができる」

とあります。

み言葉の前に立つと、自分でも気がつかなかったような、自分の魂と
生活の正体、本性が、また病状が明確にえぐり出されます。

そして真実と謙遜をもって神の前に出て、そのお取り扱いに服するのです。

これは人の救いの入口であり基礎です。

またクリスチャンの魂と生活の、健康と成長の秘訣です。

このように心を開いて神様に従う者に、いつもゆるしと祝福がそなえられているのですが、わたしたちはこのみ言葉を、人々に伝えるパイプの役目を神様から与えられました。

パイプに水を通そうとする場合、水がよごれないように、パイプがきれいであればなりません。キズや裂け目などがあって、よけいなものが混入しては困ります。水を純粹の状態を通さなければなりません。

私たちが神様からいつもみ言葉をいただいて、み言葉が私たちの心と生活を生かし、み言葉と祈りの中に、常に私たちと神との交わりが、自由で、生き生きとしている。そういう場合に、み言葉は私たちを通して、人々に伝えられてゆくでしょう。

そして、み言葉はその人々の中に、神の力、救いの力をあらわし始めるでしょう。

私たちはそれを期待したいと思います。

私は今、全部のクリスチャンが「神の言と、祈りと、聖霊による武装」を点検していただきたいと思います。そして「み言葉の剣士」として立ち上がっていただきたいと祈ります。

それぞれ、生活、立場、賜物、奉仕の姿は違いますけれども、お茶を飲みながら話す時でも、何か改まった会合に出る時でも、いつも「み言葉の剣」で武装してほしいのです。

みことばとの会話 小林誠一著

「近所の子供が二、三人集まっているから、お菓子でも持って行って、少し話をしてあげよう」という時、また「集会であかしをして下さい」「日曜学校でお話しして下さい」「結婚式で挨拶して下さい」と言われる時、そういう時に、お話の上手、下手でなく、あなたの手に「神の言、御霊の剣」があるでしょうか。

また私は、全部のクリスチャンの方々に、聖書の勉強を深く進めて、いろいろな訓練も受けて、ぜひ「信徒説教者」として立ち上がっていただきたく祈っています。

明確なメッセージ

パウロは「み言葉の奉仕者」として、つまり専門の伝道者、説教者として神様から召命を受け、生涯忠実にこのわざに奉仕して来た人でした。

エペソ人への手紙 6章 19節以下にパウロは「私がこのつとめを全うすることができるように、どうか祈ってほしい」と頼んでいます。

以下の祈りは、牧師信徒を問わず、また形式と場所とを問わず、み言葉の奉仕に当たろうとする人のために大切な祈りだと思います。

19節に

「わたしが口を開くときに語るべき言葉を賜るように」
祈ってほしいと言っています。

私も牧師の一人として、いつも説教のご用をしていますが、集会の時に明確な神様からのメッセージが与えられないで、何を話してよいかわからないことほど、苦しくさびしいことはありません。

実は私は度々そういう夢を見るのです。

会衆は非常な期待をもって大勢集まっている。時間は来ている。少しおそくなって仕度にかかり、ネクタイなど結んでいるのだが、説教の準備はない。何を話していいのかわからないという夢ですが、いつ見てもこれは一番恐ろしい夢です。

そうでなく、いつも語るべき明確なみ言葉、神のみこころであり、会衆にぴったりであるという、抜きさしならぬメッセージが与えられるように、自分でも祈り、人にも祈っていただかなければなりません。

また

「大胆に福音の奥義を明らかに示しうるように、わたしのためにも祈ってほしい」

と、三つのことがあげてありますが、その第一は「大胆に」ということです。

私たちは「み言葉を語らなければならない」と思うときに、非常な恐れを感じます。

キリストを恥じ、福音を恥じ、信仰の告白を恥ずるという弱さはだれにもあって、これがすでに一つの戦いです。まず「大胆」を与えていただかなければなりません。

また話をする以上はりっぱに話したい、いわゆる「賞賛を求め、恥辱を恐れる」のも人間の本能ですが、これもまた人を臆病にします。ですから、淡白になって結果は神にまかせ、確信と大胆と率直さをもってみ言葉を語れるように、祈りが必要です。

第二に

「明らかに示しうるように」

みことばとの会話 小林誠一著

とは、「ハッキリわかりやすく話す」ことです。これも大切で、そのためには研究も工夫も、勉強も訓練も必要ですが、大体腹藏なくホンネをずばり話す時には、案外明快な話になるものです。

政治家の話などはその反対で、なるべくホンネをあかさないように、ヌラリクラリと話すので、わかりにくいことおびたしいです。

ジョン・ウェスレーのところに、若い伝道者が

「なぜ私の説教には生彩がないのでしょうか」

と質問したら、ウェスレーが答えて

「失礼ながらあなたの説教は、率直さと腹藏のなさにおいて欠けるところがある」

と言ったそうです。

言葉の、あるいは表現の工夫だけでなく、全身全霊、福音の奥義に満たされ、感謝と喜びにあふれて、ほとばしるようにみ言葉を語るとき、多少口下手でも

「福音の奥義を明らかに示しうる」

のではないのでしょうか。

これはもう一つの祈りの眼目です。

第三は

「福音の奥義を示しうるように、わたしのためにも祈ってほしい」ということです。

「奥義」とは、本来人間の判断や学問に対しては隠されている、霊的、神秘的な事柄です。神様が聖霊によって、ペールをのぞき、明らかに示して下さることによってのみ知りうる真理です。

私たちは聖書の中に、福音の真理、救いの真理を学びますが、聖霊がそれを私たちの魂に明らかにして下さったからこそ、神を恐れ、罪を悲しみ、キリストを信じ、十字架の救いを受け入れることができたのです。

私たちの語らなければならないのは、この「奥義」であって、表面上の、一とおりの、聖書の物語、あるいは字句解釈ではありません。

どうか聖霊が私たちを助けて、私たちの心を「み言葉の奥義」の啓示に導いて下さるように。

また語る時には、聖霊が聞く人の心を開いて、み言葉を霊的に通訳し、示された「福音の奥義」によって、人が救いに、あるいは更に進んだ霊的な経験に導かれるように。

パウロは次の20節で

「わたしはこの福音のための使節であり、そして鎖につながれているのであるが、つながれていても、語るべき時には大胆に語れるように祈ってほしい」と言っています。

パウロは福音のために神様によって選ばれ、任命を受けた「使節」、つまり「み言葉の奉仕者」でした。その使命のために忠実に奉仕した結果、迫害を受けてローマの牢獄につながっていたのです。

このことは私たちに、牧師でも信徒でも、説教家でも日曜学校教師でも、あるいはもっと目立たない形であかしをしてゆこうとしている人でも、ご用のためには払わなければならない犠牲があり、困難が伴うことを思わせます。

それを逃げる人は、決して神様に用いられることはできないでしょう。

パウロはその犠牲と困難の中から

「語るべき時には大胆に語れるように祈ってほしい」と求めています。

そこに、み言葉による本当の感化力、説得力、すなわちあかしの力があるのですから。

「このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せずに、恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみまえに、すべての人の良心に自分を推薦するのである」(コリント4：1，2)

あとがき

小林牧師は人口七万人にみたない、館林市の田舎牧師です。毎週の礼拝でその説教に耳を傾ける人も、そう多くはありません。しかし、説教の中味は天下一品、御霊に満ちたすばらしいものです。

今回、説教集という形で、その一端を全国の方々に紹介できることは、私たち教会員にとっても喜ばしいかぎりです。

立場上、私が編集責任者となりましたが、その礎を築いてくださったのは教会員の柿沼美智代さんです。勤務が終ってからの時間をささげ、小林牧師の説教テープを何十冊というノートに筆写してくださいました。それらの中から、本説教集はクリスチャン生活をスタートしたばかりの人々を対象にしたメッセージを多く収録しました。もちろん、成長したクリスチャンも、み言葉を常に割り引くことなく語る小林牧師のメッセージからは、多くの恵みを受けるでしょう。この説教集が伝道に、またクリスチャン生活の成長に、大いに用いられることを願っております。

今回、編集、造本の上で、「いのちのことは社出版部」に大変お世話になりました。感謝します。

小林誠一牧師説教集「みことばとの会話」編集代表

館林キリスト教会幹事

江 森 五 男